
ドラゴンクエスト? ~ 異世界の勇者の生きる世界 ~

御徒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴンクエスト？ ～異世界の勇者の生きる世界～

【Nコード】

N4173U

【作者名】

御徒

【あらすじ】

前世の記憶がある世界を救った天使、いや勇者フェリアスナ・レフィルは墮天使エルギオスを倒したときのパーティと別れ、のんびりと日々を過ごしていた。

けれど転職してレベル上げをしようとし、ルーラを使用したところ違う世界に飛ばされてしまう。

前の世界と同じ、だが違う世界で彼女はどう生きるのか？

これはドラゴンクエスト？と？がクロスした小説です。あと、他サイトでも公開しています。ご了承ください。

一話 やってきてしまいました……（前書き）

ずっとやりたかったドラクエの二次創作！
お楽しみください。

一話 やつてきてしまいました……

初めまして、私はフェリアスナ・レフィル。

仲間からはアスナと呼ばれていました。

羽根と輪っかを失くしたけれど、一応守護天使です。

というか、一度世界を救ったパーティの一人だったりします。

現在はパーティを解散し、一人ゆったり旅をしています。

「ん〜、ミルドラスに経験値をあげつつけてどのくらいかな。結構経ったよね。そのたびに強くなっていくミルドラス……倒しづらくなってきたよなあ……いや、そりゃ経験値あげつつけてたら強くなるけどさ。でも一応倒せるし、まだやってない職にでも転職してチャレンジでもするかな」

ルイーダさんの酒場にて。

暇なので私はルイーダさんと話に来ていた。

まだ未成年なのでお酒じゃなくてリンゴジュース。お子様♪

ルイーダさんが私の発言に微笑して、

「そうね。魔法戦士で99レベルいたら全部コンプリートってことになるけど、最初から頑張ってみるのもいいんじゃない？ 最近と同じ職でミルドラスとかデスピサロを倒しまくってたし。たまには心機一転もいいと思うわよ」

言う。確かにこういうのもいいかも……

「そうですね。それではダーマ神殿に行ってきます！」

私はルイーダさんに行って席を立つ。

思い立ったらすぐ実行！それが私の性格の一つ。

さて行くかー！ と酒場を出て行こうと思った時。

ルイーダさんが声をかける。

「仲間はつくらないのー？ 前はいたみたいだけど解散したんでしょ？ 欲しいなら紹介するけど」

仲間。そう、仲間。

お師匠様のお師匠様を倒した（もとい助けた）後、ある理由から別れた人たち。

「……今はいいです。一人でいます」

ルイーダさんは「あら、そ。いつでも紹介するから」と言って、他の客と話し始めた。

私は何も言わずに酒場を出た。

そういえば忘れていたけれど、私は前世の記憶がある。

天使の上に、記憶があるってどれだけ特殊なんだと自分でも思うけど、それはしょうがないと思う。

私の前世はこんな世界で生きていたのではなく、機械が発達した世界の人間として生きていた。

魔法も魔物も戦いもない世界。

少しうらやましいほどに戦いが少ない世界だった。

なんでその記憶があるのかは不明だけどね……

ルーラでダーマ神殿にとぶと、早速転職した。

取りあえず買っておいた防具と武器を装備してウォル口村にルーラしようとする。

その時、妖精のようなギャルの格好をした少女……サンディが、羽根をパタパタと動かしながら肩の上にちょこんと座って話しかけてくる。

「久しぶり転職うー？ まあたーからやり直しなんてマジ面倒なんですケド」

「ようやく喋ったと思ったたらいきなり何さー。それに貴女は戦わないでしょ？」

「んー、そうだけど一人で最初からレベル上げて見ててハラハラするんだよねえ。」

見てる人の身にもなって欲しいんですケド。てかもの凄くお腹鳴ってるのに表情変わらないし。マジうける！」

うー？ うるさいなあ。消化中ですよ。悪い？

「消化中！ とおーにいーかぁーくっ、ルーラするよっ。いい？」

「はいはい。わかりましたって、アスナ。」

サンディはルーラに備えて服に掴まる。

そして、

「ルーラっ！」

私の周りに魔法陣が巡る。

瞬間、私は宙に浮き……

浮れ……

…浮かない？

┐
^
?
└

唱えたときの浮遊感がやってこない。

「ナニゴト?」と思ってもう一度魔法を発動しようとする、

「つっ!？」

突如周りが光で囲まれる。

「アスナっ！？ 何コレ、魔法が暴走してるってこと！？ でもルー

ラじやそれはありえな……」

サンデイが叫ぶが、途中で光にのまれて止まる。

そして止まった後に続いたのは。

「わっわああああああああああああ！？」

「助けてええええええええええええ！？」

……私とサンディの悲鳴だった。

視界が真つ白に染まる。

ルーラが暴走なんて例はないはずなのだけど、暴走するところなるのかぁ……なんて考えてみた。

サンディは驚きすぎて気絶したっぽい。白目は……むいてないね。

白目はむきたくないっていつてたけどさ、本当にむいてないはず
えって思っちゃうよ。

┐
⋮
h
?
└

真っ白のむこうになにかある。

なにか……影のような。

あるのはわかるんだけど、周りが真っ白ってか光に囲まれてるから逆光で見えない。

影にしか見えない……

「取りあえず行ってみようかな……」

ぽつとりと落ちたサンディを拾って前に進む。

やっぱり見えない。けど、近づくにつれて徐々に形が明らかになってくる。

……長方形？

それは縦に長い長方形のうえに半円をくっつけた感じのものだった。

「……？ なんだろ」

気になって早足になる。

色もわかるくらいに近づいて……

私はそれが何なのか気付いた。

「扉……なんでこんなところに一つだけ……」

見たこともない景色に一つしかない扉。

いったい何を意味しているの？

わからない。

もしも開いた瞬間、魔物が来たらどうしよう。

まだ少ししか戦ってない職業なのに。

レベル2で立ち向かえない魔物だったら……

「……どうすればいいんだろう」
迷う。

心の中で迷う。

けど、私はすぐに結論をだした。

——開けよう。

悩んで、迷ったとしても今は行く他ないのだから、道を進むしかない。

だから扉を開き、一歩足を踏み出した。

……けど。

並びながら頷き、

「だね。ようやく初めての町だ。休もう」

返事した。

すると白馬がひいている馬車の御者らしき人物が返事に反応した。
「ほう。もうすぐ町に着くのか……ようやくベットで寝れるわい。」

急ぐぞ、エイト」

御者は青年をエイトと呼び、ホッと息をついた。

だがその光景は奇妙だ。

……御者は、人間の姿をしていなかったのだから。

緑色の肌をした、魔物のような姿。

誰もが魔物と感じるその御者に、エイトは臆することもなく笑いかける。

ヒヒン、と白馬が一つ鳴き、小太りの男がやれやれといった表情で御者に言った。

「まったく……本当にトロデのおっさんが兄貴の主だなんて、考えられないですよ。」

それにトロデと呼ばれた御者がやはり反応し、けしからん！とでもいいそうな雰囲気で騒ぎだす。

「なにを！ わしはトロデーン帝国の王であるぞ！ その兵だったエイトの君主がわしであるのは当然のことじゃろうが！ 頭の悪い元山賊目が！」

「偉そうに！ 魔物の姿をしているくせにまったく戦闘に出ない癖してその扱いはなんでがすか！ 本当に兄貴がおっさんの部下なのか疑わしいがすよ。兄貴が言ったから信じてるですが、こんな主のもとでこんな良い人が出来るはずないがすよ！ だから……」

とそこで、エイトが二人（？）の間に割って入って、

「はいはいそこまで！ ヤングスは事あることに陛下に喧嘩吹っ掛けない！ 陛下もヤングスの挑発にのらないでください！」

二人を制止する。

二人はうーむと唸るものの、くだらない言いあいをやめた。

トロデはため息をつき、美しい白馬のたてがみをそつとなでる。

「……ったく。ドルマゲスさえいなければ、ミーティアとわしはこんな姿にならずに済んだのにのう……あやつめ、見つけ出して我が家臣が叩き潰してくれるわ！」

お前じゃなくて家臣（エイトはもちろん、ヤンガスも今のところトロデの中では家臣）が戦うのかよ……という突っ込みを、エイトとヤンガスはなんとか飲み込んだ。

「ともかく……早く行こう」

エイトは呟いて、また歩き出した。

……と。

「——つつつ——！」

声にならない悲鳴のような、そんなものがこの青空に響き渡った。

「へ？」

エイトは呆けた声を出してしまう。

思わず見上げた青空に、

……ひとりの少女がいたのだ。

私はそのまま空中を漂っていた。

扉があつたのはだいぶ上の方だったらしく、滞空時間が異様に長い。

……天使界にいたことを思い出す。

あの頃はちゃんと羽根も輪っかもあつて大空をお師匠様と飛びまわっていたのに。

……今は羽根も輪っかも、お師匠様もない……。

という、考えも一瞬で消し飛び。

地面が近づく。

どんどん近付いて近づいて、恐怖でサンディを放しそうになる。

「……………つつつ!!」

声にならない悲鳴をあげながらなんとかルーラを使用しようとするが、何故か使えない。

ただ流れに身を任せて落下していくのみ。

自分は一応、天使だ。

一度は人間になった。お師匠様のお師匠様を倒すために……
けれど、今は天使に戻っている。

そのおかげで、落下してもあまり怪我はしないのだけど。

流石に、この距離は、速度はまずい。

死ぬんじゃないか!? とか本気で思ってしまうほどにまずい。

人が見える。だけど、そんなことも気にしないほどに私は混乱していた。

「……………!!」

人影が何かを叫んでいる。だけどやはり私は（省略）

そして。

どツツ。

派手な音とともに地面に体から先に着地。

もちろん痛い。

痛いどころの騒ぎじゃないほど痛い。

死んでないことに微妙に困惑するけど、取りあえず今は痛みが勝つちゃって勝つちゃって。

「き、君大丈夫……?」

困惑した声が痛みに負けてる思考に入り込んでくる。

その声は、どこかあいつに似ている気がした。

ちなみに大丈夫じゃない。

見てわからぬか! って言ってやりたいです。

でも今はモチのロン言えません。

けど、なんとか痛みに勝って立ちあがる。

「ううつ……………あぐううつ……………痛い。」

「ふえ? 大じよ……………」

「大丈夫じゃないって見てわからないですか！ …… たあ、叫んだからまた痛っ……」

…… あうう。魔法戦士って回復魔法ないんだよね……。どっかで休めばなんとかなるかな。

そう思った刹那、青年の周りに魔法陣が巡る。

「ホイミ！」

静かに青年が言った時、少し痛みが消えた。

回復魔法のホイミだ。

ホイミ……… ということは、前世のような世界ではなく、同じ世界と言っことになる。

けど、明らかに見たことのない景色。

世界中を旅したはずなのに、それはありえないはずだった。

「…… えつとお、有難うございます。んで聞きますが、此処はどこですか？」

青年と横にいた男は驚いた顔をするけど、答えてくれる。

「此処はトラペツタ地方……… です。それがどうしました？」

「あの、ウォル口って知ってます？ セントシュタインとか」

「？ 何ですか、それ」

……… ？ 世界観は同じなのに場所は違うのかな。

そんなことを考えてるとき、青年がスツと手を差し伸べてくる。

「取りあえず近くに町があるのでそこまで送りましょう。なんで降って来たのかには触れませんが……… 魔物がいて危ないので」

「……… はい。」

今はレベル2なので、危ないは危ない。

いくら強力な武器や防具を身に着けていたとしても、レベルが低けりゃ軽く宝の持ち腐れのような感じか。違うような気もするけどさ。

だから彼の手をとった。

こうして、新たな旅が始まる。

もちろん、そうは思っていなかったけれど。
私が世界を救うことに関与することになるなんて……

一話 やってきてしまいました……（後書き）

念願のドラクエの二次創作です。

私は一番？が好きなのでずっと書きたいと思ってました！
でも他の小説もあるので更新不定期ですね。
うーむ、難しい。

誤字脱字、変なところがあったら教えてください。
感想は大大歓迎です！

【6月29日、間違いを一つ修正しました】

【10月1日、大きく修正】

主人公の説明（前書き）

今回そんなんです。

次は絶対本編行きますよ

主人公の説明。

作：どうも！作者です

ア：どうも。フェリアスナです。アスナと呼んでください。

作：え〜っと、今回はあれです。主人公の説明です。

ア：そうなんだよね。？の主人公はプレイヤーがつくるから設定とかやらないとわからないし

作：？の主人公も性格書いとした方がいいかなって思ったのですが、やめました。いづれ後書きら辺に書いと思うってます。

ア：ん。ところで私には特別なスキルがあるんだよね？

作：そう！主人公だしなんか主人公限定のスキルも欲しいし。エイトの勇気みたいなの。

ア：ん〜、取り合えずう……

作&ア：お楽しみくださーい！

エ：（……キャラ説で楽しめるか？普通……）

フェリアスナ・レフィル

> i 3 0 7 4 4 — 3 4 0 1 <

17歳。

？の方の主人公で、一応元守護天使。

性格は穏やか。ついでに言うとかなり天然。

色々丁寧と言っかなんというか……

まあ、やることなすこと全部綺麗ってことで。

外見は瑠璃色の髪に翡翠色の瞳って感じ。

ちなみにエルギオス倒したのは3年も前。

14歳でパーティのリーダーを務め、パーティの中でも一番強かった。

天使と言うのもあるかもだが、そこら辺は作者にもわかりません。

↑

サンディやアギロ、幽霊が見える。天使だから。
アギロから天の箱舟を呼びだすためのホイッスルを譲り受けてい
る。

？で使えるかは……それは本編で。

現在は小説にもある通り職業は魔法戦士。

初期設定は取りあえずレベル2。

これは少しあげといたということ。

ほんの少しすぎるけど。

スキルは、通常の魔法戦士のように、弓、剣、杖、盾、フォース。

あと一つ、特別なのは『原初』。

由来は……それも楽しみに。

原初は主に？や？以外の魔法や特技などが多い。

前世の記憶がある彼女ならではのスキルなのだ！

ア：まさかこれで終わり……かな？

作：千文字いかなかった……

ア：……次回はあれです。本編です♪

作：話そらした！わかりやすいやり方でそらした！

ア：そういうのは言わないでおいてよオ。

作：ンじゃま、次回を待っていてくれると嬉しいです。

作&ア：ではまた！

主人公の説明（後書き）

っていうのは置いて、まあこれがアスナさんの説明です。
かなりの天然というのは次回から早速発揮されるかも？
ん、変わったキャラなのかもです。
では

【三回目の画像＋。大して変わらない……？】

二話 道のりは遠いよ。(前書き)

ようやくトラペッタに到着。な話です。
此処からすでに伏線が張られていますね！
早いです……

二話 道のりは遠いよ。

「もうすぐ着くよ！」

青年……確か、エイトさん？が、声をあげた。
どうも〜フェリアスナです。

現在、異世界と思われる世界に来ております。

魔法とか、そこら辺は同じだけれど見たこともない世界に。

世界をすべて見た私に、それはあり得ないんだよね。

おまけにウォルロもセントシユタインも知らないらしい。

サンデイも気絶したまんまだし……なんか無性にサンデイのギャル口調が聞きたくなったよ……

エイトという青年の外見でまず目を引くのは、頭に巻かれたバ
ンダナ。

こげ茶色の髪と瞳がその赤を引き立てているようだ。

少し見てて気付いたことは、ずっとにこにこと笑顔を絶やさない
こと。

これ、違う視線で見てたら怖いよね……。

ちなみに彼が羽織ってる黄色い上着？のポケットにはひょっこり
とネズミのトーポが顔を覗かせている。

チーズをあげると火を吐くらしい。

これまで様々な魔物を倒して来たけれど、こんなネズミは見たこ
とない。

魔物ですらないしネズミですらない？

誰にもわからないらしいけれど。

そのエイトを兄貴と慕っているおっさんはヤングアスっていうらし
い。

とげとげな帽子（確か卵の殻だった）をかぶっている元山賊。

なんでしたっているかは教えてもらえなかったけど。

とげとげ帽子の中はどうなっているかはやはり誰にもわからない。

本人以外はね……

トロデさん？とかはともかく、今はエイトの言つとおり町の近くなんだよ。

町まで届けるって軽く言われたけど、結構時間かったな……何日かかったと思う？

三日だよ！

どんだけかかってるのさ……

あ、そいえば町の名前って……

「町の名前ってさ、虎だったよね？」

「！？なんで虎なんでですか！」

ヤンガスさんに突っ込まれた

ん、虎じゃないの？

「んう？違ったつけ……ん、あ！ペッタペッタかつ！」

「違うでがすよ！」

「えええー！？違うの？………虎ペッタンだつ……」

「どんだけですがか！トラペッタでげすっ！」

なにやら怒られた。

あ、そか。虎じゃなくてペッタペッタでもなくてあと虎ペッタンでもない。考えればトラペッタだけだね。↑意味不明

そういえば、この人たちは私が異世界から来たってことを知らない。

ま、当然だよ。教えてないんだもん。

それでわかったらどこぞの超能力者だよねん♪

ともかくこの世界の住人と思ってる彼らは私を取りあえずトラペッタまで送ろうと思っている。そこまでいいかな？

ンでもって私は無一文。

何故かって？ほとんど使っちゃってるからさ！（爆）

飛ばしたけどルイーダさんの酒場からでたときお買い物してるんだよね。

武器&防具を。

前、魔法戦士ちよびつとやったときは安物だったから……
買い直したんだ。

どうせすぐお金貯まるだろうしって。
でも！

此処は未知の世界で、此処はどんな魔物が出るのか想像もつかない！

戦いのときは馬車とともに待ってる状態で、戦闘見れないし……
ああどうしよう。

ついに作ったばかりの剣の出番！？
なんか不安で使ってない剣があつて、情報によればべらぼうに強い剣！

それで倒せればなんとかお金とか稼げるよね……
あとは宝の持ち腐れ状態の私の手に負える魔物であるかを祈るのみだよ……

……と、そんなことを考えてる私に声かけられる。

「アスナさん、着いたよ」

めんどいから名前はアスナで通した。

……で、何処に？

ああ、虎ペツタか。↑漢字じゃありません。

私は空の彼方の彼方の彼方まで行ってついに異世界まで吹っ飛んでいた思考の糸をなんとか手繰り寄せ、頷いた。

本当に異世界の方ですっ飛んでたのかな？

それは本人でもわからないね！

私は小走りでエイトさんたちについていった。

なんか、初めての町ってわくわくするよねっ！

そうだよね！？（確認。）

「おおおっ！ ついに着いたんじゃない！

確か此処は憎きドルマゲスの師がいるらしいのお。

これでようやく奴の情報が得られる！

奴を倒す日も遠くはない！！」

トロデさんが言った。

……えつとお……

「おっさん、気が早いですがよ。たった一つの情報でそうはうまくいかないです。」

私が言おうとしたことをヤングガスさんが言ってくれた。

というか、情報次第だね。

トロデさんは「うむう……」と唸る。返す言葉もないのかな。

そこでエイトさんが急に立ち止まって、私は転びかける。

……どんくさいと言うなよっ！一応世界救ったんだからねー！
エイトさんが急に立ち止まるからだよ！↑人のせいにする人発見。
でもさ、なんで急に立ち止ったの？

「……ね、アスナさん」

エイトさんがこつち向いて言ってくる。

「ん？なに？」

私は聞いた。なんだろ？

「……これまで聞かなかったけれど、君は何処の出身なんだ？あと、なんで落ちてきた？」

私は、かすかに自分の頬が引きつるのを感じた。

頑張つて顔には出さないようにしてるけど、こういう話にはぎくつとする。

だつて異世界とか言ったら明らかにイタイ人つて思われるよね。

だから言わないのさ。

でも、それ以外もある。

私の出身地……天使界。

それを詮索されたくない。

うっん、嘘つくしかないのかな。

名前もニックネームとはいえ、本名じゃないしね。

こんな良い人たちに嘘つくのは忍びないけどさ……

「私の出身地はウォル口。聞いたことないだろうけど、変わったところにある村なんだ。」

あ、棒読みになっちゃった……
まあいいか。

でも、まだ危険は残ってる。

「……なんで落ちてきた？」
ですよね……。

そ言ってないもん。スルーしてくれることを期待してたんだけど……

駄目ですか。

エイトさん、目ざといもんね。

町の樽を見逃さないところからわかります。はい。

「ええとお、んと………」

うつうつうつ。思いつかない……。どしよ。

……その時。

久しぶりに聞く声が聞こえた。

「ここは本当のこと言っちゃいなよ。天使ってことを伏せてれば大丈夫っしょ」

め、女神さまッ!?

……じゃないけど。

この口調は、みんなわかるよね!? (またもや確認)
サンディだよ!!

私の相棒! サンディだよおおおおお!!

やっと気絶から回復したのか!

こんなちっこい姿だけど今の私には女神に見えるよ
「今軽く失礼なこと言っただよように思えますケド……」

あたり! にやはっ ↑

私は小声でサンディに言う。

周りの人にはサンディの姿と声はわかんないからね。普通に言ったらそれこそイタイ人ですよ

「ん。なら言っちゃおか。あんがとっ」

簡単に決断。あれ？ 悩む時間が皆無だな……

ま、こうして私は話した。

といつても異世界にとんだあ！ ってことだけど。

もちろん、これまでの話は伏せて。

話したのはルーラしようと思ったらなんかよくわかんないけどとばされました。ってことだね。

魔法戦士とか言っていないよ。この世界は職業はないみたいだから混乱するだけだろうし。

エイトさんと、あとの二人？ も聞いてくれた。

エイトさんは「ルーラが暴走……そんなことが……」とかぶつくさ言ってる。

というか、この反応だとさ。

「信じてくれるの？」

そう。エイトさんの呟きの内容からして信じてるって感じじゃん。三人？ は当然とばかりに、

「「「当たり前じゃん。」」」

どきつぱり」

気持ちいいくらい言いきれちゃったよ。

サンディが「どんだけお前ら善者なんだよ。」と突っ込むほどに。なんかこういうタイプって、前世で見たドラクエの主人公のパーティとかにありそう。

あれ？ ということは現世で元いた世界もドラクエだったのか！

↑今頃か。

いやあ、気付かなかったなあ。

「あ、馬鹿がいる。」by 作者 ああもつうるさいうるさい！ 作者は黙ってなさいっ

「……なら、一緒に行く？」

私は、エイトさんが言った言葉を一瞬理解できなかった。

「……………はい？ なんで？」

思わず呆けた声。

この話の流れでどーやったらこうなるのか……
なんかぼけぼけしてたらちゃんと答えてくれた。

「だって君、行く場所ないだろ？　なら無一文できついだろうしさ。」

無一文つてばれたあああああああっ！

なんでわかんのか？

「顔に書いてあるよ」

読まれたっ！！

これめざとい関係してんのかな……

いや、それ置いとこうか。うん。

「……いいのかな」

小声でサンディに聞く。

……そこは長い間一緒にいたサンディに聞いた方がいいと思ったから。

サンディは肩に乗ったまま、頷く。

「いいんじゃない？　いい加減仲間作りだよ。ダチがルイーダさんだけとか寂しくないワケ？」

「……そか。」

またも小さく呟く。

それからエイトさんたちに向き直って、

「そちらがいいのなら、お願いします！」

笑顔で言った。

エイトさんも笑って、

「もちろん！」

答えたんだ。

+ ・ + ・ +

「へえ、綺麗な馬さんお姫様だったんだ！」

「そうなんだよ。って疑わないんだね。」

「？ 綺麗でなんか気品が備わってるって感じだから、言われてみれば〜って」

「（……単純だな）」

「なんか今、すごく失礼なこと考えたよね？」

「い、いや。考えてないっ！」

今、私たち一行は町の中を探索していた。

トロデさ……トロデたちは待つてると言つてあの場にとどまつて
る。

なんで言いなおしたかつて？みんな自分のこと呼び捨てで良いつ
て言つたから。

トロデは「ミーティアと同じ歳じゃ！ だから良い」と言つて。
ミーティアっていうのはさっきエイトが言つてた姫様のことなん
だ。

人間のときどきなんだつたんだろうね。みたいなあ。

とりあえずトロデとミーティアさん（許可もらつてない、という
かもらいようが無いのでさん付け）を残して町をうろろろしている
つてこと。

ンでもつて今出ている話題は……

「ほら、武器買つてあげるから選んで！」

……武器です。

私が持つていた鞆はルーラ暴走時にどつか行つてしまったみた
い。

だからお金のみならず道具全部ないんだよ（泣）

あああ……なんて不運なんだろ……私。

エイトたちは私にあげられるだけのGを渡して歩いてつた。

取りあえず私の使える武器は確か……

魔法戦士だから、剣に盾に杖に弓に、後は……

なかった！ スキルと混同しちゃつたっ

ま、一番使うのは剣かな？

なんの剣があるんだろ。

「……人のお金で買うのはあまり気が乗らないけど、取りあえず剣でなにかありますか？」

店員に聞いてみると、店員はなにやら紙を差し出す。

そこに書かれているのは、ひのきのぼうだとかどうのつるぎだとか。

いずれも初心者専用の剣だ。

わ、私をなめてるの？

あっちのどうのつるぎよりは切れ味が良いようだけど、ひのきのぼうとか剣ですらないような気がする。

というかレベルは今は低いけれど、私魔法戦士以外は全制覇してるし……

その中で剣と短剣は得意中の得意なんだよ？

それは転職した今でも変わらないハズ。

なんか色々とむかつく。

なんで飽消えたんだろ……

と、そこで私はあるものを見つける。

店のテントの奥の方にある、風変りなもの。

あれは……前世で言うと、刀……というもののかな。

あれはよさそう。

「あの、奥にあるのは頂けませんか？」

言うと、店主は目を丸くする。

なんでだろうか。てつきり即答でだめだとか言われると思ってた。

「……？ どうかしたんですか？」

聞いてみた。

すると答えが返ってくる。

「いや、あの……瑠璃色の髪に翡翠色の瞳の少女が此処を訪ねてきて、あの剣を選んだら渡せと……」

あの変わった剣はいつの間にか置いてあったんです。紙が添えられてあって。

本当に来るとは思っていなかったんですよ。

……この剣はただで差し上げます」

「思いもよらぬ答えが。」

そんなことって、有り得るのか？

きつとこの世界で前世の記憶があつて、しかも日本人で、姿が一致するのって私くらいだろうと思う。

刀というのが真つ先に出るのは日本人が多いのじゃないかと。

だから……この刀の持ち主は私を知っているの？

前世のことは話した覚えがない。いや、一回はあるんだけどその人は亡くなってる。

そう、今はもういない……

じゃなくて！

一応受け取る。ただならいいよね。

まあエイトたちを探して合流しようか。

二話 道のりは遠いよ。(後書き)

「キャラ達の後書きコナナ」

作&ア「後書きコナナ！」

わーわーぱちぱち。

作「初めての後書きコナナですね！」

ア「今後は違う人も出るんだよね？」

作「モチのロンでございますよ！」

ア「古いねー今じゃあまり聞かないね。」

作「うつー！まあそこは置いて、エイトさんのことを聞こうかな。」

ア「えと、基本的に穏やかなのかな。大体僕って言う人のような口調だけどたまに俺って言うような人の口調になるよ」

作「なにそれわかりづらいな。」

ア「後々出るよね。」

作「うん。ということできななり終わっちゃいます。では！」

エ「早！」

誤字脱字、変なところがあったら教えてください

なんか質問会ったら受け付けます。大歓迎！

リクエストも出来る範囲なら受付ます。

なんか作者やキャラたちに言いたいことがあったらそれでもOKです！

ではっ

三話 方向音痴な私が行きついた場所はさ……（前書き）

お願いされましたな回です。
早く戦闘書きたい！

三話 方向音痴な私が行きついた場所はさ……

「あれ？ エイトたち何処行つたのかな」

私にとって異世界の町、トラペツタで私はエイトたちを探していた。

場所は先ほどいた武器屋から大分離れて井戸の前。

なんとなく歩いていたら此処に着いてしまったのだけど。

「……でもさ、歩いてて普通に井戸の前に来る私って、何よ？

自分でもわからないなあ」

本当はトロデのところに戻りたかったんだけどさ……

なんでこんなところに？

——そう言えばかつての仲間たちに方向音痴ってよく言われてたっけ。

懐かしいな。

……みんな、元気にしてるかな。

アストにナーシュ、そしてキリサ。

自分より年上で、けれど同じ歳の仲間として扱ってくれた仲間たち。

共に世界を救った戦友たち。

解散して以来、ずっと会っていなかった。

「……仲間……仲間、ね。」

本当に懐かしいなあ。

最初、エイトに会ったときに似てると思った。

レイジに。

レイジとは、今はもういないもう一人の仲間の名だった。

外見はそれほど似ていないのだけれど、雰囲気は似ていたと思う。でも思い違いなのかな？

口調も違う。雰囲気も始め感じたように似ているとは思えなくなっていた。

なら、なんで似てるって思ったんだろう？

そんな、思考の中で。

私は人が騒いでいることに気付いた。

「っ、何事？」

有名人がいるだとかの騒ぎじゃないことは明らか。

人々の声は恐れているかのような声なのだから。

魔物が来た——？

人が集まっている所まで小走りで近寄り、何があったのかを確認する。

そして人ごみの中、かすかに見えたのは……

緑色の肌をした化け物と、美しい白馬。

もちろんトロデとミーティアさんだ。

「魔物だ！」

「魔物は出てけえ！？」

「こつちを見たぞっ！？」

「なんて醜い姿なのっ……いやぁ！？」

何もしていない（慌ててはいるけど）のに、次々と罵声が飛び交う。

というか、なにもされていないのに何かされたかのような悲鳴をあげる女性までいる。

……そうか。やっぱりトロデさんは魔物に見えるのか……

初めてみた時、魔物だと思った。

けれどエイトの説明によるとトロデは人間で、呪いでこの姿にされてしまったという。

しかもトロデーンという国の王様だったらしく、滅んでしまったらしい。

ミーティアさんはその国の姫さまで、馬にされてしまった。

……トロデでトロデーンて（おい

でも城が滅びたって、なんかルディアノ城思い出すなあ。

あそこで起きたのは少し悲しいことだったのかもしれない。

……じゃなくて！

「ああもお、助けなきゃ……」

そう小さく呟いた瞬間、トロデに向かって石が投げられる。そしてそれをきっかけに次々と石が投げられて。

私は体を縮めて跳躍しようとする。

その時だった。

「ヒヒンっ！！」

ミーティアさんが声をあげてトロデをかばう。

私はそのまま跳躍し、一気に二人の元までたどり着いた。

まさか人が来るとは思わなかったのか、町民たちの石を投げる手がとまった。

タイミング良くエイトたちも駆けつけ、取りあえず町を出た。

+ . + . +

ミーティアさんがひく馬車の音がガラガラ……と草原に響く。

軽いほうの音なのに、重く感じられた。

ミーティアさんの心情をあらわしているかのように。

トロデはふう……と息をつく。

「やれやれ、酷い目にあったわい。わしを誰だと思っているのじゃ！ まったく……」

人は見た目ではないと言うのに……情けないわい。」

その声もどこか悲しさが入り混じっているかのようにだった。

ヤンガスはそんなトロデに珍しく同意。

「ふんふん。まったくその通りでげすよ！」

何故同意したのか……私にはちよつと理解できなかった。

トロデが気を取り直して、と言うように頷いて、

「……ときにエイト、ドルマゲスの師であるマスター・ライラスは見つかったのかのう？」

その言葉で一気に視線がエイトにむく。

しかしエイトは苦笑。

見つからなかったということなのかな？

問おうとするとその前にエイトが話し始めた。

「マスター・ライラスさんは見つかりませんでした」

トロデがその言葉に反応。

「なにに？ お前が見つけられなかったとは珍しいのう。」

「……えと、申しにくいのですが……マスター・ライラスは死んでいたのです。」

瞬間、私も含めてエイト以外のみんなは驚いた。

ヤンガスも驚いている所を見ればこつちも別行動だったのかも。

「なんと！ 亡くなっていたとは……むむむむむ。」

トロデが声をあげ、辺りは魔物もいるはずなのにしんと静まった。

……気まずい。

なにかしら言わないと……

そう思った時、トロデがまた口を開く。

「なら仕方が無い。元々我らが追っているのはドルマゲスなのじゃから自力で探すほかはない。」

よし、そうと決まったらさっさと準備をせい！ ライラスがいない今、此処に用はないのじゃ。

こんな町、もう出て行ってやるわい！」

そう叫ぶように言ったトロデ。

余程さっきの騒動が気に障ったみたい。

エイトたちも賛成し、次の村に行くことを決定。

「出発する——」

エイトが言いかけた時、

「あつ！ ……あのつ、」

か細い声が聞こえた。

みんな声の方に振り向く。

するとそこにいたのは可愛らしい少女が立っていた。

歳は……私と同じくらい？

トロデを見て怯えないとは、よっぽど肝がすわっているとって
もいいのかな。

「お嬢さん、わしが怖くないのか？」

私が聞きたいと思ったことを聞くトロデ。

少女は頷く。

「夢で見たんです……人でも魔物でもない者が此処に訪れると。その
ものが願いをかなえてくれると」

夢で見た？ 私が夢で見る前世の記憶とはまた違う、未来を？

この子はいつたい何者なのか……

予知夢とかで占いでもしてる子？

占いかぁ……シャルマナ思いつから嫌です。（あっちは呪術師
だけだ）

「人でもなく魔物でもない？ それはわしの何か？」

「はい。私はお願いがあつて……」

「ふむ、まあよい。見ればミーンティアと同じくらいの歳。わしらの
ことがそなたの夢に出てきたと言うが、奇妙なことじゃのう。よく
わからぬ話じゃ」

誰でもそう思うよねってか私さつきから全然しゃべってない
じゃなくて。

少女がまた口を開く。

「あつ、私はユリマと言います！ 占い師の娘です。よかつたら家
まで来てくれませんか？ 詳しいことは家で話そうと思うんです……

町の奥の井戸の前の家が私の家ですから来て下さいね！」

「へっ？ あ、ちょっと待っ」

私が言い切る前にユリマさんは走り去ってしまった。

もしかして私のこと嫌いなのかな……とは考えません。うん。
「考えてるじゃんとか突っ込まないよーにね！ by 作者。」

というか、町の奥の井戸って……

「私がさつき行った場所じゃないの？」

「え！？ いきなり何アスナー！！」

急に言ったから驚かれたよ。しゃあないか。

まあ説明しようかね。

「あの後君たちと合流しようとしてたら道迷ってさ、したらさっきユリマさん？ が言ってたところに着いてたって話です。」

説明終了。

あつけねえ

「ああ、そうなんだ……でさ、アスナ、武……」

「エライっ！」

「は？」

今度はエイトの言葉が切れた？

ぶ……ってなにさ。

『アスナ、武官弁護士エル○インって知ってるかい？』

こつ言おうとしたのになって有り得るわきゃねえよ。

前世での話だからねえ。

つか古い話を持ち込んだな私……

「作者の趣味です（笑）」おい作者あ！

というか、エライって言ったのトロデ？

何の話かな？

「えと、トロデ何が偉いの？」

「まったくわしを怖がらないとは！ 流石は姫と同じ年ごろの娘じやな！ よし、おぬしら助けに行つてやれ」

「おっさんはどうしてるのです？」

「わしか？ 此処でミーティアとともに待つておるよ。騒がれても面倒だしの」

トロデがそう言った時、ミーティアさんが言つてらっしゃいと言っているかのようにヒヒンと鳴いた。

「そうかあ。夢で見たつていうのならドルマゲスのこともわかるかもねえ！」

私は言ってみる。

すると何故かみんなキラキラとした瞳でこつち見てた。ナニゴト？

「『『そうかその手があったか！（でがすか！）』『『

え。考え付いてなかったのかい。

つかヤンガスだけ『でがすか！』だからなんか綺麗にはもらない。
KY？

「酷っ！？」なんで言っていないのに反応するのさ！ てかKYわ
かんのか！

「……取りあえず言ってみようか」

「——ん！」

「でがすね！」

エイトの声とともに私たちは返事する。

そして私たちはユリマさんの家に向かった。

三話 方向音痴な私が行きついた場所はさ……（後書き）

ア&作「後書きコゝナゝ！」

わーわーぱちぱちと。

ア「ユリマさん出てきた！最初のボスの予感」

作「なんでそれ知ってるんですか？」

ア「此处は後書きコゝナゝだからなんでもありなんだよ！」

作「ンなもんか……」
「というかさ、そろそろ後書きコゝナゝっての
変えようよ」

ア「思いつかないから放置してたよね」

作「ええ。まあ質問でも受け付けよっか」

ア「うん！」

というわけで質問お待ちしてます！

誤字脱字、変なところがあつたらお知らせ願います！感想も待って
ますよ！

普通に適当でもいいですよ！

【H23・7月22日、ちょっと変更しました！】

四話 急展開な気がしますません？いや同意を求めてもなあ……（前書き）

今回は急展開？な感じです。

四話 急展開な気がしません？いや同意を求めてもなあ……

コンコン——ガチャ

エイトはドアにノックし、そのままドアを開けた。

場所はユリマさんの家。

道に迷ったときに見た家の中である。

そこにはテーブルがあり、透き通った水晶が置かれていた。

これが占いに使う水晶なのか？

——なんか、ただのガラス玉に見える。

私はそう思った。

エイトの話によるとこの町の占い師……ルイネロは全てをあてるほど腕の良い占い師だったらしい。

この町にいる占い師は一人だそうだから、ユリマさんのお父さんに違いないだろう。

けど、この水晶……すべてをあてるだなんて掟破りなことができる代物とは思えない。

これまで女神の果実とかを集めたりしたけれど、こんな力を感じないものは初めてなのかもしれないな。

さて、肝心のユリマさんは……

テーブルの上で微睡まどろみんでいた。

……と思ったら、私たちが声をかける前に飛び起きる少女。

「あつ……私ったら寝て……、っ！ すいませんっ、来てくれたんですね！なのに私ったら……あ、頼みたいこととはこの水晶玉のことなんです」

「水晶玉？」

エイトがユリマさんの横に置いてある水晶玉に目を向ける。

同じくヤングラスも。

水晶玉……力を感じさせないこの水晶玉で、頼むものは。

「もしかしてこれは偽物で、本物を探して欲しい……だとか？」

これは私の憶測にすぎない。

……けれど。

ユリマさんは驚いた表情。

あれ、当たってたりする……？

「そ、そうです！これはきつとあの水晶玉じゃない……父の占いが当たらなくなってしまった前の水晶玉ではないと思うのです。多分ただのガラス玉に……」

しかしユリマさんの声はドアを開ける音に遮られる。

ギイッ……イイッ……

ゆっくりと開く、鈍いドアの音。

そこから出てきたのはアフロの男性。

ユリマさんは固まっている。

「何をしているんだ！ ユリマ」

家の中に轟く怒号。

見てみればアフロの男性の顔は赤い。

お酒でも飲んでいたのかな？

その時、エイトが呆けたような表情で呟いた。

「この人……昼間酒場にいた人だ……」

えええっ！？ 見かけたの！

そう言いそうになるけど、なんとか踏みとどまる。

「お、お父さ……」

「その水晶玉には触るなどあればと言っただろう！……ん？ お前らは昼間酒場にいた……いや、いい。取りあえずユリマっ！ 客人には早々にお引き取り願うんだぞ！」

ユリマさんが言い切る前に大声で怒鳴り散らす男性。

お父さん、と言いかけたのだからこの人が占い師のルイネロさん……？

ルイネロさんはそのまま階段を上りこの場からは姿を消す。

ユリマさんは悲しそうに揺れる瞳でこちらを見つめ、寂しげに微笑んだ。

「すみません、あんな父で……あの人がルイネロです。かつては有名な占い師でしたが、ある日を境に占いが当たらなくなってしまった……それは水晶玉がただのガラス玉にすり替えられたからだと思います。それでも父の占いは本物なんです……このガラス玉じゃ力を発揮できないと言うだけで。だからあなたたちには父が力を発揮できる水晶玉を見つけてほしいんです」

なるほど。確かに水晶玉のみで色々あてるのは不可能だよね。シャルマナは……魔物だから。魔物ですよ、あいつは。うーん、どうやって当ててんだろ。

科学的に考えると魔力を脳とかに集めて特殊な水晶玉に映し、人の思考とか記憶とか覗くだとか？

いや、魔法ある時点で科学も何もない気がします。

「いいよ」

取りあえず yes と返しておきましょうっと。

「え！ 引き受けてくれるんですか！ やっぱり夢のお告げ通りだわ！」

輝くユリマさんの顔。いやあ、そんな顔されたら……なんか照れるね。はっはっは。

「お告げによると町の南にある滝の洞窟に水晶玉が眠っているようです。そんなことが分かるなんて、やっぱり私は天才占い師のルイネロの娘ですよね！」

はしゃぐように笑う少女。その表情を見て助けたいな、と思った。

やっぱり人は、笑うべきだからね。

「……最初っから受けるつもりだったけど、僕たち抜きで勝手に話進めないでほしかったな……」

「あつしら、空気になっていたでがす……」

あ、ごめん。忘れてた

かくして私たちは水晶玉探しに動くわけだけど……

「レベル足りてっかな？」

もつともな質問をぶつけてみる。

妥当だよな？ つか魔物の強さ知らないよ私。

私の問いに、エイトは肩をすくめる。

「わかんない。まだ洞窟にも言っていないから敵の強さもわからない。ただ、トラペツタ周辺の魔物の強さはわかる」

「ふうん、どんなかな？ つかどんな魔物？」

「スライムとかドラキーとかだよ」

えっ？ ンな雑魚魔物ですか。

だったら倒せるかな。この刀の切れ味とかにもよるけど。レベル2じゃ微妙だけどね。

だったら洞窟の魔物もたかが知れてるんじゃないのかな？

まあいいや。

私もエイトたちと一緒にレベル上げすれば……

「なるべく君には戦闘参加させないようにするから、君自身も魔物には気を配ってよ？」

参加した方が今んとこはいいかな……

なーのーで。

「いや。そんな気遣いは必要としていませんので。」

「？ 君も参加するって……こと？ そんなのはちよっ……」

「じゃあ、武器くれたのはどういう意味なのさ」

「あ……えっとお……」

「じゃ、そういうことで参加しますよーん」

「……… あっし完全に忘れられてるでがすね。」

「「あ、ごめん……」」

エイトはともかくヤングスは二回目なので謝ります。ごめんそーんなことしたら。

はれ？ 人間じゃない気配を感じるぞー。

「魔物っ！！」

エイトの声を合図に私たちは武器を手を持った。

私は武器屋でもらった日本刀……のような刀。エイトは兵士の剣でヤンガスはこんぼう。

「ちなみに二人のは初期装備だよん。ついでに言うと二人はアスナと同じくレベル2。では本編に戻ります」by作者」

敵はスライム、しましまキャット、リップスと一体ずつ。

レベル2にはつらいか？

でもこれまでの戦闘と剣技の経験を駆使すれば楽勝なはず。

「来るぞっ！」

エイトの声とともに、戦闘が開始された。

「俺はリップスを殺る。ヤンガスはしましまキャット、アスナはスライムを倒せ。倒し次第援護しに行く」

……俺？

さっきまでエイトは僕って言うていたような……

というか殺るとか怖えよ。お前キャラ変わりすぎだよ。サンディずっと寝てっけど起きてたら絶対突っ込んでるね！

今はそんなこと考える余裕なんてなさそうだけど。

いや、実際超余裕だけどさー。

スライムがのろまな動きで迫ってくる。

——遅い。

こんなのは楽勝としか言いようがない。

だから私は普通に地を蹴ってスライムのところに飛び込んだ。

本来、魔法戦士はすばやさが高い方なのだが、私は例外。

体の使い方をすでにわかっているからこそ全力の速さが半端でない。

今回はもちろん、全力じゃないけど。十分の一も出してないけど。スライムにはこれで十分だ。

「っキュ！？」

スライムが悲痛な声をあげた気がした。いつも笑っている顔は相変わらず変わらぬままだが、どこか焦っている。

……ということも許さず、私は刀を一直線にスライムへと突き出した。

瞬間、どろりと溶けたスライムは淡い青い光を残して消えてしまった。

「攻撃力は高いようだねこの刀……いいもんもらったかも」

まあ魔法戦士は元から攻撃力高いしね。回復魔法については才能皆無な感じだけど。（そもそも覚ええないし）

「さて、二人は……つとお!？」

振り向いたときいきなりしましまキャットが……

なんか、じゃれてません？

つかしましまキャットって言うけど私知らないこんなやつ。

んな戦闘なめてる野郎がいたとは。

殺っちゃえヤンガス！（お前も怖えよ。

けど。

ヤンガスの背後にいなかったはずの魔物。

スライムだった。

正直弱いけどヤンガスが一気に二体相手することになっちゃう。

ヤンガスに攻撃する？

なら倒す。

そう思った時、スライムが動いた。

動いた先はヤンガスではなく、エイトの方向。

「エイトっ、後ろ!」

私の警鐘を聞きいれたエイトは対処するために動いた。

振り向いたと思ったらスライムはどろりと溶ける。

振り向いたときにその勢いで切り裂いたのだ。

「……けっこう強い?」

リップス? ってやつもししましまキャットやスライムより強そうなのにつくこう余裕で相手している。

トロデが家臣だの近衛兵だの言ってたのだからそれなりに強いってことなのか。

それにしたって……

「ぐう」

ヤンガスのうめき声。

攻撃力は高いようだけど、すばやさはまあまあ……というか遅い方だから、攻撃力という強みが生かされていない状態のよう。

援護しなきゃまずいかも。

「ああもう！魔法戦士に転職しなきゃよかった!？」

魔法戦士って攻撃系の魔法がないから不便だよお。

走るけどスライムやらが急にやってきたりするので邪魔で邪魔で

……

わああああ！ヤンガスいかにも赤色に点滅みたいな状態にっ！

しかし、その時……

あっさりエイトの剣がしましまキャットを切り裂いた。

それで戦闘は終わり。

私は改めてレベル上げをきちんとすると考えた。

四話 急展開な気がしません？いや同意を求めてもなあ……（後書き）

ア&作「後書きコナッ！」

ア「結局質問なんて来なかったよ」

作「しゃあないです、それは。強制じゃないしね」

ア「……じゃあせめて題名は変えよう」

作「思いつきません。取りあえずその話は終わらせようぜ」

ア「最後はなんだ最後は……まあ内容の話し行こっか」

……あのエイトさんの性格の変わりようは何ですか。」

作「本文で書きます」

ア「答えてないじゃんか！」

作「此処でネタばれはおかしいんです！というか本文でエイトに語らせたい。」

ア「なんでエイト限定。」

作「簡単！好きなキャラだから。」

ア「ほんと簡単！？というか魔法戦士の文句はちょっと……」

作「取りあえずデメリットをとって話だけです後にメリット出しますから！」

エ「……魔法戦士って、何？」

作「あはは……後でね。（ゲッ！聞かれたか……？）」

エ「？なにか隠してる」

作「へえっ！？ち、違うよ～んなわけあるわけないでしょ（棒読み）」

エ「何か隠してるんだね……？（チャキッ）」

作「剣を構えないでー！？アスナさんタスケテー！！」

ア「……（逃）」

作「裏切り者おおおおー！！」

エ「さあ、吐いてもらおうか。手加減はしないぞ？」

作「これでかるく性格の変わり方がわかってしまっか……ぎゃあああ

ああああ!!」

……これにて終了。誤字脱字、変なところの指摘、感想など待って
ます。

作「エイトさんの性格が怖……わああああああ!!」
ア「どんまい。」

五話 秘密の特訓？ンなわけないよ！（前書き）

なんか変なのになりました

五話 秘密の特訓？んなわけないよ！

「エイトって、性格変わるんだねえ」

どこまでも広がる広大な景色の中、私はエイトに言った。
目に映るのは鮮やかな緑のみ。

そんな景色の中で私、エイト、ヤンガスは歩いていた。
何故性格が変わるの、と質問したかつて？
いやさ、普通聞くよね。

だっていつも優男〜で僕〜なエイトが武器握った瞬間、『殺るぞ』
だもん。きかなきゃそっちの方が変だよ。

エイトはそんな私の質問に、ポリポリと頭掻きながら答えてくれる。

「……よく言われるけど、本当にそれ何？」

……へ？

なんで？

とぼけたその表情がなんとなくいらつと。

その時、ヤンガスが静かに、というかぽそりと言ってくる。

「……兄貴はソレに自覚ないんですがすよ。」

ああ、そうなのか。というか自覚しろよ。

ヤンガスが苦笑。

その怖い顔で苦笑とか何だよ……

「なんでだろ……」

ため息をついて道に行く。

もちろんエイトは気付いてない。わーお、ほんとに気付いてない〜

「まだヤンガスは苦戦するね。レベル上げしようか……」

「んう？何レベまで？」

「今のレベルに四かけたくらい？」

……。

「「えええ〜っ!？」」

エイトさん、ただけヤングス弱いと考えてんですか。

あああ……ヤングス落ち込んでる。ざ、罪悪感が何故か私にのしかかってくる……

と、そんなときになんか気配。

「あ、スライム？」

スライムがあらわれた！（笑）

「（笑）ってなんだよ。by作者ってかこんなんでもいちいち書かんでもいいよね！？」

自分に言え作者。

ま、取りあえず戦おうか。うん。

「何匹くらいいる？ 数えてアスナ」

ノーマルモードのエイトさんからの依頼！ その名もスライム数え。

……しょぼ。

まあ別に何でもいいけどさあ……

「あー、うん。……せーのっ、いっちにっさんっしっ」

「（なんか微笑ましい……）」

二人が仲いいってことがわかったよ。

ふえ、なんで作者出てきた！

……ノリで。

えええ……

「ん、六匹だよん」

「多……」

やっぱ二人は仲いいね。

はいはい作者は引っ込んで

……ぶぎゅ。

というか、六匹で多いとかないでしょ。

夜だったらアタリマエですよ？

というかスライムという雑魚相手にその反応何。

あっさりリップス？ とか言うやつ倒した人が言いますか。

そうこうしているうちに、エイトは剣を抜いた。

抜き身の真剣と、あのキャラが組み合わさるのは一種の恐怖だ。

「さて、道を切り開くものは自信と勇気だ。……さあ、殺ろうか。」

初めのなんか聞いたことあるよ、エイトさん。（ルーーズ）

くそしてなんだかんだで二日が過ぎ、二レベに四かけた八レベになりましたく

「ぜえ、はー」

ヤングス、若い女性からしてその鼻息は恐怖に値するよ。（ぴしやり）

「酷いですが！？」読まれたっ！？」

「まあまあ。前回の反省（＝ヤングスが空気）を生かしていじってあげてんだからさあ。by作者」

「そんなのあんまりですがよ！？」

「ヤングス。これは業界用語で『おいしい』って言うんだよ？by作者」

「わあああああああ！！」

どんまい。

「……ふう。流石に疲れた」

「そりゃ、ね。二日間休みなし、怪我も薬草で回復でぶっ続けでレベル上げだもん。それで疲れなかったら化けもんだよ。」

「……………」

あり？　なんで黙んの？

なんか変な事言ったかな？

「……どした？」

「いや、そういう割にはアスナ、疲れてないなって」

エイトさんが言う。

はれ？私人外？

まあ体力的にはまさってなきゃちょっとねく

飯にも一度世界救いましたから、ねっ！

負けてたらある意味やばいよ。

てか取りあえずさあ、宿に行こうよ。こんなところでくっちゃべってないで！

……とゆーのを提案。

エイトは反対……しかけたけど、疲れに負けて賛成。ヤングスももちろん賛成

ふむ。年下の私に体力で負ける。それってなんかみっともないなあ。

そーして私たちは街に戻った。

チャーラーチャーラーチャツチャツチャッ（一応宿屋の音。ノリで入れました）

「ふあゝ、疲れが取れたゝっ。」

私はベットから立ちあがった。

ちなみに二人とは同じ部屋だよ。お金を必要以上に減らしたくないしね。

でもエイトはなんか顔真っ赤で「ダメ！そういう問題でこれはちよっと」とか言ってた。私のこと嫌いなんだな……って思ってたらしう言う意味じゃないって言われて結局こうなったんだけど。（↑声に出して言ってたんだよ。ついでに超鈍感なアスナさんです。b y 作者）

まあベットに横たわった瞬間寝てたけどね。嫌いだとか関係ないじゃん。

取りあえず言っとくとお二人はまだぐーすか寝てます。余程お疲れの様子。

うん？ レベル同じなのに全然勝ってんじゃないって？

いやいや。今は経験の差とかだけど、あっちは男子。いずれ抜かされちゃうよ。

だから。

私は窓の枠に手をかけて、ガラツと開ける。

「ん」と、えい。」

そして私は……

飛び降りた。

だってドア開けたら廊下にいる人たちに見られちゃうから。

朝は外は人気が無いしね。

なんで外に出たかって？

そりゃ、強くなるためだよ。

元の世界に帰る必要はない。けれど、まだ出来てないことがある。

そして、あつちの世界に戻るための情報を探すためには、世界中を駆け巡らないといけないだろうから。

世界中を巡るということは、それだけ強い魔物いるのだし。

それにまだ魔法戦士という職業に慣れていないから、やっぱりレベルあげた方がいいと思う。

だから私は気配を消して秘密の特訓を始めた。

時間はまだ深夜の方。

だから魔物も大量だ。

そして、強い方だ。

エイトたちは夜は戦わなかった。

夜は街に戻り、その時間はやっている道具屋で薬草などを買い漁る。

お金は全部使い切り、残りの時間は傷の手当で、そしてちよつとした陰で睡眠を少しとったりと休憩。

どんだけレベル上げに熱心なんだ……と思うけれど、まああつちの世界でやっていたことの方がひどかったような気がするので何も言わなかった。

ちなみにあつちでのレベル上げは弱いと感じてから五日間から七日間、休みなしで戦いまくっていた。

回復は魔法と道具。まほうのせいすいもこつちとは違って手に入

る方だったからばんばん使った。

「一番年下の癖にえげつないな……」とキリサに言われてたつけ。
リーダーの私のレベル上げは、大変の様です。慣れたけど。自分
がつくったけど。

——そう、物思いに浸っていると後ろからわずかな殺気。

うん？ 殺気出せる魔物って序盤の此処にいるのかな？

『グモオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！』

辺りに轟く、魔物のおたけび。

……うん？ 此処って序盤の場所だよね？

ムチャ強い感じがびんびんします。

後ろを振り向く。

するとそこにいたのは……

夜の帝王、と言う名の魔物。

確かここら辺では生息しない、魔物だとあつたはずだけど……

こっそり魔物大鑑を買った私は全部に目を通しといたんだ。

この夜の帝王という魔物は、ベルガラックという違う大陸にある
地方に生息している魔物だ。

なのに何故、此処に？

……だとしたらまずいじゃん。

だとしなくてもまずいじゃん。私今、レベル八！

夜の帝王が出るベルガラック地方での目標レベルは二十四。

……三倍ですよ。

勝ち目ないよ！普通に言っ

けど……

闇の帝王はいきなりおそいかかってきた！！

わああああああああああああああああ（死）

何ソレ何ソレ！？ 死亡フラグが立ったとか言う奴！？

だったらマジまずうううううい！？

と、わめく間もなく敵は攻撃してきました！早！

「つくう」

なんとか避ける。というか避けるとか自分で凄いつて思っちゃう。でも敵強い！ 早い！ そしてもう少し間を与えてほしい！

……ん、これはちよつと真剣にやんないとまずいなー。

だつてレベルとしてはあちらさんの方が勝っているから。

真剣、で勝てるかは謎だけれど。

それでも——やるしかない。

『グモオオオ』

「っ……、て、えあああ！」

体のばねを利用しての回し蹴り。

これは速い方だと思う。

なので夜の帝王は反応する前に直撃を喰らった。

『グモオ』

「そして私専用のスキルの魔法……っ！」

敵が止まった隙に魔法を詠唱する。

瞬間、私の周りに魔法陣が巡り、地面がなんかめりめり言い始めた。

そして巨大な渦が地面から飛び出す。

「メールストロム！」

これは前の世界にも今の世界にもない魔法。

私専用のスキル、『原初』にて習得した魔法だ。

本来は敵に百四十くらいダメージを与える強い魔法だが、今の私では少ししか与えられない。

でも、間違えなく効いた。

絶対赤いのピコンピコンしてると思う。

てか『原初』って強すぎね？

チートってやつかな。

『グ、モオ』

痛そうにしかめた顔でにらむ。普通だつたらこっちが顔をしかめるんだろうな。怖さで。

でもあいにく私は怖いもんなし？　というか強い強い言っておいて結構楽勝だった。

ん！　一度世界救った勇者様をなめるなよお！（笑）

……でも。

間違えてやってきてしまったのなら、可哀想だと思う。

人を襲わないのなら、このまま逃がしてあげた方が……

……いいに決まってる。

だから私は魔物に向かって言った。

「夜の帝王さん。あなたが間違えて此処まで来てしまったのなら、私は同情します。同情なんていらなそうかと思うかもしれないけれど……私はあなたを逃がします。いいですか？　でもその代わり此処の人は襲わないように。此処の人たちはあなたみたいな魔物に慣れていないんです。だから、お願いします」

そう言つて薬草を使つて回復させた。

すると、何故か夜の帝王はこっちに向かって飛んでくる。

——もしかして、攻撃するの？

そしたら面倒だなあ、と思いつつ動きを伺う。

『グモ』

しかし夜の帝王は攻撃しなかった。

あれ、なんかなついてる？

本当になついてんなら……凄いな。

試しに撫でてみる。

そしたら何の抵抗もしないまま素直に撫でられた。

気持ち良さそうに目を細める魔物……うん、凄い。

「えと……なんか、なついた。」

『グモオ！』

「……ついできたいの？」

『グモ！』

「……まあ、いっか。エイトたちに秘密にすれば」

『グモモ。』

というわけで夜の帝王が仲間になった。

五話 秘密の特訓？んなわけないよ！（後書き）

ア&作「後書きコナナ！」
ア「えつと、仲間が増えたね」
作「眠いので今回終わります。」
工&ア「……ええええええ」

誤字脱字、変なところ、あと感想待ってます。（眠）

六話 予想外です。

ふ、ふぁああああ。

あ、これ欠伸だよ？

でも声に出すわけにはいかなから心の中で欠伸してるんだよ！
へ？ なんでだつて？

それは……

「アスナ、滝の洞窟に行くよ？」

エイトさんたちがいるからです。はい。

お二人さんは秘密の特訓……じゃない変なのやってるの知らない
からさ、むちゃくちゃ眠いの知らないわけよ！

最近あんま切羽詰まったのなんてなかったから徹夜なんてねえ。

久しぶりだから眠くてたまらんわけよ。

「ふぁーい。エイト、ヤンガスうー」

取りあえずお返事返しましたあー。なんか間の抜けたのになっち
やっただけねん。

眠いから、許してくれい。↑（テンションおかしい

「……なんか、気が抜けてない？」

「抜けてないによー」

「明らかに抜けてるでがすね……」

ん？ そかな。

まいつか。抜けてるもんは抜けてるんだもん。

そしたらしゃあないでしょ！

「抜けてても抜けてなくてもレッツらゴー！ だよあ」

「うん。なるべく二人で片づけるしね。」

か、片づけるとな。少しアレな発言でーたあー！

しかも私はあんま戦闘出さないとかさ、一度世界救った人をなめ
ないで下さる？

……いや、なめたら汚いけどって違うけどさあ。

そーんなこんなでトラペツタから出てモンスターがでる草原に出ました。

そしてトロデとミーティアさんと合流。

めんどいからたまにトラペツタ付近に置いてってレベル上げたけど、ミーティアさんなんか会えて嬉しいってな表情？

馬でもわかるんだねー表情って。

そういえば『夜の帝王』……命名した名は『ナイ』は、元いたところに戻ってもらってる。

地図見せて理解するかはわかんないけど此処から見て北東……かな？と言っ感じで説明し、地元へ。

わかってんのかね？

まあ分んない場合はまた来てっって言ってるけど。来るかも謎ですが。

てなわけで私たちは滝の洞窟へ出発！いやっほおう。

……いや、そこまで乗り気じゃないんだけど。

そこでなんとなしにミーティアさんの毛に触れてみる。

暖かくて、なんか気持ちが良い感じだった。

気持ちが落ち着く？

まあ、そんな感じ。

頭のあたりを少し撫でてやるとトロデがなんでかこちらを微笑ましいてな感じに見ていた。

……ぶっっちゃけ怖い。

「な、なんですかトロデ……」

「いや、ミーティアも同年代の女子おなこと一緒になのは気が楽じゃろうと思ってる」

「エイトたちとは気が楽じゃないんですか？」

「そうとも言えないじやろうが、流石に女子一人つても可哀想じやし。むさい男ばかりだし。」

……それはエイトも入るのかな。

だとしたら……ブツ「今なんか失礼なこと考えたよね？」……だ
つてさあ……

というかトロデもむさいおっさんのうちに入んの？自分で言っ
て気付かない系？

はあ。ミーティアさんいなきや色々ヤバいんですか。なんとなく。
ミーティアさんを撫でつつける私。気持よさそうだ。

彼女は人間というけど、今はお馬さん。守護天使時代に培った動
物の機嫌取りテクには負けてしまうのね……悲しいことよ。

歩きながら撫でる。私もこの毛並み、気持ちいと思います。姫様
と言っただけあるなあ。綺麗。

しかし、その瞬間だった。

事件が起こったのは。

……バチツ……バチバチツツツ！

「つつつ！？」

「ヒンっ！？」

静電気とは思えない、雷いかづちが二人の間にわずかに迸った。

「姫っ！アスナ！？どうしたっ」

「ミーティアー！！」

驚き叫ぶように言うエイトとトロデ。

ヤンガスは突然のことに反応できずにいる。

「……痛つつう……火傷した………どんだけの静電気なんだよもう。」

うー、いたいいたい。ヒリヒリするー

「ひっ………ひいん。」

ミーティアさんもちよつと痛そう。

だから私は再度触れて謝った。

「ごめんなさい………」

撫でる。

あんな静電気初めて………てかあれ本当に静電気？

なにか、変なことが起こって――

――その、答えはすぐに出た。

<大丈夫です。こんなのミーティア平気です>
優しげに響く、少し高めの少女の声。

声はミーティアと言った。

……ミーティアと言ったのだ。

「……今、誰が言った？」

「ん？ 言っていないよ？」

「あつしもですが」

「わしもじゃ」

……じゃ、誰が……

反射的に離してしまった手。

その先にいたのは、純白の馬姫。

「ヒン……？」

小さく鳴くミーティアさん。

いるとすれば、それは……

「ま、まさか……ミーティアさんが？」

驚愕の表情で呟く。

そんなはずない。

なのに……

手を触れる。

するとまた声が響く。

<そんな……まさかアスナさん、ミーティアの声が聞こえるの？>

少し震えた声。

私は頷く。

「……聞こえるの。ミーティアさんの声が……」

「……っ！……！！」「……」

そこにいる全員、息をのんだ。

私とミーティアさんは硬直したまま。

エイトがそんな私とミーティアさんに問うた。

「本当、なの……？ 聞こえるのか？ したら、確認してみたい？」

「……うん」

「ヒヒン」

「姫は……ミーティアは、何が苦手で何が得意？」

私はミーティアさんに手をあてる。

すると声が聞こえる。

一通り聞き終わるとエイトに向き直って、

「……泳ぐことが苦手でカナヅチ、得意なのは……音、楽？」

トロデとエイトに浮かぶのは、驚きと困惑。

当然だろう。

今、ミーティアさんは馬であって話せる者などいるわけないのだから……

<……ミーティア、複雑です>

「私も。正直どうすればいいのかわかりません……」

二人で会話。

エイトはもう平静を取り戻していた。

「つまり……アスナはみ……姫と話せるの？」

「みたい……なんでだろ。静電気が起こったときからそうだったの。」

「

「……なら」

「おおおう！ それは真か！？ したら姫も寂しくなくなるのう！」

……トロデが遮った。

まあ、たしかにね。

しゃべれるんだしいいか。

「……はあ、まあ……」

「そうならいいんじゃないんですがすか？」

「う、そうだけどさ。」

「ん？ 嫌なの？」

「違うけど……いいよね?」

「何故聞く。」

という事で、私はミーティアさんと話せるようになりました。

六話 予想外です。(後書き)

ちよつと部活が……

誤字脱字、変なところ、感想などお待ちしています。
オリ展開降臨！

七話 仲間がそろそろ。(前書き)

リクエスト？みたいなものがあつてそれを採用しました。
んでもって今回はまだ滝の洞窟前……

……この時点でもう七話ですよ。

マジで百話越える可能性が……

それまで持つのでしょうか。

まあドラクエの中で？はちっちゃいころから好きだったんで続くかな？と。

ではどぞ〜。

七話 仲間がそろそろ。

そんなこんなでミーティア（呼び捨てでお願いと言われたので呼び捨て）の言葉がわかってしまった自称元天使の私。

……いや。

じ、自称って自分で言うのは……あと今はやっぱ羽根とかわつとかないけど一応天使だよ！？

という、一人である意味むなしい突っ込みを心の中とする私……

ああ、私痛い人だったのか……（遠い目）

とーもーかーくーだっ！！

私は現在馬と化している可哀想なミーティアと話せるという異常事態を目の当たりにしているわけよ！

自分が引き起こしたもんだけど。

けど、そんな異常事態をまえにさらなる異常事態。

……この地域にはいないハズの魔物たちがいるんだよ！！

不屈のスナイパーと愛の戦士ピエルだとかいうのが！！

見た目は元いた世界にもいた弱い方の魔物。

普通にリリパットとスライムナイトとさえばいいじゃないかつ！

と思うけど、まあそこは放置。

でも、一番の問題はエイトたちなんだよー。

だってこの地域にはいない魔物（つまり此处よりも強い？）だし、二つ名がつくほど強い？んだし。

私たちハレベだよー！？

普通なら負ける！！

私なら勝てるかもだけど、ていうか転職しまくってるから能力値はレベル八じゃねえだろ！！くらい半端ないけど、その力は発揮することは？。

混乱するじゃん。

なんか異世界の勇者つつつてもピンとこないし。

だからなるべく隠そうと思うのさ。

だーとーしーたーらっ、残りの案は……

……逃走。

あーあーあ。

な、情けな……っ

だが仕方がなーいつ！

とゆーわけでなんか殺る気まんま……闘る気満々なエイトを止めよう。

本当はそんな命知らずなことしたくないんだけど……

だっていま、どうのつるぎ持ってバトルモードなエイトさんだから。

ら。（泣）

ヤンガスも逃げることを提案できないようだねー

……図体でかいくせに臆病なやつだな。

「……今酷い言葉が聞こえたような気がしたんですが。」

あ、ばれた？

違うよって言おうか。うん。

「違……」

「何をしているんだ？ さっさと殺るぞ」

……ヤンガスのせいで提案する前にエイトが駆けだしちゃったじゃないか！？

まったく、邪魔なやつめえ！

「ホントに酷いセリフが聞こえたような！？」

「幻聴でしょ？ ほら、早くやんないとまずい」

「……なんか納得できないですが……」

そっついながら『おおきづち』で魔物を叩き潰す。

レベル二よりかは速くなったか……んん。

私もがんばりますかね？

エイトさんの方が安心できるので、（ヤンガスより強いからねー）ヤンガスを陰ながら援助。

ヤンガスの相手はリリパットだね。

速くなっても苦戦。普通なら敵うはずないから仕方ないか。

しかも相手は弓使い。遠距離が得意なのに対し、こっちは近距離を得意とする打撃系の武器。

あっちの方が勝てる可能性は高い。

あとヤンガスよりも強いエイトもわずかながら押されてる。

……あら、絶体絶命？

ううん、大丈夫。私がなんとかどっちもサポートするから！

『ギいい』

リリパットの鳴き声。不気味だよねえ……

弓矢が放たれ、まっすぐヤンガスの方へ。

まあ、私には遅いけどー

「とりや」

体のばねを使って助走なしに加速、そして弓矢の真ん中をあっさり切断。

いやあ、らくらくー

あら、見てみて奥さん！ リリパットの間抜けな驚いたあの表情

（笑）

『ギ、いい！』

あー、やつちゃった。標的が私に変更されちゃったよ。

だったらヤンガス。

「ヤンガスー。こっちは私やるからエイトの方頼んだ」

「へえ！？ あっ………………兄貴、今手伝うでがす！」

ヤンガスが来てちよつと驚いたエイトはこっちを見て半眼になった。

なんでだろー

なーんちつて、わかってるよ。バトルモードなエイトは無駄に戦闘狂だから邪魔されなくなかったんだろ？

でも今は苦戦してんだから我慢しなさいな。

表情で答えたらそっちと代わりたいたか言いそうな顔のエイト。

……そっちの闘いに専念しやがれこの野郎！

『ぎいっ、いー!』

いつの間にやら大量の弓矢が。ま、気配で気付いていましたが。

『下手な鉄砲、数打ちや当たる』な攻撃めんどいからやめてほしいな？

……当たるかよ。遅えよばーか。

またも体のばねを使用。見えなくなるようなスピードになるようにして弓矢を刀で切り裂きまくる。

避けた方が楽だったんだけどそれじゃ二人にあたりかねないし。

ということでもそのまま風とともに高速でリリパットの前に移動。そして弓を真っ二つ

衝撃の顔のリリパットさん。あは、超うける！（サンディの真似）

そして刀でゴン！と頭を強打。倒れる緑色の魔物。

……リリパットを倒した！

なーんてねつと、エイトたちはどうしてるかな？

『キュル!』

……まだ交戦中かあ。

「……はっ、だんだん遅くなってる。強いと思ったけど勝てるか。」

「あつしにはわからないですが……はあ」

剣VS剣+槌な戦い。

ふむ、微妙だな。

私も加勢すべき？

ま、エイトの言うとおり動きが鈍ってきてるからなんとかするか
もだしなあ。

どうするかな？

取りあえず今は『アスナはようすをうかがっている』だね！（笑）

ギイ……ッ、ギチィッ……

「ぐっ」

ヤンガスがなんとか受け止める。

剣とおおきづち、その二つがギチギチと音をたてて緊張感がぶわつと。

わぁ、なんか懐かしー。

エイトがヤンガスが攻撃をなんとか受け止めているところを斬りつける。

『キツ！？』

「……効くようだな。すまないがお前は俺の剣の錆となってもらおう」

……かつこいいっ！？

なにそのセリフ！ 聞いたことあるのにエイトが言うとかっこよく聞こえる……

はぁ、このセリフレイジが言ったら同じくかつこいいんだろうなあ。

あのパーティーのなかで一番イケメソらしっから。

あ、この前エイトがレイジに似てるって思ったのはこれだからなのか。

戦闘狂じゃなかったけど、バトルモードな彼と似てる。

もちろん普段の性格。

今はいない、レイジと似ているバトルモードエイト。

なんか援助したくなってきたかな？

なんとなくだけど……

ギインッ！！

「くう」

「あつ、ヤンガス！」

ヤンガスが弾かれた。

馬鹿力のヤンガスを押しのけるとは………すげえ腕力だなスラナイ。
(勝手に略)

でもお陰さまでスラナイは疲れているようです。やつふう、チャンスー！！

「……サヨナラだ」

サヨナラって、怖っ!?

此処まで物騒じゃなかったな……レイジ。

でもなんとなく、なんとなく似てるってただかもんね。

そして、エイトはどうのつるぎで横に真一文字に切り裂いた。

……わー、魔物って血が出ないから、グロくないやー……

ばたんと倒れる魔物。

そして戦闘は終了した。

エイトは一つ頷くと、剣を鞘に納めていつもの表情に戻った。
にこにこ穏やかな笑顔に。

……魔物惨殺事件の後にその笑顔はマジで怖いっす。マジで。

「よし、行こうか？ 強かったけど無傷ということで終わったから
そのまま行こう。」

……強いで簡単に片づけられるとは。

違う意味ですごいリーダーよ。

そうしてエイトたちは前に行く。

……でも、私は気になることがあってその場に残った。

トロデや、ヤングスにも気づかれずに残った。

そしてその場にしゃがみこみ、魔物たちの死た……うう、ざ、残
骸を見つめる……

するとまずリリパットが立ちあがり、弓も戻る。次に真つ二つで
グロテスクなスラナイがなんか勝手にくつついてあら不思議、す
っかり元通り。

私たちはしばし互いを見つめ。

……数十秒後、ガツと手を取り合った。

気が合ったって言うかな？

して意志疎通した私たちは夜の帝王のナイみたいに仲良くなった。
うん、魔物の友達が増えたね。

魔王みたいな役割もったのを倒した勇者が魔物とお友達なんて

変な話だよね。

でも仲良くなっちゃった。

んでもっていつの間にかやら来ていたナイも加え話し合いして（な
んとなくわかるという奇跡）、私が呼べば来てくれるということに
契約みたいなことした今日この頃です。

で、結局みんな帰ってもらってスタンバイ。いやあ、魔物に好か
れるとはすげー。

でもってエイトたちと合流。

「何やってたの？アスナ」

魔物と密会〜とも言えないし、ここはこれで。

「道に迷った！！」

「は！？ 僕たちの後ついてけばダイジヨブでしょ！？」

「……私、方向音痴らしいからね」

「凄まじいな……」

勇者パーティーのとき、ホントにそうだったからね。

リーダーだったのに気が付けばあれ？ 此処は何処かな？ で。

二回ほどそんなことが起こってから新しい所に着くたび合流場所
を決めるのがしきたり？ みたいになつていた。

場所は大体ルーラできるところ。

決めてもルーラなしではたどり着けないんだよね〜。

キリサやレイジに呆れられたっけ。

まあそこはどうでもいいので余談として放つところ。

「よし、着いたの。わしらは待つておるから探索してまいね。」

「おっさんは行かないんですが。」

「行くわけなからう！ わしらは王族なのじゃ。行動するのは家臣
と決まってるうが！アスナは残ってもいいがのう。でも行くんじゃ
らう？」

「もちろん！ ユリマさんの手伝いしたいしね。」

「そうか。なら言うてくるといい」

表情を変えずに言ったトロデ。言葉からもわかるように予想済み

だっ たんだね。

「行ってきまーす！」

「行ってまいります、陛下、姫」

「行ってくるでがすよ……」

「……ヒヒン！」

ミーティアが行ってらっしゃいとはかりに鳴いた。

触れてないからそうなのかはわからないけれど、きっとそうだ。

「うむ、行って来い。」

かくして私たちの『滝の洞窟探検』が始まった。

七話 仲間がそろそろ。(後書き)

ア&作「後書きコナナ！！」

作「さて、ハリポタみながらの投稿です。」

ア「それ言わなくていいと思うよ。」

作「はは。では前書きに書いた件で。」

ア「どの件？」

作「リクの話ですね」

ア「ああ。」

エ「りく？れく？」

作「リク。リクエストのリクだよエイト。」

エ「ああ、成程。」

作「リクエスト、なのはわからないけど、それらしきものがあったので採用しました。有難うございます！」

ア「二つ名つきの魔物の話か。」

エ「あの強い奴らね……なんでだろ」

ア「エイトには分らない話だね」

作「ええ。」

エ「……教えてよ(剣の柄を握って……)」

ヤ「兄貴っ、それはいかんですがす！」

エ「ふえっ？ヤンガスが後書きに来てる！？」

作「ヤンガス召喚……ストッブ役として登場。」

ア「おお！凄い役目を背負ったの召喚だね！」

ヤ「……押し付けられてるだけのような気がするんですが」

作&ア「気にしない気にしない！」

エ「あゝ、まあいいや。うん。」

ヤ「……あつし、いじられ役としての役割になってるような……」
作&ア「気にしない気にしない！」

というわけで終了。ヤンガス、空気じゃなくてよかったですね（笑）
次は滝の洞窟探索！ようやくです。七話でようやくです。
誤字脱字、変なところ、感想などお待ちしています。
リクエストなども大歓迎！！
それでは

八話 滝の洞窟を探索。

えゝ、只今私たちは滝の洞窟へきておりますゝ。

“ 滝 ” の洞窟と言うだけあつて湿っぽいなあ。

髪の毛がしつとりしててうざったいな……

女子にとって湿気は敵とみなされる、っばい。

そこは自分でもわからないねゝそもそもなこと考えたことあんまないし。

「んっ……ふえあゝ、でこぼこしてて歩きずらいかも」

「洞窟だからね。」

正直こんなのどおつてことないけど。冒険者としての経験はこっちの方が上、だと思う。（なんか自信ない。）

エイトは難なくクリアつて感じかな。ヤンガスは「おつとつと」つて言いそうな歩き方。

私はわざとこういうのに不慣れな人の真似をしてる。

なんでつて？ そりゃ慣れてると不自然だからだよ。私は十歳くらいからお師匠様とともに戦闘を体験して、十四には勇者パーティとして旅してたりする。

経験豊富だけど、普通の女の子はそうはいかないから。

デコボコな地面によるめいたりするのが普通なんだよ。

決して“ 十四で勇者 ” っていう女の子っぽくない伝説があり、今頃になつて女の子としての意識をしたからではない……決して、ね。疑ったらこの刀で斬っちゃうよ？

ポタツ……ピチャ……

水の音が静かに洞窟に響く中、私たちは歩く。

しばらく歩いていると、道の分かれ目にどんと宝箱が。

「あ……」

「宝箱がす！ ここはさつと開けてさつと立ち去るのが……」

「それは元山賊時代の経験でのアドバイス？ 生憎この宝箱には持

ち主はいないようだけれど。」

私はヤングスの無駄なアドバイスを遮って言った。
洞窟の宝箱に主なんていないと思うよ。

だってフィールドにもあるし、いつのまにやら中身が復活してたりするしね。

中身が復活しているのは、神様のおかげなんだ！

宝箱は『神様からの贈り物』なんですだよ。

そのことについては追及してはならないのだ、って確か本にあったような……

まあそれはほつとこう。

トランプ

重要なのはこの宝箱に罠が仕掛けられているかいないか。

罠、というよりも魔物なのか、と言う話なのだけど。

この世には、『ひとくいばこ』、『ミミック』という魔物がいる。

そいつらは宝箱に潜んでおり、開けたらびつくりひとくいばこがあらわれて全滅したーなんてこともしばしば。

私たちのパーティはなかったけど、よくあることなんだ。

きっとこの世界にもいるだろうと思う。

だって同じ魔物いるんだから、いる確率はあるでしょ？

警戒にこしたことはないよ。

スライムが出てくるようなところにはいないと思うけど。

「……で、どうする？ この宝箱」

「開けてみよう。というか、開けよう。警戒して違ったら損する！」

「は……そ、そういう問題じゃあないと……」

「どういう問題だと思ってたの？」

「エイトお……お前馬鹿あゝ」

「？、！！　なんだとっ！？　僕を馬鹿にすると痛い目見るよ！

……つとお。」

ギイイイイ……

なんと、エイトは剣も持たずに宝箱を開けてしまった！

こんな序盤？　なところにいるとは思っけど……取りあえず、い

たらどうすんのよー!?

(注：エイトさんは思いきって言っちゃうとアイテムコレクターで、宝箱は絶対開けるタイプの人。コンプしたいそうんだけど、そのことに危険が伴うとはあんま考えていない子です。)

「……あつ。」

「「わああああ出たあああああ!?!」

エイトが小さく声をもらしたとき、ヤンガスと私は魔物が出たあゝと思つて絶叫。

ああゝ、洞窟に反響しまくつてうるせ。

「つ……!?! 何、二人とも!?! 魔物!?!」

「それはこっちのセリフ!! その宝箱は魔物だったの!?! Y E S か N O のどちらかで答えなさい!」

何処の学校のテストの問題? とか言わないでくれよ!。

なんとなく前世の学校的なのが出てきてしまっただけなのさ!。

うん。

「……N O ?」

「ふはあつ。ならなに入つてたのもお!。」

「急に脱力気味だなあ……これ。」

エイトが紙切れを見せる。

うん? 紙切れには御用ありませんことよ? ↑

「地図。この洞窟の地図なんだけど……誰作つたんだろ。古いしほろいし」

「酷い言われようだがすね……兄貴、そんなのみんなわからないと思うがすよ。きつとどこぞの冒険者がつくつて置いてつたんでがしよう。」

「……ヤンガスつ、歯をくいしばれえええええ!」

「……えつ、ぐぎいつ!?!」

私はそのままヤンガスのほっぺをいちおー手加減して殴つた。

頭殴つたら間違えなくこっちがダメージ受けるからね。卵の殻恐

るべし。

……じゃなくて！ 私が言いたいのはあ……

「あ、アスナ？ どうしてヤンガスを殴ったのか教えてもらえるとありがたいんだけど……」

そう！ 言いたかったのはソレです、若大将！（意味不明。）

私はちよつと怒ってるーてな感じのムードを出しながら説明。

「宝箱は“神様からの贈り物”なんだよ！ それすなわち、中身も神様がくれたもの……この宝箱に入っていた『地図』は私たちの洞窟探索を楽しむための神様のお気遣いそのもので、それを『どこぞの冒険者が置いてったもの』と言うのは断じていけないものなのさ！」

どうだ、この説得力ある神様のお話はあ！！

基本的に私たち天使は“天の使い”なわけだから信仰心はあるのよ。え、ちよつと違う？

「……………」

「ち、沈黙とその視線が痛い！ 二人とも酷いよ！？」

ちくちく刺さります。でも、そのうちブシャツと刺さりそうですよお二人ともお……

ま、気を取り直して。

相変わらずデコボコな大地を歩いていく。

結構モンスターにエンカウントするけど、弱いなー。

流石にレベル八効果は絶大のようだね。びっくりサタンが驚かす側なのに逆に驚いてるの見ちゃったよ。

冒険者は見た！ 的な感じでね。

歩いているうちに多くの宝箱（つっても三個）に巡り合ってたまたまなんやらなったりした。

そして、それはついにあらわれた……！

「おい、お前ら」

おおきづちがあらわれた！（笑）

「なんですか？」

「なんでがす？」

「……かつわいゝよなあゝ、相変わらずゝっ！」

私だけ違う返答。

あつちにもいたけど、やっぱおおきづちかわいゝ！

抱きしめたいなゝ

でも、駄目そうだね。

「……うっ、こ、此処はオレたちの住みかさ！ ぼこぼこにされたくなきゃあ、早々に立ち去るんだなあ！」

あ、なんか見栄張ってる感じ。

かわいゝけど弱い魔物の一匹だね！

スライムもそのカテゴリーだよ。

「残念ながら、僕たちはさきにいかなきゃいけないんだよ。通してもらえるかい？」

「ほお、このオレさまに話しかけるとは度胸があるようだな。だが断る！」

……あゝ。

これは、エイトの剣が唸りをあげるかも。

そして予感ハ的中。

「……せつかく聞いたのに……じゃあ、行くよ……？（チャキツ）

よし、早速始末しよう。ヤンガス、アスナ、殺るぞ」

「「はっ、はいいい！」」

「……うっきゆう！？ すすすいませんでしたあああああああ
あ」

「……？ 何故謝る？ 正々堂々と殺りあおうじゃないか。」

「いつ、いいいいいいですっ！ いいですうううううううっ！？」

だからお許しくださいあああああいつ！！」

光の速さでおおきづちは逃げ出した！

……はあ、まあ怖いのはわかるよ。わかるけど……君が悪
同情します。

エイトは一つため息をつき、「行くよ」と言って先に行く。

はたして彼のバトルモードは、本性の方なのかな？ 二重人格者、
と感じなのかな？

どちらにせよ、本人わからないから知りようもないか。

そんなこんなでしゃべる利口なスライムをなんとか仲間になろう
としたりしたりして（どんだけしたり言っただけですか）、
ついに辿りつく。

明らかに雰囲気が違う……この洞窟の最深部に。

ザッ、ザザザザ

滝が上から下へ流れ落ちていく。

涼しい、というよりも何処か寒い感じだった。

そんな中、壮絶な滝の勢いの中にひとつ、光を強く反射している
ものを見つけた。

「エイト、あれ――」

「……あれがきつと、ユリマさんの言う水晶玉」

そう。水晶玉が、滝を目の前として宙に浮いていたのだ。

水晶玉には不思議な力を感じた。

間違いなくユリマさんの言う水晶だろう。

私は水晶玉を取ろうと、手を差し伸べた。

瞬間！

ザバアアアアアアアアン――

「はっはっはっ――――――わしはこの滝の洞窟の主、ザバンじゃ！

この水晶玉を迷わず取ろうとしたことは、お前がこの水晶
玉の主じゃな？」

エイトは違う、と言おうとしたが、私はその声を隠すようにこつ
言った。

「YES――」

「ええええええつ、アスナ！？」

「……そうか……ずっと待っていたぞ！ どのくらい待ったか……
ついに恨みを晴らすことができる――」

額に十字傷のある魔物・ザバンは戦う気満々な態勢に。

……なんか、誤解されてません？

「アスナ……」

あうあ……二人の視線が私をグサグサと……

ザバン倒したら二人とも殴つとこかな？　なんかむかつくからね

っ（黒笑）

「さーてっ！　そっちがやるなら私もやる！」

「……はああ。やるよ……（チャキツ）ああ、殺るか。」

「兄貴がまた……あつしも戦うんでがすね……」

「わしをやれると思う奴はぶったおすのみ！　これを受けていつまでも笑ってられると思うな！」

刹那、ザバンから黒い霧がぶわーっと出てきた。ぱっと見ちよつと危ないものに見える。

どうしよう……避けたら不審がられるよね……避けられないんじやまずい？

「サンディ！　どうしよ？」

小声でサンディに助けを求める。普段はなるべく声をかけない。だつて変人だつて思われちゃうし……

サンディは言う。

「大丈夫！　なんとかなるっしょ！」

「大丈夫じゃなああああいつ！？　どうしよおお」

小声で叫ぶのって、結構つらい。

あああああああマジでどうしよう！？

てかサンディできとうすぎだよ！　本当にセレシア様の妹なの！？

その時、黒い霧が私たちを覆った。

「わああああああ……って、あれ？」

私は驚く。

理由は、ずっと首にかけていた《アギロホイッスル》が淡く光り、霧を消してしまったからだ。多分神様が創った《天の箱舟》を呼びだすためのものだから邪悪なのをはじき飛ばしちゃう、ということ

なんだろう。

エイトも同様に打ち消されている。エイトは関係ないはずなのに……何故？

ちなみにヤンガスはきつそうに猫背の格好だった。

「なっ……わしの呪いが効かない！？ 女子は知らぬが男は……もしや」

「黙れ！」

戦闘好きのエイトが初めて普通の会話で怒鳴った。

エイトはその身軽さで地を蹴り、一気にザバンの真上まで跳躍。十字傷に向かつて思い一撃を喰らわせる。

「ぐあああああ！ 古傷がっ……」

「私を忘れないようにっ！ 隼斬り——！！」

「がああああっ！？ 見えなっ、い」

跳躍するとともに砂煙を起こし、なるべくエイトたちに私の姿を見せないようにする。

速さでなら全っ然見えないけどね。

「あっしも忘れるなです！」

だるそうにしていたヤンガスが復活しておおきづちを大きく振り落とし、ザバンはあっさり沈んだ。

まあ、あれだ。わかんないけどエイトの逆鱗には触れない方がいいってこった。それにきつと高レベルの私の隼斬りや、ヤンガスの怒りのテンション（笑）が効いたんだろうね。

ということで滝の洞窟の主……ザバンを倒した！

八話 滝の洞窟を探索。（後書き）

次話に続きます。

誤字脱字、変なところ、感想などお待ちしてます！

特別編！ 異世界からの訪問者。 コラボな回！（前書き）

皆さん！ お久しぶりです！

事情により更新が遅れてしまいました…… 申し訳ないです。

今回はサブタイトルの通りコラボの回です。

私と同じくドラクエ？の小説を書いているナックさんとのコラボです。この小説とはまた違う感じのものです。後書きにURLを貼っておくので是非ご覧になって下さい！

お勧めです！

それでは、また後書きでお会いしましょう。長い方だと思います

特別編！ 異世界からの訪問者。コラボな回！

これは、本編からちよつと後のお話。

リーザス村へレッツラゴー！ の時のお話です。
さほど先じゃないですが取りあえず。by 作者

side / アスナ

あれ？

…… 此処は何処だろう。

またはぐれちゃった……

「あうあう、いい加減自分の方向音痴が嫌になるゝエイトたちに怒られるゝ」

私ことフェリアスナ・レフィルは言った。

って何言ってんだ？ 急に自己紹介を……

まあ、いいか。

フェリアスナつつつてもみんなにはアスナとしか言っていないけどね。

ということでは私は現在、迷子であります。

見たことがない森の中で、走り回っております。

ルーラでトラペッタに戻るのもありだけど、そしたらエイトたちと会ったのむずくなるからボツ。

んゝ、どうしよっかな。

……とそこで、ガサリと音が！

「……スライムがあらわれた？」

「それ、何気にひどいと思う！」

私が言った後に聞こえた声は女の子の声。私は抜こうとしていた刀をそのままに、声がした辺りをじっと見つめた。

そこから出てきたのは、黒髪黒眼の少し長めの髪の少女。自分と

同じくらい？

髪には髪飾りが付いている。サンゴの髪飾りでもないし……見たことあるのはなんでだろ？　というか結構かわいいこだな。

ロングスピア持ってたけど……冒険者なのか？

「……君はなんで此処にいるの？」

「えーと、……迷子？」

迷子っ！　私と同じ理由ですか。うーん、ここら辺って入り組んでるのかも。

「そうなんだ……って私も迷子なんだけどねえ。どうしよう。」

「聞かれてもなあ。」

「はは、その通り……ところで名前は？」

「うわっ、いきなりとんだ！　えと、私は朝風……じゃなくて、沙耶^{あさかぜ}。」

「私はフェ……や、違う違う。アスナっていうんだ。まあ、迷子どうし頑張ろ。」

「頑張るって……何を？」

「……発見されるのを？」

「なにその受け身姿勢！？」

「だって歩いたらまた変な方向へBボタンダッシュなんだよ！」

「なんでBボタン知ってるの！？」

あ、しまった。前世の話が……ドラクエってあんまBボタンのなので走らないけれど。

というか沙耶さんもなんで知ってたんだろう。

ま、取りあえず話しながら待ってようかな？

+ ・ + ・ +

side / 異世界のエイト

「……此処は何処だ……」

と、俺ことエイトは言った。

ん？　なんで自己紹介を……

いや、まあそれはいいか。

それよりも今は、この状況だ。野宿したんだが、いつの間にやら知らないところにいるし、沙耶やゼシカはいないし……（ヤンガスは？）どうなってるんだ？

こころは正直弱い奴ばかりだけど、沙耶は俺達よりＬＶ低いから心配だ。

「地図を開いてつと……場所を確認して」

その時だった。

声が聞こえる……

「あれ？　旅人が……」

「兄貴、アイツなんか兄貴そっくりでがす……」

「へ？　……はああ！？」

聞こえた声は、両方とも聞いたことのある声。

片方はまんまヤンガス、もう片方は……

……俺！？

「……はあああああ！？」

「何ソレ！？　僕とそっくり！」

「僕っ！？　一人称が違う！」

「兄貴と瓜二つでがす！」

服装まで同じとは……パクリ？　いや。違うか。

じゃあなんだこれ……

いやいやいや。今は違う。優先すべきものがあるはずだ……落ち

着くんだ！

フィールド上にある宝箱のことを考えよう……ああ、全コンプで

……って逆に興奮的なのに！

はあ、取りあえず考えるのやめよ……全部コンプリートしたいのはまだ心の中にあるけど。

（注：取りあえずこっちのエイトさんは超が付くほどのコレクタ

―です。

まあ、私の方も全コンプ目指していますけどね。」

「そ、それはともかく……探している人がいるんだけど、知らない？」

これは、沙耶のことだ。

ヤンガスは……同一人物じゃなさそうだが、まあいいか。

「ふえ？ 奇遇だね。僕も探してる迷子がいるんだ」

「……目的も同じとは、なんでだろう」

「さあ？ ま、一緒に探すかな。」

「見た目は同じでも、性格は違うでがすね……」

こっちのヤンガスもうるさいな……無視だ、無視。

自己紹介（名前も同じだった）しながら道を歩く。

多分、此処はリーザス村周辺だろうな……

魔物が出てこない。

ありがたいと思うけど、その代わりに宝箱が出ないのが惜しい。

（その思考は違う気がするboy作者）

そうして歩いていると、茶髪の少女が。

ゼシカだ。

故郷に帰ってきたかのような顔を……間違ってないけど。

「おい、ゼシカあ！」

声をかける。

すると彼女はふり向いた。

「あ！ エイト……ってええ！？」

驚いた。

まあ当然だと思う。なんたって俺と瓜二つな奴がいるんだからな

……

「凄い似てるわね……世の中には似てる人が3人はいるって言うけど、本当なのね」

「どうも。僕はエイト……同じ名前らしいよ？」

軽く自己紹介。なんか、凄いな……

でも今はあっち優先！　そうなのさっ！　……自分で言ってる意味わかんなくなっただけ。

その時、またもや人影発見。

見覚えある少し長めの黒髪の少女と、瑠璃色の髪の少女だ。

片方は沙耶だと思う。けど、もう一人は……？

「あ、エイトおー！」

沙耶が手を振ってくる。やっぱりそうか。

沙耶と、もう一人はこちらを見るなり寄ってくる。

二人は俺ともう一人のエイトを見ると一瞬目を丸くし、しかしすぐに普通の表情に戻った。

なんだそれ、まるで予想してたみたいなんだけど……

瑠璃色（仮名）は言う。

「本当に同じ外見！？　二人で特徴言ったら全部が全部かぶっててもしやと思っただら……」

「でしょー！？　そっくりじゃん！」

沙耶も言った。

瑠璃色の少女はまるでこっちのエイトと知り合いのような言い方だ。

「あ！　アスナ、また方向間違えた！？」

「エイト、ごめん！　私方向音痴どうにもできないようです！」

「僕としてはどうにかしてもらえると有難い。」

「ごめん。無理っ！」

……本当に知り合いみたいだ、うん。

side / 沙耶

はあ、本当に瓜二つだなあ、びっくりだよ。

二人で歩いてたら双子っぽいエイトたちが歩いてんだもん。

しかも服装まで同じとは……せめて色違いにしようよ。

片っぱが黒ばっかで目が赤目だとか？

それってダークリンクじゃん……

「「今、なんか失礼なこと考えたよね？」」

二人してこっち向いていった！　どんだけ息ぴったりなんだあ。

「あー、息ピッタだね。違いはないのかな？」

と、アスナ。

「僕は僕って言うけど、こっちの方は俺って言うから、それかな？」

「そのくらいしか違いが無いってどうなんだろう」

「口調もそこはかとなく似てるもんね。」

私が言う。うん、二人似てる。

とゆーことは、こっちのエイトもお母さんみたいなのかな？　なんか睨まなそう、というかマイペースそうだし言っても怒られないかもね。

いや、言わんけど。

「そうであー！　戦闘能力は違うんじゃないかな！？」

アスナがなんでか嬉しそうに言う。

……なんで？

ていうかレベルの差であれだと思う。

「聞くけど、そちらのエイトさんのレベルは？」

「僕？　僕は……9だよ。この前上がったばっか。」

ええ……差、だいぶあるじゃん。（注：8から9に上がりました）でも表面的な話じゃないから、結局すぐにはわかんない。ということぞ！

「「二人で勝負しよー！」」

はもった。

アスナもおんなじこと考えてたんだ……意志疎通は万全っ！　つて、それでいいのか？　こんなんで意思疎通って少し物騒だよ！

「なんで戦わなきゃいけないのさ」

「……まあ、僕はなんでもいいよもう。」

なんかアスナの方のエイトさんは投げやりだね。

「槍飛んでったあ——！　エイト投げやりだねっ」

「またも同じことを！ でも槍飛んでっただって……」

「まあいいや。無言がちょっとみじめそうだけど。」

「いいなら戦おう！ なんかおもしろそうだもんねっ！」

「とゆーことでっ、剣を構えよう！ ヤンガスが周りの魔物たち倒してくれると思う！」

「アスナ嬢ちゃん、ようやくあつしに話振ったと思ったたらこれですか！？」

「別人ヤンガス……あなたがいじられるのはもはやお約束なのよ。」

「こっちの嬢ちゃん（ゼシカ）もひどい——っ！！」

ヤンガス……こっちの世界でもお約束が出来ているのか。少し可哀想に思えてきた。

同情はしないけどねっ！

そういうことでお二人の決闘が始まったんだ。

あつちのエイトはどうなんだろう？ 気になるなー

+ . + . +

さて！ 途中まで沙耶さん視点のまま話を進めます。

って何考えてんだろ私。

また脳が勝手にキヤッチして……

いやいやいや、今は決闘の話が重要だよ！

優しげだったアスナの方のエイトの雰囲気がよくわかんないことになってる。いまだに剣構えてない……けど、にこにこ笑顔が妙に怖い……

「……あつしは兄貴が一番怖いと思うでがす……」

うちんとこのヤンガスじゃない奴が、怯えたように言う。

へ？ ヘタレなの？

そりや残念。

「……私もエイトちょっと怖い。戦闘の時はね」

アスナも？ どう違うの？

外見瓜二つで結構似てるとこ多くて、戦闘能力で決めようってことになったのに違いが？ それも戦闘に限ってる？ なんだろそれー
「それじゃあ始めるのは好きなタイミングにー。んじゃどおーぞっ！」

言う。一回言ってみたかったんだ」

それによーやくアスナの方のエイトが剣を構える。

剣はうちのお母さ……じゃなくてエイトと同じくどっつるぎ。
でも雰囲気と表情が全然違うような……

「戦うんなら、本気でやるからな。」

「……そうだな。」

ん？ そんな口調だっけアスナの方のエイトさん……
なんか、背筋がぞぞーってする。

「……魔物との戦いではないが……本気でやり合うか。面白そうだ」
あ、二人が怯える理由がちよつと……いや、凄いわかった。

side / 異世界のエイト

「……魔物との戦いではないが……本気でやり合うか。面白そうだ」
この一言。

それで、ちよつとばかり驚いた。

何だこれ、と少し思う。

剣をもった瞬間性格が変わった？ ……二重人格とか言う奴か。

まあ、真剣にはやる。でもなんか雰囲氣的には負けてないか……？

「ははっ、俺よりも強いかな。ならそっちの方が面白い。雑魚相手にするよりか何百倍面白いだろう。楽しく殺らせて……戦らせてもらうぞっ、もう一人のエイト！」

「……怖っ！？」

沙耶が引いた声をだす。……当然だと思う……急に俺って言ったぞコイツ。しかも殺らせて……って言い間違えたよな！？
というか、先制がとられる！

「さ、させるかああああ！」

ガッ、キイイイイイイン！

「ん？ 受け止めたか。レベルの差は単純だな。」

「かえんぎり！」

「技か。俺にはあまり使えない……退くか」

エイトは後退する。なんてこった、反応速度が凄いな……
なんでこんなにも変わるんだ？

……謎が一つ浮上した。

「お前、性格変わったな！」

「変わった？ 元からそうだが……」

「隙あり！！」

「なっ、卑怯……いや、こういうのも悪くないな。知能がある者との戦いは……久しぶりだ」

アイツは避ける。でも軽く切り傷をつくることは出来た。

薄皮1枚くらいか……レベルの差なんて関係なしに強いような。

「（……私もエイトの強さにはびっくりだよ。うん）」

アスナがなんか頷いてるように見えたが、今は集中！

「対人間用ではないが、ドラゴン斬り！」

ズシャアアアアア、と音がした。

何故にドラゴン斬り？

「んっ！」

受け止める。

「そんなくらいで俺が倒せると思ってるのか？」

「思っではない……だが！」

その声とともに突き出されたのは、皮の盾。

まだそこまでしか行っていないのか、と思うがそんな場合ではない。
い。

盾が剣を押すように突き出され、エイトの剣の縛りは無くなる。

そしてフリーになった剣が、俺へ襲う！

「わああっ！？ ……けれど大丈夫だろっ」

俺は避けた。

危な……もう少しで当たるとこだった。結構おおざっぱだけど考えてんだな……

取りあえず避けたところで地面を蹴り、加速。

今回は反応しきれなかったこいつに、俺は首に剣を突き付けた。

「……勝負ありっ！ 勝負ありだよっ、だから戦闘狂のエイト君、剣収めて！」

アスナが慌てて言うのとチツ、と舌打ちが聞こえて剣を鞘に収める音が聞こえた。

舌打ちするなよ……というか戦闘狂か。なら話は少しわかる。

「ふへえ、終わった終わった……有難うございましたー、だから突き付けてる剣、どけてくれない？」

「へ？ あ、うん」

この変わりように反応しきれなかった……剣を持つと性格が変わるってどっかで聞いたことある。

まあ、取りあえずこの場はこっちが勝った。

+ . + . +

side / アスナ

はあ……ちょっと疲れた。

見ててハラハラしたよ……だって私のところのエイト、怖いんだもん！

沙耶もちょっと引いてた……エイト本人は自覚なしだけど。でも、さすがにあっちの方が強かった……レベル20以下でこの動きは凄いな。

「お疲れ様〜！」

……疲れたのはこっちですが。

性格変わるエイトが、こっちを見て微笑し、

「なんか違い分かった？ 強さで言えばやっぱりあっちとかそういうの以外であつたりする？」

もろありましたよ。

「……あつたと思うよ」

沙耶が少し引き気味に言う。仕方ないよね……正直最初はひいたものだし。

その前に驚いたけど。面白いし、いいかと放つといてるけど。

その後色々ぶらぶらして魔物と戦ったり、遊んだりした。

夕食を食べてゼシカが料理苦手だったり、あっちのエイトも料理うまかつたりして騒いだ。

その騒ぎによってきた魔物に楽しそうに勝負挑むエイトがいたりして。

話を聞きまくって、色々検証したりもした。

調べてみた結果、沙耶たちは此処とは違う、しかしもの凄く似ている世界からトリップした、ということがわかった。

ルーラが暴走したわけではないけど、私と似た感じかな？

しかも話す内容で気付いたことで、沙耶は私の前世の世界からこれまたトリップした人らしい。

どおりでBボタンダッシュやら知ってるわけだ……へ？ あんま
必要ない知識だよって？

あは、そこは触れないようにね……

そんなこんなで時間は経ち、夜。

トラペッタに戻って宿をとり、みんなで熟睡。

あっちの方のヤンガスはどうやらあっちの世界に置いていたらしく、少しだけ……私、しょんぼりしているヤンガスを想像してしま
った。

でもすぐに寝たけど。

違う部屋のヤンガスのいびきは相変わらずうるさいけど。

そして、朝。

気付いたらあっちのエイトと沙耶とゼシカは消えていた。
なんだ、元の世界に戻ったのか……

「ちよつと寂しいかな、結構楽しかったもん。」

朝早い中、私は一人呟いた。

あんなにわいわい騒いだの久しぶりだったからねえ。

元の世界に戻れたことは良いと思うよ。でも、それを寂しいって
思ってしまう私はひどいかな？

……というわけで、この変わった体験は幕を閉じた。

特別編！ 異世界からの訪問者。 コラボな回！（後書き）

いかがだったでしょうか！ 正直ナツクさんのキャラが上手く書けたかがとても心配です（汗）

私はナツクさんの方のキャラでエイトが一番好きですね、私が想像出来なかったキャラです。

それと、まだ投稿はされていませんがナツクさんの小説でもコラボがされます。

ナツクさんが書いてくださったもので、書き方や内容も違うはずです。細かい詳細は分かりませんが、また違う感じとなりそうなので是非チェックしてみてください！

本編も私のは全然違うので、見ていない方は下のURLをアドレスのところに貼って移動して下さいね（＾　＾）

ドラゴンクエスト？ 空と海と大地と呪われし姫君と宝箱少女

<http://ncode.syosetu.com/n2990r/>

次回は本編……のはずです。
それではまた！

九話 世界にも事情つてもんがあんのかね。（前書き）

活動休止状態ですが更新するという事態が起きました。

それにしても、お久しぶりです。そしてすいません……

事情がありましてね……遅れてしまいました。

今回はなんと、一万文字突破です！初めてですこんなに書いたの……三話分ぎっしりな感じです。

それで今回でなんとかトラペツタ編終了です……長……

今回はシリアス多めです。原作のシリアスに便乗して主人公がシリアスすぎます。

九話 世界にも事情つてもんがあんのかね。

「……ふう、倒せた。」

「……あっさり過ぎると思うな私は……」

私ことアスナは言った。

ちなみに今はこの滝の洞窟の主らしき魔物、ザバンを倒したところ。

主のくせにエイトの怒りの一撃（？）、私の隼斬り、ヤンガスの『あつしを忘れるなあああ』の一撃（！？）であっさり倒れてるザバンを、剣をしまう前エイトが一瞥して戦闘は終わった。

ンでもって戦闘^{バトルジャンキー}狂エイトは剣をしまった瞬間過ぎ去った、と。どういいう仕組みでああなるんだろーねー。

「ぐう、うう。おのれええ……」

ザバンは額を押さえながらこちらを睨み付けている。抑えた先には古い十字傷が。

うわあ、いったそー

……ああそうか。エイトが怒りの一撃そこに食らわせたせいぞろんなんなわけか。なんかごめんなさい。

「おぬしら、この水晶の持ち主では、ないな……」

「すいません……私たちはその水晶を渡さなければならぬんです」

「うぬう……そうか……ならば、本当の持ち主を見かけたときにはこう伝えてくれ」

「？ 何を伝えるんですか？」

ヤンガスが訊く。

するとザバンは急に元気になって、そして怒りの表情で言った。

エイトが剣の柄に手を掛ける。きつと警戒しての行動なんだろうけど、脅しにしか見えないよエイトさん……

ザバンは一瞬おびえた表情を見せたが、すぐに咳払いをして言い始める。

「……二度とごみを滝壺に捨てるなああああ！　中にいるわしの事を考えろっ！！　……うぐっ、叫んだらその時の傷が痛んだわい。とにかく、そう伝えるんじゃぞ！」

そう伝えて彼は去っていった……

ああうん。怒るのも仕方ないか。

あの傷水晶が捨てられたときに出来たやつなんだね……ごみつつかなんつーか。

……うん、いいや、もう帰ろうか。

「エイト、ヤングス、帰ろう。」

「……うん。」

「わかったがす……」

二人も覚ったようで何より。

そんじゃー帰りますか。

+ ・ + ・ +

結構久々に感じられるトラペツタ。

その町並みを、私たちは歩く。

ところで思っただけどさあ、滝の洞窟出る前に水晶をどうやって持って帰るかって話が出ただけ……

普通に手に持って行くと下手しちゃ魔物に遭遇↓割れるなんてことになりかねないし、どうするって。

そこでサンディも交えて（私の意見として提出しました）話し合ったところ、リーダーのエイトが持つ事になったんだよね。

理由は普通にかばんの中にはいるからださ。

あの見るからに入る量が少ない肩掛けかばんにどう入れるか謎だったんだ。

でもって観察したら、入るはず無いのにあっさり入ってるし。

それだ思っしたのは、『この世界どうなってるの？』

そっうえばお師匠様から貰った袋も無制限に入ってたよね……

四。元ポケットですか？　って思ったけど実際不明。

……そこんとこ誰か知らないかな……　って話さ、うん。

「ユリマさんの家遠いねー」

「そうだね……井戸の前で狭い入り口だし。高名な占い師だった人の家とは思えないよ。」

「うん。隠者の家みたいだよ」

「あつしは入りにくくて嫌がす……」

「そっか。ヤンガスはメタ（ゲフンゲフン！）……だもんね。はい、ごめんなさい……」

そんなこんなでようやく到着です。エイトが道具屋さんよりそうで大変だった……彼は使いどころの無いお金はすべてやくそうとかにつぎ込む人だからね……

「本当に隠居さんみたいなんですケド。町のすみっこでなにやってんだかねえ」

「サンディ……占い師ってとこでわかるでしょ。」

「今のことだつて。この前見たとき思いっきり酒飲みボンバーヘツトだったじゃん？　ありゃ職業ニートっしょ。」

「ニートってユリマさん働いてないでしょ？　ならどうやって生計を……」

ん？　ニート……、ニート。ニート……ド？

ぶふっ！！

「……！？」

しまった……小声で話してたけど、思わず吹き出しちゃったよ。

だってニートでニード……：そういうば最初ニードはニートで。

お師匠様つきで村を見て回ったときリツカ『ニードはニートっ！』って笑い転げてたもん。

他の人からしたら笑えないだろうけど、知ってる人は必ず一回は笑うね！　本物見れば。

いや、それよりもフォーセねば。

「ど、どしたのアスナ」

案の定引かれてる顔されてます。

……あとで一発殴つところ。洞窟の件も兼ねて。

「いやあ、面白い事思ひ出したんだあ。君らにはわからないだろうから、言わないで置いてやるよ。」

「途中からマジでどうした!？」

「へえ? いや、なんでもないよあ?」

「なんか怖い! 何を考えているの!？」

「ナ・ン・ニ・モ・カ・ン・ガ・エ・テ・ナ・イ・ヨ」

「な、何!? ホント何!？」

んう? どおしてそーんな顔をしてるの力ナ?

二人して怖がつてる顔してー。

「私は後で仕返しすることを考えてただけでえ、なーんもかんがえてないよあ」

「(仕返しツ!? 何かやったか僕ノあつしツ!?)」

「アスナ、声出てる出てる」

「え? 出てないよあ?」

「気づいてないし……」

うん? わかんないや。それでも二人が怯えてる顔してつからそうみたいだね。

まあいいよ。あとでこの刀の平でスパツと殴り飛ばしておくし。

「この人怖「必殺 ギガブレイク」」いつ、すいませんでしたあツ!? b y 作者」

ああ今うるさい馬鹿阿保ドジ間抜けな人が妨害してきたただだから「酷いわ! b y 作者」はいはい、ドラゴン斬りとかで一刀両断しますよーいいですねー?

「はあ、まあこんなんですけど続きをどうぞ……疲れたb y 作者」妨害したのあんただよね。

まー、それは置いといてー。

ドアを開けるエイトさんです。

「あつ！ エイトさんっ！ アスナさん、や、ヤンカスさん？」

ユリマさんが開けるなり声をあげる。エイトのそこだけなんか嬉しそう。そしてヤンカスちゃいます。

「うう、ヤンガスでがすよ……カスって……」

一人悲しんでるのいるけど、放置しましょう放置。

というかユリマさんスルーしてエイトを嬉しそうに見てるよ。あれ？ もしかして恋心芽生えてたりするのっ？

あゝ、ミーティアいるから無理だよ。ドンマイってエイトはミーティアとどうなんだろねー？

声がわかったとき姫じゃなくて呼び捨てだったし。

案外、兵士と姫の叶わぬ恋とかだったりしてね、ロマンチックかも！

「これが水晶です」

「あ……これです！ 水晶……」

まだ敬語のエイト。恋は叶わないだろうな。可愛そうに、キリサでも今度紹介しようか？

「間に合ってるっ！」

あれ？ あっちから久々にキリサの声が聞こえてきたという事件が起こった！？

うそ。それじゃどうなんだろう……

「……………」

うん。今のはなかったことにしよう。それが一番だよな。

そこでなんか気配を感じました。

えーっと、明らかにボンバーな人だね。

名前わかんないよ。確かルイ……ルイ……涙囊炎？
違うか。

とにかく、そんな人が階段の上らへんにいる。

その、瞬間。

「待っていたぞ、おぬしら」

アフロなひとがあらわれた！

「アスナなんか変なこと考えたよね！？」

どこか変なのさ！

取りあえずエイトには後でさくつと刀の制裁食らわせちゃってー、今はこつちだ。うむ。

ユリマさんが目を見開いた状態でボンバーな人を見ていた。

どうやら寝ていたと思っていたらしい。

アフロ ボンバー（何それ意味不明）なオッサンはこつちをジロリと見て、すぐにエイトのかばんを見た。水晶は既に仕舞われてる。次に私。かばん無くしたから無いんだけどね。

ヤンガスのほうは何故か見向きもせずにユリマを見る。はれ？ こんな場面でもヤンガス放置なの？

少し可哀想に思えてきちゃった……あれ、目の端に暖かいものを感じただけ。

きつと気のせい……ここまで放置するのはもはや虐めか。

「ユリマ。お前はもう寝なさい。」

「お父さん！？」

「黙れ。いいからこの部屋を出なさい！」

「……はい」

怒鳴られて、一瞬固まったユリマさんだけど、すぐに返事を返す。そしてとなりの部屋に移る。

アフロな人はなるべく聞こえないようにするためか、先ほどより声を小さくしていった。

「待っていたぞ……ユリマが世話になったようだな」

「……はい」

エイトが応える。

「早速だが、ユリマが頼んだという水晶を渡せ。」

「……それはできません」

「何故だ。」

「これは、ユリマさんからの依頼だからです。貴方にはわたす理由がない」

「わたす理由がないだと？ そのうち水晶はわしのもとに来るだろう。だから今のうちに貰い受ける」

「できません。貴方は……貴方はこの水晶を、また捨てる気でしよう」

え！？ と言いつうになるがなんとかこらえる。

何処でそんな情報仕入れてきたのさ……

この水晶、アフロの人のだつて。

勘が良いエイトだから勘、なんだろうけど。

それでも凶星だったのか、ボンバーヘッドオッサンは顔を歪める。うーん、占い師並みの勘の鋭さ。インチキでも出来そうな予感が漂うエイトさんです。

「だ、黙れ！ お前らには関係のないことだ。さあよこせ！」

「あーあ、投げ捨てたらお魚さんが怒っちまうでがすよ……」

「お魚さんだと？ 何の話だ。わしを馬鹿にしているのか！」

ドンツ、と音がしてオッサンが立ちあがる。

ああ、思い出した。名前ルイネロだ……（遅い）

そのルイネロさんが机を叩いて、立ちあがった。

隣りの部屋で起き上ったかのような気配がする。ユリマさんが今の音で起き上ったようだ。

皆は気付いていないようだけれど……

「落ち着いてください、ボンバーヘッド……じゃなくてルイネロさん」

「お前の発言でさらにいらついたわ！」

あ、うん。ごめん。

間違えてボンバーヘッドって言いそうだったよ

これは怒るね。うん、間違えなし。

「……どうしてわしが水晶を捨てたのか、そのことはユリマも知らぬことだ。ましては他人の旅人など……っ」

怒りの表情で、エイトの鞆に目を向ける。

そして、断ち切るように言った。私たちの言うことなんて聞かないという意思表示のように。

しかし、だ。

「とにかくだ！ 水晶をよこせ、目の前でバラバラに砕いてやる！」

「やめてお父さんッ！」

なんとユリマさんが現れた。

みんな寝てるかな？ って思ってたらしいけど、私は知ってたよん。

気配でわかります。ええ、わかりましたとも！

……っていうか。

ああ、自分は本当にまだ十代のいたいけな少女なのだろうか……
本当は筋肉モリモリな狩人^{ハンター}で、ティガ○ックスとかいうのを簡単に狩ったりするオッサンなんじゃないのか……？

普通に気配察知するとか無理でしょ。

どんだけ人外設定なんだよ……いや天使で既に人外だけれども。

……あー、考えてて悲しくなってきました。

「ユリマ!？」

「わ、私知ってるから……ずっと前から知ってるから。お願い……
水晶を捨てないで」

「……ユリマ」

「私の本当の両親のことも。私はお父さんのせいで両親が死んだなんて思っていないから……」

泣きそうな面持ちでそう伝えるユリマさん。

本当の両親……ユリマさんはルイネロさんの父親じゃなかったんだね。

横を見るとエイトは見たことがない表情をしていた。何かを考えている……記憶を思い出しているかのような。

恐らく自分の両親のことを考えていたのだらう。

私には、両親なんていないけれど。いつもお師匠様や、レイジが

いてくれたから寂しくなんて、なかった。

今は亡き二人でも……

ちゃんと覚えているよ。

お師匠様も、天使のみんなも星空の守り人として私を見守っている。

レイジも……

私も、人間たちの世界の守り人として生きるから。

どうか見守っていてね……

「何故だユリマ……そこまで知っていて、何故わしを恨まない？
水晶を取り戻して……憎いはずの占いをさせようとする……？」

「恨みなんてしないよ。お父さんはただ占いをしていただけで、
なにも悪くなんかない。」

お父さんは凄いよ。凄い。だから逃げた私の両親も簡単に見つけ
やっただんでしょ？」

「……」

「私はね、あのお父さんが一番輝いていたと思う。今のお父さ
んなんで、お父さんらしくないよ。だからまた占いをして、輝いて
ほしいんだ……」

泣きそうな面持ちから、すでに泣き始めているユリマさん。

とても感動的な話だ。

私は泣きそうだとかはなかった。そういう話ばかりだったから。
レオコーンとフィオーネ姫……エリザさんとルーフィンさん。

より多くの人を導きたいと願ったダーマ神官。

聡明な少女、オリガとお父さん。

石像職人の修業に没頭するあまりエラフィタ村に嫁いってしまった
クロエを想って最期を過ごしたラボオさん。

病気で友達を作ることが出来なかったマキナの代わりに友達を作
るうとしていた人形マウリヤ。

ずっと独りで我がままな姫、ユリシスさんのことを想って人間に
なろうとした金色のトカゲのアノン。

独りで力が弱く、強くなりたいと願った魔物のシャルマナと母親を失ったナムジンの絆。

だらしのない生徒の本質を見出そうとしたエルシオンとモザイオたち。

一生戻れないかもしれないのにそれでも人間たちをかばったセラシア様。

命を賭して自らの師匠を探し、最後には私をかばって消えてしまったお師匠様……

そして、悲劇のエルギオスとその彼を探し求めていたラテーナさんの話……

本当に、この世界には悲劇と感動が互いに一歩先にあるものだよ
ね……

レイジも……

つと、暗くなるからやめとこう。

「わしは……あの頃は自分に何もかも出来ると思っていた。名声は世界に響き……有頂天になっていたよ。だから、占いに来るやつが悪いやつだとも考えずに占っていた……」

「もう、いい。いいのよ……だって、お父さんは一人になった赤ちゃんの私を育ててくれたじゃない。」

ヤンガスが泣き始めた。

正直気持ち悪いけど、この話に水をさすのも悪いので言わないでおく。

エイトは前と同じ、何かを考えているかのような表情でその光景を見ているだけだった。

私も、きつとそんな表情だろう。

二人の親子の感動的な話を、なにも言わずに見ていた。

「……見たいな、その時のお父さんを。」

高名だった頃の、自身に満ち溢れたお父さんを。なんでも占えた、

輝いていたお父さんを」

「……ユリマ……」

嬉しそうに泣き、笑うユリマさんにすまなそうな、しかし楽しそうなルイネロさん。

その二人は、本物の親子に見えた。

ユリマさんがこちらを向き、涙をぬぐいながら微笑む。

その夜は、本物の親子となった二人の厚意に従ってこの家に泊まることになった。

「……………」

その時、エイトはいまだに考えていた。

先ほど考えていたのは、自分の過去について。

記憶のない、失われた八年間。

その記憶の中に、自分の両親がいるかと思ってしまったから。

けれど思い出すことはできない。

何か、呪いでもかかっているんじゃないかと思ってしまう。

……それは無いんじゃないか、と後で心が諭すが。

自分にはなんでか呪いが聞かないのだから。

そう、考えていたときに彼は見てしまう。

何となく横を向いた時のアスナの表情。

それは、どこか悲しげで、寂しいものだった。

理由はわからないけれど、いつも明るい彼女にも暗い物があるということを知った。

それも両親——大切なもの絡みで。

そのことについて、ユリマたちの話が終わった後も考えていた。

(……アスナにも、何か暗いことが?)

考えてみれば、彼女はわからないことが多い。

もちろん話をしていない現時点では自分たちもアスナにとって謎の多いものだが、それ以上に彼女は謎なことが多かった。

まず、だ。

彼女と出会った時、そのアスナが空から落ちてきたこと自体おかしい。

まあそのことについては説明されている、と思う。

確かアスナは異世界の人で、ルーラを使おうとしたらこっちにんだとか言っていた。

そこはわかる。けど、一番重要なのは。

……地面に落ちててもそこまでダメージがなかったことだ。

普通は有り得ない。空から落ちることも有り得ないが、あんな高さから落ちたら即死だろう。

最初に取りあえず「大丈夫？」と訊いたが、本当は教会に連れていかなければと考えていたところだ。

しかしけるつとした表情で彼女は抗議して見せた。

これは異常だ。それに他にもある。

武器を買う時、彼女はお金をまったく使わず、しかし武器を確保していた。

腰には見覚えのない鞘が結ばれており、見えないところでもかなり気になっていた。

そして戦闘の時。鞘から抜き放ったのはトラペツタでは売っていない、精度の高い剣。^(剣)

いや、剣というのは相応しくないかもしれない。一年前トロデーで読んだ本の中に、ニホントウという記述があったのを思い出した。

それはこの世界には無いと言われている代物だ。なのに“刀”と言われ、本に記されてあったその理由は三年ほど前に異世界の間人間が伝えたかららしい。

八年ほど前からトロデーン城にいたエイトはトロデと仲も良く、最新の本らしいその本のことについて教えてくれた。

刀とはこの世界にはない伝説の武器。今は無きメタルキングの剣とも並ぶかもしれないと言われていた。

そんなものを、異世界から来たというつわものの男は伝えた。

そして語り継がれた。

藍色の柄あおいろ つかの刀を持つ、黒髪の青年によって知られた伝説は。

その、藍色の柄の刀を、アスナは持っていた。

切れ味のよさそうな刃で、簡単にスライムを突くように裂く。

その速さは尋常でない。ミーティアにより近衛兵このえへいに選ばれたほどの実力を持つエイトでも、捉えることのできない速さ。

完全に自分という存在を理解しているような、そんな身体捌きだった。

本当に圧巻の一言で、通常の旅人より強い自分に警鐘まで鳴らすほど余裕だった。

洞窟の時もだ。歩きにくそうに振る舞っていたものの、転んだり息切れしたりする気配は一向に見られない。

自分は兵として慣れているから楽勝だったが、体力が自分よりあるヤンガスでさえ息切れするザマだ。普通の少女でこの状態は異常と言えよう。

そしてザバン戦。エイトは呪いが掻き消されることを承知だった。そのうえでなんとか攻撃しようとしていた。

ヤンガスも、アスナも少しの間動けなくなるということを考えて行動を起こそうとしていた。

アスナなら避けるかもしれない。エイトはそのことも頭に入れて動こうとした。

しかし、アスナが首にかけていたホイッスルが淡く光って呪いを掻き消してしまった。

当然のことながら驚いた。何故彼女に呪いは効かないのだと。そう思っ

瞬間、思い出す。彼女がミーティアと話せたことを。

八年間という長い間、ずっと仲が良かったミーティアのことはトロデ程ではないが、知ってる方だと思っていた。

だがそんなエイトでも馬と化したミーティアと話すことは叶わなかった。どうしても、話せない。

どうして彼女がこんなめに、自分が守れたならば……と心の中で嘆いた。

けれどアスナはそんなことすらはじき飛ばしてしまう。
触れたと思ったら急に雷が迸り、声が聞こえるようになったという。

そのことを証明して見せ、エイトは混乱した。

その時は彼女のホイッスルは光ってなどいなかった。しかし、不思議なものを感じたのは今でもはつきりと覚えている。

彼女はいつたい何者なのだろうか……

そう思っ
てならなかった。

そして夜は更け――

「……アスナ。」

不意に声が聞こえた。

懐かしい声。

大事な、幼馴染の声だった。

天使だったのに、何故か私の姿が見えた不思議な幼馴染。

お師匠様を亡くして、取り乱していた私を守って……今は亡き人となった彼。

どうしてだろう？

彼がいた世界から離れてしまったのに……こんなにも近くに感じるのは。

「レイジ……」

私は呼びかける声に応える。

すると真っ白な世界に一つの影が浮かんだ。
彼だ。

私の、大切な人。大好きな幼馴染。

姿は何処か違う。大人びた感じで、死んだ頃より成長している。
相変わらずの肩より短い黒髪に、スツとした顔立ち。

大人びた雰囲気をおわせる黒瞳は、まっすぐ私を見据えている。

何故記憶にある彼が成長しているかはわからないが、それでも優しげだった。

にこりと微笑むレイジ。

私も微笑んで見せる。

「……久しぶり」

「レイジ、逢いたかった……」

「アスナは相変わらずだね」

「うん！」

頷くと、レイジはこちらに歩いてきて私の頭を撫で、抱きすくめる。

彼には、まだ輪っかも羽根もあつた頃の私が見えていた。

お師匠様が何かしているときによく遊んで、ハグするなんて別に意味なんか無かった。

なのになんてか胸がドキドキする。

なんだろう、これ。

わかんない……本当にわかんないよ

さつき走ったつけ……まあ無意識のうちに走ってたんだろね。それはそれで怖いけど「なんかドキドキするよ？ 私走ったつけ」

「はは、わからないの？ とうか走ってないよ」

「？ ならなんでドキドキするの？」

「あはは。アスナは子供だね」

「？ ば、馬鹿にしないでよ！ 夢の中で、今はいない人が……」

「まあ、いいよ。別に関係無いしね」

「ん……そうだね」

頷く。

本当に不思議な気分だ。こんなんで人は生きていけるのかな……と、離れる。

したらドキドキも薄れていった。

まだあるけど、幾分マシ。なんでだろ？

「……ま、用件だけ言っね」

「う？ 用件って、何か用でもあつて来たの？ 夢って見てる人の記憶を整理しているものだからもの凄い不思議だね！ それに見たこと無いのに君の成長姿が見えるし」

「……うん。じゃあ言うよ？」

「わかったよ」

レイジは本当に嬉しそうに微笑む。

また胸がうるさい。

これは何なんだよバカヤロ——う！↑

「……君は“人間の世界の守り人”。それはこつちでも変わらない人を助けて、また一つ世界を知ることになる。

暗黒神から、世界を守る。

そのためには……天使の本業も果たして。

一つの邪悪な存在の為に、七人も犠牲になってしまふ……

その魂を、安息の地へと送り届けるためにアスナは……ここへ来た」

「……何のことなの？ そんなこと私の記憶にはないのに、なんで

……」

「世界には知らないことの方が多い」

「……そういうことじゃ、理屈に合わないよレイジ」

「取りあえず、目が覚めたら焼け焦げた家へ。マスター・ライラスの話聞いてあげて……」

「ちょ、レイジ」

「……また、会おう」

真つ白な光に消えていくレイジ。

まるで分らなかった。世界を知る？ 天使の本業？

なんでそんなことを……レイジは言うの？

私はそのまま目を閉じた。

すると、現実が見える。

場所はユリマさんの家のベットの土上。

まだ真夜中の様で、外は暗く、静かだ。

ヤンガスのいびきがうるさいけど、エイトはぐっすり寝ている。

他の二人もお休みの様だ。

私は同時に起きてしまったサンディとともに外へ出た。

レイジの言い伝えを、確かめるために……

誰にも見られぬよう、気配を消しながら私はマスターライラスさんの家へ行った。

そこは相変わらず炭がなくて、何も無いように見える。

「ねえアスナ、ホントに此处に何かあんの？」

「……分からない。レイジに言われたから、念の為に来ただけだ……」

「はぁッ！？　　れ、れれれレイジが言っ……いいっ！？」

「夢！　夢の中だよ！？　死んだ人が化けて出たぁ～なんてじゃないからね！？」

「ふへ！？　……ああ、やっぱそうだよネ。それにしてもアスナ、立ち直ったね」

「……立ち直った？」

思わず訊き返してしまう。

サンディは私は真っ直ぐ私を見据えて言った。

「そうだよオ。あの時、みんなアスナの様子におろおろしてたんだからね？」

「私の様子……」

「うん。もの凄い根暗ちゃんだったもん。お師匠様と幼馴染が一気に死んで悲しい気持ちは分かったけどあの落ち込みようは尋常じゃなかった」

「……たしかにそうだったかしんない。あの時は自分でもわからないよ……はあ、お師匠様今見てるかなあ、私のことー。」

「星出てるし、みてんじやない？　異世界だけど。」

「だよねえ。」

暗い話になりながらも、なんとか明るい話に戻す。

サンディ、気遣ってんの見え見えだよ

なんか恥ずかしくなってきましたヨ。

「取りあえず、探そ……」

そう、呟いた時だった。

青い、蒼い光が見えたのは。

大抵幽霊はあの光に包まれている。

魔物を倒したときに出てくる、あの淡い青色の光に……

「アスナ、あれ……」

「……気付いてる。もしかしてあれが……」

マスター・ライラス……

その場を漂っている老人に視線を向ける。

私はその淡い光をとす姿に、声をかけた。

「あの……マスター・ライラスさん」

驚いたようにふり向く老人。

私は見えてます、と言う。

すると驚いたように目を見開き、口を開いた。

「お嬢さん……何者かね」

「私はアスナと言います。貴方の弟子……ドルマゲスさんを追っている人たちと行動を共にしています」

「ドルマゲスか……そうか。そなたはわしの弟子を探しておるのじやな」

「そういうことになりますね。実際の目的は違うのですが」

「そうじゃな。お嬢さん……アスナさんは普通の奴と違う空気がする。お主はただものではないのじゃろな」

「……そう、ですね。私は他の人とは違うんです。それで、訊きたいのですが。」

「ん？ なにかね？」

ライラスさんは首をかしげる。

ライラスさんが弟子に殺された。それには理由があるはずだから

……
「貴方が死んだ理由……事故、じゃないですよ？ 此処に留まる
ということ。理由がわかるならば、教えてください」

訊いてるこつちがづらい質問だった。正直こつちうのは勘弁してほしい……

本当はもう、人の死には関わりたくないのに。
どうしてこんなことに巻きこまれてるんだろな……

ライラスさんはまたも目を見開くが、すぐに答えてくれた。

「……七賢者じゃ」

「七賢者？」

「アイツは七賢者の末裔まつえいを狙っておる。わしはこれでも七賢者の末裔……魔法使いマスター・コゾの末裔なのじゃよ。」

「七賢者の末裔……？ それに何の関係が？」

「あやつは……我が弟子、ドルマゲスは何者かに操られておる。昔から力を求める奴じゃったからの、あの化け物に手を出してしまつたんじやろう……暗黒神、ラブソーンが封じられている『神鳥の杖しんちょう』に。その復活に、七賢者の末裔が関与しているようじゃ。そしてわしは殺された……末裔であるからして」

「……暗黒神！？」

「マジすか。また世界救うとかそんなカンジ？」

驚く私に、冷静に言うサンディ。あわわ、そんなんアリですかっ！？

暗黒神……明らかにまずそう、というかラブソーンって聞いたことあるよっ！？

地図で確か倒した気が。あれは大魔王だとかだったはずなんだけど……

まさかいろんな異世界に繋がる穴でもあるのかな。

そこまで戦ってないけど。

つーか犯人ドルマゲスっ！？ そこ重要だよな。

ていうかさ、そんな凄いことにまた巻きこまれんの……

「ラブソーン、というのに操られてるのですか？」

「そうじゃ……あやつが身に着けていた杖は紛れもなく祖先が遺した古文書にあった『神鳥の杖』。乗っ取られていたならば、七賢者

の末裔であるわしを殺してもおかしくはない。

そしたら心配なのはあとの末裔たち……おぬしの仲間がドルマゲスを探しているのなら、きつと七賢者の末裔に会うことになるじやろう。そこでアスナさん、なんとか阻止できるよう、やってはくれんか？」

「それきたあー。また世界救うフラグ……」

「サンディやめてえ……正直普通の女の子に戻りたいのに」

あうう……もうやだよあー。疲れたよあー。
うううううう……

あー、うー。

きーこーえーまーせ——ん！

……ってやりたかったけどね！ けどね！

「あうううううう……仕方ない。やりますか……」

「よしっ、エライ！ アスナエライ！」

「……その妖精さんは何なのかね？」

「エッ！？ あたし見えてんの……って幽霊さんには見えんのか。
ニイハオ」

「サンディ、それこの世界じゃ通用しない」

「こんにちはかね？」

「「マスター・ライラあスツ！！？」」

「異世界の言葉にあつたとか聞いたのお。」

「中国語ですけどね。」

「日本語がよかったなあ、アスナの……だしね。」

「日本語はこつちで通訳されてるようなので既にそうなんだよ。」

「ううーん？」

なにやら関係の無い話になってしまった……

とにかく、ライラスさんは七賢者の末裔が我が弟子によって殺されるのを防いでほしいそうだ。

それでもラプソーンは強敵なので、もしも復活してしまったならば倒して欲しい、と。

そのことを聞いてから私たちはこの場を離れ、ルイネロさん宅へ戻った。

そして翌日。

朝方に起きてまた寝たというのが一番だった。

「ふあゝ、暇だなあ。ユリマさんたちも寝ているようだけど、すぐに起きるだろうから修業に出れないし……サンディ寝てるし。」

ちなみに私は今レベル12。エイト達はザバン討伐で一つ上がって9。

けっこう戦ってるけど、やっぱりスライムばかりじゃそこまで上がらないのかなあ。

次はこっそり関所出て遠出しようかな……

まあ、その前にそこ越えそうだけど。この街での用事は終わったしね。

思わぬところで収穫があった……レイジが教えてくれたとはいえない。難しいな。

「本でも読もうかな……」

修行中に鞆の一部を発見してて、本見つかったんだよね。

天使界でラフェットさんに一冊だけもらった覚えがある。

だいぶ前だけだね。天使たちが“星空の守り人”になる前だから。とにかくそれを読んで、ユリマさんたちが起きるのを待つ。

そして二人が起き、私は下の階に下りて朝食をもらった。

断ったのだがすぐに下りてきたヤンガスによって食べることに……

…この野郎

そして何時間か経ち、エイトが下りてくる。欠伸をかまして、サンディが軽く蹴りいれた。エイトは見えないサンディに対して「え？ え!？」と戸惑っていたが仕方がないこと。

サンディが蹴りいれた理由は、喝かつを入れるためだとさ。

「遅かったな。もう昼だぞ」

「すみません、疲れがたまっていたようで。」

「そこの嬢ちゃんは今より早く帰ったぞ？」

「ええっ！ そんなに早かったの……？」

「まあ、うん。目が覚めちゃって本読んでた」

「本あったんだ……」

あはは、と少し笑う。

するとエイトも微笑んだ。

心なしかユリマさんの視線がぐさぐさ刺さるんだけど。

朝食……いや、昼食が終わり、ルイネロさんが水晶ののった机の前に座る。

水晶は昨日とは違う感じだった。

姿形は変わらない。しかし、普通なら感じられない魔力をわずかに感じた。

「こうやって真剣に占うのも数年ぶり……これもおぬしのおかげだ。」

そう言うルイネロさんが、輝いて見えた。

ユリマさんが言うように。

彼は、お礼にドルマゲスの行方を捜してくれるようだ。

ルイネロさんは水晶に手をかざし、目を閉じて何かをし始める。

「む……」

一つ声をあげた。

何事か？ と私たちが見ていると、カツ！！ とルイネロさんの目が見開かれる。

なんぞなんぞ！ と硬直したままでいると。

「水晶に傷が……何か文字……なっ、『バカ』だとっ！？ 馬鹿にしおって……！」

ああ、ザバンがせめてもの仕返しにとやったんだねえ……

シリアスの場面に水をさす行為だったとは。

確かに“馬鹿”にしているね。バカって書いてあるし。

怒ってる表情のルイネロさんをエイトがなだめ、再開です。

「ゴホンゴホン。では気を取り直して……」

気を取り直したいのはルイネロさんだよねー……

取りあえず、また目を閉じて手をかざす。

程無くして、ルイネロさんの声が響き渡った。

「むむっ！？ これは！」

「……どうしたんですか／でがすか！？」

緊張が走る。また変なのじゃなきゃいいけど……

サンデイまでもはらはらしたようにしている。

そして、実力ある占い師が口を開いた。

「トラペッタとリーザをつなぐ関所を道化師のような男が通っていったようだ……関所が壊されておる。」

道化師のような男……それはエイトたちの反応を見る限り、ドルマゲスだろう。

「むむ！ 奴がマスター・ライラスを殺した犯人！ こいつは……間違いない。マスター・ライラスの弟子のドルマゲスじゃ……」

「ドルマゲス！」

「リーザの方へ行ったでがすか……何か危険な気がするでがす」
二人は驚いている。しかし、もちろん私は知っているので驚かない。

そんなこんなで先に二人は家を出た。

トロデに伝えるためにだ。

ユリマさんが、また来て下さいね！？ と泣きそうになりながらエイトに言っていた。

ユリマさんはその後悲しそうな顔で部屋に戻る。

私もついていこうとした、その時。

声がかかった。

「おぬし」

……ルイネロさんの声だ。

何？ とふり向くと。

「ちよつと来い……気になることがある」

「……何ですか？」

近くまで行くと、ルイネロさんははっきりと告げる。

その内容は驚きに値するものだった。

「おぬしは、人間ではないだろう」

「……つつつ!？」

「わかるのじゃよ。雰囲気と言うものが、人間とは違う。だが、害をなすものではない。まるで、神父たちが言っている天使のようなものだ。そしてその魂はどの世界にも位置せぬもの。一体何者か？」

「……………」

「大丈夫じゃ。話したりはせんわい。単なる好奇心じゃ迷ったが、話すことにした。」

どの世界にも位置しない魂とは、私の前世にあるのだろう。

天使のことも、異世界のことも。そして、前世のこともありのまま話した。

ルイネロさんは嘘とも言わないで聞いてくれた。

そして、あることを告げる。

「おぬしの存在は、ある大事なものを助けるものとなるだろう……」

“異世界の勇者”という、イレギュラー異常が来てしまったことにより、何かが起きる。普通なら、この世界だけではないことがな。

それを防いでくれ。そうしたらおのずと元の世界に戻るための道が見つかる」

「……分かりました。世界補正というものでしょうか？」

「そうだろうな。それ以外にも、おぬしの体にまつわることで何かしら影響を受けるだろう……しかし、諦めなければ元の世界に戻るための手立ては見つかる。わしにはわからぬが、何かがあるようじゃな。気をつけていくといい」

「……はい」

こうして、私たちはトラペッタを出た。

九話 世界にも事情つてもんがあんのかね。（後書き）

作者「……恋愛って、ムズカシイね。」

アスナ「なに黄昏てんですか。」

作者「マジでムズいです。アスナは理解できてませんが、無理です。私に求めるだけむだか……」

アスナ「だから何言ってますか。」

作者「それではまた！」

アスナ「だからなにいいいいいいいい！？」

十話 雑菌をぞうきんって読む人いないよね？（前書き）

全っ然関係ないサブタイトルです。（オイ）

最後の方はシリアス要素ありなのでご注意を……

あ、ようやくリーザス編突入です。どうなることやら……
これから新章の時は軽くあらずじ入れる気です。

十話 雑菌をぞうきんって読む人いないよね？

はい、なんやかんやでラトペッタ出た私たち一行です。

……へ？ ラトペッタちゃうねん、トラペッタやねんって？ 何故に関西弁？

ま、まあ未だに地名覚えられてないけど、とにかくその街を出た私たち。

街出る前にルイネロさんに壮大な予言の結果教えてもらったので、どうなることやらとハラハラしています。

特に私が。

前に一つ世界救って、異世界に飛んだと思ったらまた世界救わなきゃいけないの！？

そういう気持ちです。はい、そうです。

ほんと、これからどうなるのかな……

私は元の世界に戻るのかな……？

そんな気持ちで次の目的地、リーザス村を目指します。

「あつ、アスナ！ 何処行つた！？」

……ちなみに、また私迷子になりました。

エイトの声が聞こえる。今日はまだ近いみたいだね、ホッとした。

私すごい方向音痴だからね。魔物弱いからいいけど、こういう話って簡単に死亡フラグが立つ……

いや、私魔物瞬殺だけど。剣スキルので攻撃力アップ凄いから、というのもある。

もちろん慣れもあるけれどね。

「エイト？ 何処？」

「それはこっちのセリフ！ 声があっちからだから……待ってて、

今行く！」

互いに声を張り上げて呼び合う。近いから助かるなあ。いざというときはルーラ使うけど。

そして、程無くしてエイトたちがやってくる。

「御苦労さま。すまないね」

「本当にね……アスナの方向音痴ぶりにはもう笑うしかないよ。」

「手でも繋いでればはぐれないんじゃないですか？」

「ナイスアイディア！ 小さい子供がどうか行かないようにしてればいいんだね」

「わ、私小さい子供かい！？」

「yes！！」

「酷いよ……」

ということでエイトと手をつなぐことに。私子供……子供……この三人の中では最年少だけど一応17だよ！？ ついでに世界も救ったんだよ！？（関係ねえ）

うう……恥ずかしい。

魔物からの人目（？）が気になる……

魔物が「あの子子供だわ」「ねー！」とか言ったら剣でメツタメタにしてやるけど。

恥ずかしくて顔から火が出てしまうそう……それで戦闘不可状態になりそう……（勇者様、弱っ！）

それから約四十分後

……顔から火が出そう。（まだそれ言ってるの！？）

うう。リーザス村目前にして死にそうです。

だって此処から人がいるんだよ！？ 村なんだよ！？ 私、子供って目で見られるんだよ！？

嫌だあー！ 嫌過ぎるう……

そんな色々残念な状態で村に入ったら。

……なんか、待ち伏せされてるような気がするんですが。

村に入ったということで無理矢理手をバリっとほどくと子供二人

を発見。

明らかに私より小さいですね？　ね？

それでもってめんどいからスルーして宿まで猛ダッシュしようとする。

その子供二人が道塞ぎました。

なんで？　なんで塞ぐの？

「待てっ！　お前たち何者だ！」

青い髪の少年が言う。その子は背中の鞘に剣をさしていて、頭には角？　の生えた兜をかぶっている。

もう一人の少年は、おどおどした様子。頭には……何故かお鍋。ちよっと困ったように指をくわえている……か、可愛いなこの子！「旅人です。立ちよっただけで……」

「いや、わかってるぞ。こんな時にこの村に来るってことは、お前らも盗賊団の一味だな！」

遮って言う。ちなみに行った後にはビシッと人指し指で私たちを指しました。おいおい、それは駄目なしぐさなんだよ！

ってか、何言ってるの？

反論しようとするけど子供相手に戸惑う私たち。

まあ最も戸惑ってるのはエイトだけだね。

したらくるつと回れ右。お鍋君（命名）に向かって言います。

「マルク、こいつらサーベルト兄さんのカタキだ！　成敗するぞ！」

「成敗っ！？　お前ら日本人ですか！」

なんか成敗で思いつくのが時代劇での「成敗いたす！」なんなんね。

この発言に應える、ってか反応出来た人は一人としていませんでした。……泣。

青い少年（？）の言葉にお鍋君は飛びあがって敬礼のポーズ。

「がってん、ポルク！」

か、可愛いな！　子供ってこんなにも可愛いんだなあ……

……私は可愛くないから子供じゃないもんえっへん。（威張ると

ころなのか……)

エイトとヤンガスは顔を見合わせてるよ。

私は……一人ぼーっとしてました。ん？

「いざ、尋常に勝負っ！」

そうして武器を構える二人。って角兜君（二回目ながら勝手に命名）どうのつるぎ持つてるし！ それ、使いようによつては人殺せるの知ってる？

むちゃ危険です。誰が買ってやったんだ……

二人が攻撃しようとして、私たちも身構えた。その時、

「こ……これ！ お前たち！ ちよつと待たんかい！」

後ろに歳をとったお方が……子供二人はその人を見て、ぎよつとしました。

……怒られるね、これ。

その歳をとった人……おばあさんが、言う。

「よく見んかい、早とちりめが！ この方たちは旅のお方じゃろが

！」

「いつてえ！」

「ふえ〜ん！！」

おばあさんに子供二人は殴られる。……マルクって言われたお鍋君、泣いてるし……

隣りを見るとエイトちよつと引いた顔してるし。おいてめえ。

ヤンガスは鼻ほじくってるし。汚っ！ こっち飛ばさないでよね！？

そうしているうちにおばあさんの諭すような声。ギャップあるな
くね？（意味わかんないし）

「お前たち。ゼシカお譲さまから頼まれごとをしとったんじゃろっ？
まったく、フラフラしよつてからに。」

諭すというか、呆れた感じだったね。

その言葉に、ポルマル（笑）二人は……

「あ いけね。そうだった。」

……わすれてたんかよ。

私も呆れた顔をする。エイトは「え、ちょ、マジやばくない？」とか言いそうな顔。今のは完全にサンディ訳ですけど。

そーしてまたもおばあさんが、

「ほれほれ。ゼシカお嬢様からおしかりをもらう前に、さっさといかんか！」

「ふわぁーい。」

ポルクが抜けた返事をして逃げるように走っていく。

マルクもそれを追ってって、消えてった。

その様子を見届けてから、おばあさんがこちらに向き直す。

「すみませんねえ、旅の方。あの子たちも悪い子たちじゃないんだけど……」

「いえいえ。大丈夫ですよ……」

エイトが言う。遠慮遠慮って感じですな。

しかしおばあさんは「すまないねえ」の姿勢のまま。
一体どうしたっていうんだ？

「最近、村に不幸があつたもんで……」

「不幸？」

「おっと。まあ、詳しい話は村の者にでも訊くといいじやろつ。」

訊く私たちに、村人たちに話を訊くよう促すおばあさん。

ん？ それって自分が言うのめんどいから訊けっつーことなのかい？

おばあさん思いつきり村人に丸投げだよ……

取りあえず教えてくれたので、礼をして先を急ごうと思ったらおばさんが口を開く。

「この村はいい村じゃよ。どうぞゆっくりしていつてくだされ。」

そう言っただけでいっただけで、後ろ姿にぺこりと礼をした。

エイトたちも習って礼。ヤングスは丸くてあんま曲がってなかったけど……笑。

消えた後、なんとなくエイトたちの方を向くとヤングスが言う。

「この村の人間はみんな、どことなく浮かない顔をしてるがすなあ……ドルマゲスがいる気配はなさそうだが……」

「それとは他の問題が起こっているようだね。取りあえず、宿へ行こう。」

エイトがヤングスの言葉を継いだ。私はその言葉に無言で頷く。これって解決した方がいいのかな……ちょっと困った。

これまで人助けの人生だったからね、そういえば、この世界でも星のオーラってあるのかなあ？

そのことを小声でサンディにたずねてみると。

「さあね。それでもこの世界でもあっちと変わらないことがあるし、もしかしたらあるかもしれないね。」

今は星のオーラ集める必要もないけどさあ。そんなこと考えても意味無くない？

そっか。今は関係なかったか……

小声で礼を言うと、サンディは私の肩の上に乗って小さく欠伸あくびをした。

どうやら眠いらしい……ふあ、私も眠くなってきたな……

欠伸を噛み殺しながら、リーザス村の地図を広げて宿へ歩くエイト。

私やヤングスも、その後を追った。

「この村はのどかですが。本当に不幸があつたんがすかね……浮かない顔ぐらいしか、そのことを感じられないです。」

「そだねー」

「うん……一体何があつたんだろう」

「そだねー」

「とにかく、早く宿へ行つて体を休めるです。情報収集はそれからがすね！」

「そだねー」

「……ねえアスナ、さつきから気の抜けた声しか聞こえないんだけど……」

「そだね——……」

「アスナ嬢ちゃん、眠いんですがすかい？」

「知らん」

「なんであつしの返事はそんななんですがすか!？」

「知らねー……ぐう」

「寝たっ!？」

「……そだねー」

「（……壊れたロボットみたいだな……）」

「この剣でスパツと殴ってやるかー？」

「はい! すいません!？」

「アスナ……殴る音はスパツじゃないでしょー……」

「うー? 頭回らなくなってきた……さんでいこぎやる……」

「壊れてるし……しかも小声じゃないからやばいっしょ……」

「ダイジョブダイジョブグッジョブ。」

「意味不明……」

あはは……マジでわかんなくなってきた。

眠い……なんでこんなに眠いんだろ?

一週間徹夜でもヘラッとしてる私なんでこんなにも……

そこで急にぼやけた脳内に浮かび上がった、一つの宣告。

“おぬしの体にまつわることで何かしら影響を受けるだろう”

ルイネロさんの予言だ。

……もしや、この世界に来たことで体が弱ってる?

いやいや、まさか!。そんなことないよ。ただ単に転職してこのレベルだから、体力ないだけだね?

そんなことありえない。

あくまで予言なんだし……はずれることも承知なんだから。

……でも。

関所が破壊されてるのを、ルイネロさんは知ってた。

私が異世界の勇者であることも。ドルマゲスって人が、マスター・ライラスの弟子であることも。

本当に彼は……彼は本物なのかもしれない。

でも、それは信じたくない話だよ。

この世界で、私と言う異常イレギュラーが来てしまったことによって何か起きてしまう……ということが、本当に起きてしまうということだから。

それはどうということなのか、わからない。

だからこそ、怖い……私には関係のないはずの、エイトたちや人々が私のせいで犠牲になってしまう可能性だって、あるんだから……そんな思考の中、宿に着く。

ベットに寝ている幼い女の子が、寝言で「ボンキュッポーン」って言ってるのにはエイトが驚いて、なんでか赤面してたけど……私の思考はそれどころではなかった。

エイトがお金を払い終わってやってきた頃には、すでに私は部屋の一室で微睡まどろんでいた。

十話 雑菌をぞうきんって読む人いないよね？（後書き）

セリフとか、今回はほとんど原作のものです。

オリジナルのセリフはあのセリフが多く連なつてるところが主かなあ……あ、ちなみに少女が「ボンキュッポーン」って言つてたのは本当にある話ですよ。

動画見ながら書いていました。

さて、ついにゼシカさんが出てきそうなところまで来たものですが

……

……もう十話ですか！？

寄り道しすぎな気が……ですが次はあまり物語が進まないと思ひますね。

まだ説明していない、エイトの過去……ドルマゲスがトロデー行くとところをやるうと思ひます。

最近アスナが脅し役になつてゐる気がしないでもない……

というか、先のこと考え過ぎて、早く進めたいです。

……エイトの「それとは他の問題が起こつてゐるようだね。」といふところ、元はヤングスのセリフだったから間違えてがすつてつけそふになつた……エイトががすつて……（笑）

十一話 知られざる過去。 (前書き)

こんかいシリーズが9割！

少しアスナの過去と、ほとんどエイトの過去。

もちろんエンディング後要素はなしです。というか、まだそこまで進んでいない！（？が。）

まあ内容はほとんど知ってますがね。

十一話 知られざる過去。

『アスト！ こっちにはぐメタいる！』

『ちょ、馬鹿アスナ！ そんな声大きかったら逃げられるじゃん！』

『お前も声でええじゃねえかよ。』

『なんだとキリサ！ 今すぐ追いかけるぞ！』

『……もう消えてるよ』

『何っ！？ マジかレイジ！』

『マジです。ていうかアスナが見つけた時点でナーシュが攻撃して逃げてるよ』

『……きゆう。きゅき……』

『ナーシュっ！！』

『キュギヤーっ！？』

『しょうがないよ、キリサ、アスト。ナーシュはスライムなんだよ？』

『あはは』

『『そこ笑うところかーっ！！』』

懐かしい光景。

三年も前の光景だ。

私がみんなと旅をしていた頃の記憶……

アストは相変わらず大人っぽくて、かつこよくて、だけど優しい。キリサはちゃんちゃっぽい感じだけど、いつもの確にものを指摘して、頼りになる。

ナーシュはウォルロにいた小さなスライムで、なのに私たちになついて可愛かった。

そして……レイジは穏やかで、暴走しがちな私たちを優しくサポートしてくれた。

大切な仲間達。お師匠様のお師匠様……エルギオスを、倒してすぐに解散してしまっただけだ。

その旅の記憶は、今でも忘れられないとても大切な宝物なんだ。一番年下の私をちゃんとリーダーと認めてくれたし、つらい旅だつてわかってもらって私を見捨てたりしなかった。

どこまでも優しく、私がお師匠様も彼も亡くして諦めそうな時も一緒にいてくれた。

みんなもつらかったはずなのに……同じ仲間の、レイジを亡くしたことはつらかったはずなのに、私を気遣ってくれて。

感謝しきれないくらい感謝してる。

……自分からチームを解散したのを、どれほど後悔しただろう？最初に聞こえた声。あれは、たしかレベルが低くて魔獣の洞窟にはぐメタ狩りに行った時の会話だ。

魔物と死を賭して戦いに行くはずなのに、楽しくてたまらなかった。

残酷な世界を知っても、みんなと一緒にだったのが楽しくてたまらなかった。

人間は愚かで、失敗作と言った創造神グランゼニス。

私は……そうは思わなかった。

確かに、人は愚かかもしれない。自分の欲望一つで他の人間を傷つけたりするんだから。

でもそれは……神様も、天使も人間も同じのような気がしてならなかった……

「……私と一緒に行くのは、つらいかもしれない。ある意味破壊の道を辿ることになるかもしれない。」

それでも、私についてきてくれる……？」

「『もちろん！』『』」

「きゅー！」

「……いいの？ そんな簡単に……」

「こら！ 私より年下のお前がそういうこと言っんじゃない。それに、お前は危なっかしいから……放っておくことなんてできないだろう？」

『アスト……』

『そうだぜ。いくら人間じゃないからってそんなに背負うもんじゃねえだろ？ 少しでも年上の俺たちが助けてやらないとつぶれそう
で、見てらんねえよ。』

『キリサ……』

『きゅっ、きゅー！ きゅきゅきゅきゅ……』

『何言ってるかわかんないけど有難うナーシュ……』

『きゅ……』

『俺もついてくよ。俺はアスナの幼馴染さ。そんな幼馴染を残して、
つらい旅に行かせるなんて出来ない』

『レイジ……っ！』

『よしっ！ そーと決まったらあれやんぞー！』

『あれ？ ……あー、あれかな！？』

『あれって多すぎてわかんねえ……』

『はは、気合入れるパターンーだと思っ』

『あああれか！ 頭いいなレイジは。』

『じゃーやろっ！ ナーシュも私の肩乗っかって』

『あ！ そこ私の席なんですケド！』

『へ？ ごめんサンディ……ならナーシュは頭の上だね！』

『きゅっきゅー！』

『じゃあやろうか！ いい旅路になりますよーに……』

『『『『えいえいおー！』『』『』』』

+ . + . +

「……兄貴、兄貴はどうしてドルマゲスの奴を追ってんですかい？
トロデのおっさんはアイツのことになると不機嫌になったり、馬
姫様のことを気遣ったり、自分の姿のことを言ったりするんですが
が……」

「……それは、それはね……」

二人の声が、不意に聞こえた。

どうやらさっきのは夢だったようだ。

薄く眼を開けると窓の外は真っ暗で、日は昇ってきていない。

エイトの何処か厳しさを含ませた声で、はつきりと意識が戻った。
気絶するように寝たからね……今は全然眠くないけど。

サンデイは珍しく真剣な顔でいた。

「……二人とも。何話してるの？」

エイトが無言でいるうちに声をかける。

すると二人は驚いたように私を見た。

サンデイも驚いたように見て、勢いよく飛んでくる。

エイトは私に向かって訊く。

「……アスナ、いつ起きたの？」

「今……懐かしい夢見た……いや、関係ない。」

取りあえず目、覚めちゃったし、話してよ。私も気になってたんだ。

「

「アスナ……君は」

「関係ないって？ まあ私は君らのおまけみたいなもんだけどさ……

……そういうのやめてよ？ 水臭いの嫌いなんだ。それともまあ子供扱い？ そんなんだったら私の刀……じゃなくて、剣が唸りをあげます。」

「脅しはよくないですよ……」

「るっさい！ アストはいつもキリサ殴ってたしダイジョブ！

人間って天使が思ってるより強いんだから……」

「天使……？」

「あ、関係ないからそれね！」

はー、危ない危ない。危うく正体ばらすところでした。

サンデイごめんね、ハラハラさせちゃったか。

とーにーかーくーだ。

「仲間に隠し事いけないと思うのでそこんとこよろしく！ そんなにもごもごしてんのは似合わないからやめとけ！ 男として！」

「男としてっ!？」

「……って、アストが言ってたの思い出した。」

「そのアストってどういう人なんだよ……」

「暴力的な人と見たでがす」

「こらあヤンガスっ! 彼女は銀髪灼眼の少しヤンキー入った美女なの! あとエイト! 君よりも二つも年上なんだよ!」

「ええっ!? 僕より年上!？」

「そーだよ。私十四のとき十七だったもん」

「……ってことは今二十……」

ゴン!

「痛ったあ!？」

「アストを軽く侮辱すんの駄目!。エイトだつて後二年でおじさんヤンガスはすでにおっさん。」

「「酷ッ!？」」

「……なんてね、まだ二十歳は若い方だから大丈夫。まあ、ヤンガスはすでにおっさんだけどね……」

「あつしはどうしてそんな扱いされるんですが!？」

「まあ、雰囲気も柔らかくなつたわけだしどーぞエイトさん話して」

「無視でがすか!？」

ヤンガスが騒いでるけど放置。

エイトが頷いて、話は始まった。

+ . + . +

僕は、前にも話した通りトロデ陛下の家臣だったんだ。

……そう、本当の王家の出の人さ。

もちろん、姫様……ミーティアも、れっきとしたトロデーンの後

継者だった……

姫様と僕は、幼馴染なんだよ。

十年前に拾われて以来、僕は兵として彼女らに仕えることにした

……

けれど、姫様の結婚が決まってからそう何カ月も経っていない頃、

それは起こった……

それは、ある日の夜の話。

みんな寝静まって、静かな夜だった。

けれど、その静寂の時が何故だか不気味に思えたんだ。

僕は、その日見回りをしていた。

その日は、何故か嫌な気配がして、自ら陛下に志願したんだ。

『……なんだろう。夜だけど、この薄暗さは……』

月は、出ていないのか。

けど、この暗さには……

やはり、不気味さを感じてしまう。

何か不吉なことが起きるのではないか……

そう考えてしまうほどに。

その、瞬間だったんだ。

ドガンっ！！

『……！！』

何か、大きなものが落ちる音。城のレンガが崩れた音だろうか？

そう思っ行ってこうとしたが、今度は窓が割れる音がした。

『何が起こってる……！？』

大きな音が響く中、近くの窓が割れ、そこから……

そこから、茨が出てきた。

それは、とても不気味な気がして思わすのけぞる。

剣を抜こうと鞘に手をかけるも、その前に茨が全てを覆い初めて

……

僕は急に意識を失ってしまった。

それから目覚めた時、城はもうめちゃくちゃだった……
石でできた地面はめくれ、色んなところが崩れ落ち……

茨に囲まれて、他の兵たちは全員茨と化していたんだ……

『……そ、そんな、嘘…… どうして、こんな、ことに…… どうして
……みんな、は……』

どうして自分だけ…… どうしてこうなった？

そんな思考だけが、頭の中を支配していた。

少しの間、放心状態と言えたかもしてない。

そんな僕の思考の中に、姫様と陛下の顔が浮かぶ。

『っ！！ 姫様、陛下ッ！！？』

茨と化した仲間たち。それをなるべく見ないように城の中を走った。

そこで、封印の間へ続く扉が開いていることに気付く。

……嫌な予感がしたんだ。

馬のような、鳴き声が聞こえたから……

『姫様っ、陛下！？』

封印の間。

伝承によると、世に出してはいけない杖が封印されている部屋だ。
そこには結界と言える、変わった形と色の光が輝いている。

陛下曰く、この杖の力を弱める術式らしい。

そこに、緑色の肌をした魔物と、美しい白馬が倒れていた。

すぐにわかった。この二人は、陛下と姫様なのだ……

『姫様、陛下！ 大丈夫ですか！？』

気絶している二人。声をかけたらすぐに目を開けた。

『エイト……おぬしは無事だったか……』

『ひひーん……』

『姫様……陛下…… 一体何が起こっているのです？ 杖は消えてしまっているし、城は酷い有り様です』

『お前、最近よく城に立ち寄っていたドルマゲスという道化師を知

つておるな?」

『はい……あの気味の悪い道化師でしょうか、よもや、アイツが……』

『そうじゃ。力を求めてやってきて、杖の呪いを放ったのじゃ。わしらはこの結界のおかげで見動きはとれるが……結界の力あってもこのありさま。他の兵たちは?』

僕は問う陛下に、黙って首を横に振った。

『そうか……取りあえず、此处を出なければならん。わしは馬車ともしもろを探してくる。お前は着替えてくるのじゃ。トロデーンのも者でないと思われるものなら何でもよい。武器と簡単な装備は持っていくぞ。外は魔物がうろついていて危険じゃからな……姫は出るならば外へ。そこで待ち合わせじゃ』

陛下のお言葉に、僕も姫様も頷いた。

+ . + . +

「そうして、僕たちは旅に出た。ヤングスと出会ったのはそれからちよつと先だね……」

「そうだったんですが……」

「ごめんね、辛いはずなのに無理矢理話させちゃって……」

「いいんだよ。一緒に旅する以上、いつかは話さなきゃいけないことだったから。」

「……うん。」

……そうか。だからトロデはドルマゲスを恨んでいるんだね……マスター・ライラスの話だと、封じられていたという杖は『神鳥の杖』と言って、中には暗黒神ラブ……ラブサン? が封じられているらしい(間違ってます)。

それで、その杖を持ったドルマゲスを追っているわけだ。

ドルマゲスを倒せば呪いは解ける、と。

……でもちよつと違う気がするんだよなあ……

その、暗黒神を倒さないとうにもならない気がする。

まあそこら辺はわかんないから、下手に口出ししない方がいいね。

……完全に私、巻きこまれてますけれども！（泣）

エイトは哀しそうな顔をしてけれど、すぐにいつものにつこりスマイルに戻った。

「余談としてはね、馬車の話なんだけど……」

姫様は馬車に乗って、陛下が引こうとしてたんだ。」

「それ、無理だと思う！」

「明らかにそう思えるでがすね。」

「そう。結果はもちろん駄目で、頑張っていたんだけど姫様が見かねて自ら引き始めたんだ。」

「トロデ、涙目だね」

「うん。しょんぼりしてた。」

「くしゅんっ！」

「ひん？」

「……大丈夫じゃミーティア。エイトたちがわしの噂をしているのかのう……？」

あながち間違っていないかったりする。

「うーん。大変な旅になりそうだねえ。」

いや、まあ大変な旅になるのはわかってるけどね？　すでに。

暗黒神つてとこですでにラスボス決定な気がします。悲しい……

「あ、そういえばさ。」

エイトが急に話変えた。嫌な話題だからな……

何？　と応えろと。

「その笛、何なの？　飾り……じゃないと思うけど。」

「ああ、これ？　もらったんだ。なんつーか、そのお……吹くとい
いことが起こる的なやつなの。」

「そ、そうなんだ……？」

吹くと何が起こるかもわかってるけどね！

真夜中だから吹くのは駄目だし、天の箱舟が来るかもわからないけどってこられても困るわ……

宿は駅じゃないから。本当に来られても困るしね。駅なんてないけど。

あ、なんか急に前世の話で、ノアの箱舟って思いだした。

箱舟繋がり……？

確か神様がいるものだけ箱舟に詰め込んで、水で人間界を大掃除するやつだよな（そんな軽い話ではない）。

うちのとこの神様はビームで大掃除しようとしてたけど……セシア様が命を賭して大掃除阻止してたけど（なんか壮大な話がだんだんアホらしくなってる気がする）。

「まあ、ともかくもうこんな時間だしさ、寝よ。おやすみ」

「あつ、エイトが寝た！」

「兄貴、寝るの早いですがよ」

ヤンガス、お前子供か。

「ぐう」……」

「「寝るの早っ！」」

あんたはドラ○もんの○た君、もしくは伝○伝のラ○ナ・リユートか！（どちらも寝るの速い。）

まあ私も寝よ。明日はリーザス村探検だあ、オー！

十一話 知られざる過去。 （後書き）

ちなみに最後のやつで。

ドラ○もんとは知っての通り国民的アニメでございます。
青狸がちゃっちらー！ とするやつです。

伝勇伝は…… あ、ばらしちゃった。まあいいか。

わかんない人多数でしょうが、私が書いている他の二次小説の原作ですね。

ラ○ナ・リユートを簡単に説明すると、一日48時間寝ないと駄目な人らしいです。（笑）

天才のくせに、昼寝好きな主人公と言っておきましょう。
どちらも寝るのが秒単位です。

さて、今回はトロデーンでの話とアスナの過去一部公開なわけですが。

…… エイトさん、リアルに勇気スキル低い！（笑）

放心状態とか、実際あるともしれないのでこんな感じにしときました。

書いてて変だったかも……

変だと思ったところの指摘、感想などお待ちしています。

十二話 赤く燃える瞳の向こうで（前書き）

なっげえ……

もうすこしで八千行くところでした。

最初ら辺で結構飛ばしてたんですがね。

うーむ、こんかいはシリアス要素が最後にかたまってます。

あと、こんかいはゼシカと兄の話なので回想シーンの少しのびみよ

ーな残酷描写？ に注意です。

なるべくぼかしてはいますが……

十二話 赤く燃える瞳の向こうで

静かな村の宿屋の一室。

そこは村と同様、静かだった。

そう、静かなのだ……

ある事件によって。

人々の悲しげな表情が印象的な村となっている。

その、宿屋の一室で。

わあああああああああああああ！？」

悲鳴が聞こえた。

宿屋の女将が驚いたようにのけぞり、走っていった。

場所は悲鳴の聞こえた部屋。

その部屋は——アスナの部屋だった。

「ね、寝過したあああ！」

「アスナどうし……ってもうこんな時間なんですケド！？」

「さりげなく置き手紙……『先に情報収集に行っています』……置いていかれたあ——！！！」

「ちよつとどうしたんだい！」

宿屋の女将がバンっ、と扉を開けて入ってくる。

それに私は硬直。

その後ワケを話してペコペコとしながら謝った。

お詫びというか、半分しぐさの『おじぎ』だったね。

これだけで何回ダーマの塔の扉が開いたことか……

ちなみに、今は暗いです。

……暗いだとお？

日が真上どころか、もう沈んちゃってる……

しかもエイトたち帰ってこないし。こりゃあ、なんかあったな。

私も情報収集に行きまっせー！

というか、どうしてこんなに寝たんだろうな……いつもはすぐに起きんのに。

そんなこんなで屋外。

表情沈んでますね」

話を聞いてみると、色々聞いた。

村についたばかりの時、おばさんが言っていた『不幸』とはこの村の用心棒が殺されたことらしい。

その人はこの村の有力者の息子で、かといってえぱったりせず自ら用心棒を引き受けた心やさしき青年だったという。

名はサーベルト・アルバート。

妹がいて、その子はゼシカ・アルバートといい、剣が得意なサーベルトと違い魔法が得意なんだとか。

彼らの母親は厳しく、家訓を押しつけるように過ごしていたらしい。

そして兄、サーベルトが何者かにより殺されてしまい、妹のゼシカが敵を討つと言った。

もちろん彼女の母、アローザ・アルバートは反対。しかし理由は家訓で、ゼシカは怒って部屋に閉じこもったのだという。

……しかし。

ゼシカは諦めて部屋に閉じこもった……そう思われたが、実は彼女は諦めてなんかいなくて、いつの間にか置き手紙を残して消えていたらしい。

恐らくいる場所はサーベルトが殺されたという『リーザスの塔』。その開け方は村人にしか知らされてないのだとか……

「なんか、ダーマの塔みたい」

「ウーン、しぐさで何とかなるかな？」

「多分違う……エイトたちはしぐさも知らないようだし、そこは世界観の違いかなあ？」

「似てるケド、違う部分も多いもんだネ」

サンディと会話しながら、リーザスの塔へ向かう私たち。

ん、魔物？ そんなの殺気少し出すだけで逃げて行きましたよ。
……だんだん私は人として、そして天使としてかけ離れていつて
いる気がするわ……

そーして到着。

大きな門があるけれど、上の方からは塔がそびえたっているのが
見える。

うーん、そこまでおつきくないかな？

ダーマの塔の方が大きいし。こんなん楽勝…… そう思いたいけれ
ど、まずは門だね。

どうするか……

「取りあえず、これ。」

そう言いながら、腰をきつちり45度に折り曲げておじぎー。

おっ！ 綺麗に出来たよ、まあ簡単ですがね。

しかし門は開かない。こんな古いのにんなハイテクなのないよね
。

「どうすんの？ コレ。」

「どうしようか…… まあ押すか引くか、それとも受け狙いにシャッ
ター上げるみたいに上へあげてみようかしよ。」

「そりゃフツーないっしょ。そんなんだったら誰でも入れるし。」
サンディが小さく笑った。

私は押す。しかしびくともしない。

引く。開かない。もっと強く引つ張ってもいいけど、門が壊れそ
うだからやめた。

私の力、現時点できつと軽くそこの男よりあると思うから……
あ、それって戦闘の時だけだった。通常でそんなん生活していけ
ないしね。

まあやめよう。意味無いみたいだし。

「うむむ。これも無理かあ」

「どうしょサンディ……」

「試しに冗談で言ったのやってみようよ。」

「はいはい」

私はしゃがんで下の方に手を入れる。
少し、軽いように思えた。

上げようかなと、少し力を加えただけでふわりと浮いた気がした。
「これってひよつとして、マジ当たり？」

「マジすか！ そんなん笑えないよ。」

私はそのまま、一気に押し上げた。
するとそれはまるで前世の世界でのシャッターのようにガラガラ
ガラつと上に。

……これ作つた人、私の前世でも見たのかい？ と思えるほど木の
シャッター状態。

「……マジか」

「呆けてる場合じゃないけれど、アホらしくてそうなるのは仕方ない
ことかも」

苦笑。そのまま塔の内部に足を運んだ。

内部は蔓が侵入してるも、綺麗だった。

まあ壁の石みたいなのが散乱してるけれど。

そんなもん、障害のうちに入らないよ。

地面を見ると、なんか焦げた跡発見。それも、まだ新しい。

魔物は倒されると消えるから、これは炎の魔法でも使った後なん
だろう。

エイトはレベル10で、炎の魔法は使えない。

ならこの跡は……魔法が得意だという、ゼシカの放った魔法の跡
だろうか……

「ゼシカって人は、マジで怖いみたい。そういう女は嫌われるんだ
よって言ってあげたいね！」

「そ、それは同意しかねるなあ……」

「はは、まあ進もうよ。でこっちはファイアフォースを纏わせた体
でどーんと……」

「却下だあ！」

そんなんやったらそのゼシカさんをぐっさりやりかねないし……
どうして炎で張りあうんだよ。

「あ！」 神様からの贈り物”発見っ”

「まあたそれ？」

「だってロマンがだぜえ！」

「意味わかんないし……」

私は宝箱を開けて、地図を抜きとる。

おkおk、これでもおダイジョブー

そんなこんなで魔物を時々斬り伏せたりしながら進む。

はしご登ってー、樽破壊に壺破壊に……

「……もう、こんなの使えないよ。イラネイラネ。」

「悪党天使！ あんた自分が天使の生き残りって自覚あんの！？」

そこで、なんか変な模様のが付いてるのを発見。これなあに？

「変な模様」

「ちよつと触つてみ、アスナ」

サンディはちよこんと私の肩の上に。ふー、といいながら座ったあたり、お疲れの様子らしい。なんかおばさん臭いぜ！（笑）

私はその、青い二つの光が輝いている丸い模様に手をさしのばして、触ろうとする。

するとすぐ近くの壁が私を巻き込んでくると回転。心臓に悪い仕掛けを作ってくれましたなあ、こんにやろ。

驚いて閉じていた目を開けると、そこには……

「「ひ、ひにやああああああああああっっっ！？」」

魔物がどーん。しかもじんめんがえるゝついでに裏側イエイ。

こんにやろ。マジで心臓に悪い塔だな……

もちろんじんめんがえるさんはばっさりでした。おそまつさま、

「マジさげばよなんですケド……ありえなくな〜い？ いきなりこれはないっしょ」

「さげぼよ？」

「うん、さげぽよ？」

これ、環境依存文字使うな。

ん？ 環境依存文字って、なんぞ？

ま、いつか。先行くんぞ〜

こうしてなんやかんやで一番上に到達。心臓には悪いけど、中々面白いものでした。

ただ、好きで立ち寄ろうとは思いませんがね！ また脅かされたら刀で扉斬り裂こうと考えてるよ。

さつき盗賊の鼻でふんふんと嗅いだところ、お宝はほとんど回収済みな感じ。

地図は取ってなかったのにね。それは取っとけよ。

それにしてもエイトたちいないねー。もしか、リレミトかましたりした？

そしたらちよつと私損したかも……まあ、そうかはわかんないから進んだけどね？

もち、取り残しの宝箱物色しながら。

けど、私の「リレミトしたんじゃね？」疑惑はすぐに晴れた。

エイトたちが、そこにいたから。

……そして、もう一人。

私と同じくらいの、茶色の髪の少女。

きつと、彼女がゼシカだ。

魔法を使おうとしている。

赤い光。

炎だ。

これは、メラだ。

エイトは俊敏なその動きで、次々と放たれる炎を避け続ける。

「あつしこんがりローストになる！？」

叫ぶヤンガスをよそに、冷たい視線を送るゼシカ。

ゼシカは真っ直ぐエイトたちを見つめ、言う。

「盗賊だけあって、さすがにすばしっこいわね！ けれど今度は逃

がさないわよ……！？」

風が大きく渦巻いて、魔力による紫の妖しい光が薄暗い最上部にともされた。

どんどん大きくなって、ついにはメラミくらいの大きさにまで到達している。

ゼシカの憎悪に燃えた瞳が、ゆらりとエイトたちを捉えた。

「覚悟……しな……さ……い。」

エイトは身構える。

私は、ぎりぎりエイトたちに見えない位置で刀を抜いて、集中した。

世界の流れを味方にし、ばねで体を素早く動かすために。

—— その時だった。

—— ま……待て………。

「……っ！」

ゼシカとエイトが息をのんだ。

ゼシカは驚いたように目を見開き、エイトもまた驚いた様子だ。

私は刀を持ったままの態勢でいる。

「マジすか……」

サンデイが像を見て、呟いた。

綺麗な赤い石……宝石だろうか？ が瞳の部分に埋め込まれた像

から、その優しげな男の声は響く。

ゼシカが放った炎で真っ赤に燃える像を、皆それぞれの表情で見つめていた。

—— 私だ……ゼシカ……。

私の声が……わからないか……

やはり優しげな、しかし途切れ途切れに紡がれる声。

ゼシカの雰囲気は、緊張しながら、しかし嬉しそうで悲しそうな、そんな雰囲気だった。

「サ……サーベルト兄さん……！？」

——その呪文を、止めるんだ……。ゼシカ……私を殺したのは……この方たちではない……。

「と、止めるったって……もう、止まんないわよっ！！」

大きく燃えた炎。ゼシカは叫ぶと、炎を放った。

私は飛びだす。

エイトに当たりそうな炎を、風を纏った刀は容易く斬り裂いた。

「あ、アスナ……っ？」

「しっ！」

「へ？ ……ってわっ！」

エイトのすぐ横を、茶髪のツインテールの少女が駆けた。

像に向かって走っていく。

少しぶつかってしまい、よろけたエイトを私は支えた。

ゼシカはそんなことお構いなしに、叫ぶように言った。

「サーベルト兄さん！？ 本当に、サーベルト兄さんなの！？」

——ああ、本当だとも……。

聞いてくれ、ゼシカ……。

そして、そこにいる旅の方よ……

燃え盛る炎。それが放つ赤い光に照らされながら、私たちは像を真っ直ぐに見据えた。

像から聞こえる、暖かい声……

ゼシカは食い入るように見つめる。

兄の声が聞こえる、リーザス像に……

——死の間際……リーザス像は、我が魂の欠片を預かってくださった……

この声も……その魂の欠片で、放っている……だから……もう、時間が……ない……。

——像の瞳を……見つめてくれ……。

そこに……真実が刻まれている……

さあ……急ぐんだ……。

皆、赤い瞳を見つめる。

その瞳には……魔力を感じた。

特殊な宝石。そのことがすぐにわかった。

力は女神の果実とも比にはならないが、特殊な魔術に用いるときに存分に力を振るうだろう。

また、サーベルトさんの声が響く。

——あの日……塔の扉が……開いていたことを……不審に思った私は……

一人で、子の塔の様子を見に来た……

そして……

刹那。

目の前が真っ暗になった。

……そう、思ったら目の前に映像が流れる。

セピア色の映像、私はサーベルトさんの見せる真実ということに悟った。

以前にも、こういう記憶は見た……

エルギオスと。

ラテーナさん。

悲劇の二人の記憶……

そして、今回は——

+ . + . +

あたりをきよろきよろと見渡す青年が、階段を上がってこの階に辿りついた。

鉄製の鎧、兜、剣を身に付けた青年だ。

彼は恐らく、サーベルト。

凜々しい顔をした青年は、一度像を見つめてから後ろを振り返った。

そのままじっと見ていると、後ろ……リーザス像の方に、一つの

影が現れる。

道化師姿の男……奇妙な佇まいの男だった。

サーベルトはさつとふり向き、すぐに剣の柄に手をかけた。

勇気ある青年の声が、塔の最上階にこだまする。

『だ……誰だ貴様はっ！？』

『悲しいなあ……』

『な……なんだとっ！？ 質問に答えろ！ 貴様は誰だ！ 此処で何をしているっ！？』

『くつくつく……我が名は“ドルマゲス”。此処で、人生の儚さについて考えていた。』

そう、こいつがドルマゲス。

エイトたちが追いかける、道化師。

トロデーンに呪いをかけた……憎き男。

そいつは不気味に笑いながら、サーベルトを見据える。

『ふざけるなっ！』

叫んで剣を抜こうとした。

しかし、何故か抜けない。

それどころか……

『くっ……どうしたことだ！ 剣が……剣が抜けんっ！』

『悲しいな……。君の、その勇ましさに触れるほど私は悲しくなる

……』

何度も剣を抜こうと足掻くサーベルトをあざ笑うかのように、鳥の形をした奇妙な杖の瞳が輝いた。

瞬間、サーベルトの体は何かに縛られたように、動かなくなってしまう。

『ぐわっ！ き……貴様、何をした！？ 身体が……くそっ！ 動かん！』

サーベルトの頬を、汗が伝う。

しかし身体はぎちぎちと震えるだけで、動こうとしない。

ドルマゲスは、勇敢な青年のもとへ歩く。

不気味な笑い声に呼応するように、鳥の形をした杖の瞳が妖しく輝く。

強く、強く。

やがて道化師……ドルマゲスは、笑いながら消えていった。

……一人の青年の亡きがらと、わずかな笑い声の響きを残して。

リーザス像が見守る中、嵐のその時に一人の青年が亡くなった事実。

そして、彼が亡くなったのは一つの城を滅ぼした道化師の男……

その事実を、この記憶は伝えていた。

+ . + . +

そうして、映像は途切れる。

見えたのは、この塔の護り主とも言えるリーザス像の記憶。

そのリーザス像を囲むように、私たちは立っていた。

そして響く、記憶の中にあつた青年の声。

途切れ途切れに聞こえるその声は、もう時間がないということを教えてくれているような気がする。

——旅の方よ……

リーザス像の記憶……見届けてくれたか……。

——私にも……何故かはわからぬ。

だが……リーザス像は……

そなたが来るのを……待っていたようだ……。

——願わくば……このリーザス像の記憶が……そなたの……旅の助けになれば……私も……報われる……

私はふと、思った。

こんな優しい人が、なんで殺されてしまっただろう……？

元の世界でもそうだった。

優しい人ばかり、嫌な目に遭うんだ。

どうして、なんだろう……

隣りを見てみると、エイトが緊張した顔をしている。

ヤンガスが珍しく真剣に話を聞いている。

いつの間にか現れたトロデが唇を震わせている。

ゼシカは……泣くのを我慢しているかのような、そんな顔をしている。

彼女の兄……サーベルトは、つらそうな、しかし優しい声で私たちに起きた出来事を告げてくれる。

こんな目に遭っても、人を思って声をかけてくれている。

これもすべて、暗黒神だとか言う奴のせいだ。

無性に腹が立ったが、顔に出さないように努力して話を聞く。

——ゼシカよ……。

これで……我が魂の欠片も役目を終えた……。お別れだ……
「いやあつ！ どうすればいいの！？ お願い……いけないですよ……
…兄さん……」

抑えきれず、堰をきったかのように私と同じくらいの歳の女性が涙を流す。

小刻みに揺れる彼女の肩を、私は見て思わず目を逸らす。

いけないで、と首を振って訴えるように言うゼシカに、優しいな声で語るサーベルト。

——ゼシカ……最後に……これだけは……伝えたかった……。

この先も、母さんはお前に手を焼くことだろう……。

だが、それでいい……

——お前は、自分の信じた道を進め……

さよならだ……ゼシカ……。

声が聞こえた瞬間、炎の勢いが徐々に静まっていく。

そして消えたと思うと、リーザス像から光が上へ昇っていった。

優しい、光だった……

その時、私は見た。他の人には見えない、青年の姿を。

大事な妹に言葉を伝えることが出来て微笑むその姿を……

ゼシカはそのまま膝をつき、俯いて顔に両手をあてた。

小刻みに揺れる背中が、なんとも言えない悲しさを思わせた……

像の前に泣き崩れるゼシ力を見据えたまま、不意に声が聞こえた。
「ふーむ、なんたることじゃ。あのサーベルトやらを殺した奴め、間違いなくドルマゲスじゃっ!!」

「おっさんいつの間に!？」

見覚えのないその奇妙な姿に、私は驚きを通り越してあきれた。
ちよつと、思う。

どうしてこの人たちはこんな悲しいことが起きた後で、こんなにも明るくいられるんだろうなって……

私だったら、まだしんみりしていると思う。

あのときみたいに、ね。

「何故かはわからんが、サーベルトとやらもまた、わしらにドルマゲスを倒せと言っておるようじゃ。」

ふむ……彼の想い、決して無駄にはできんな。

これでまた一つ、ドルマゲスを追う理由が増えたということじゃ。」

トロデの冷静な声が塔に響く。

私は頷く。

エイトも頷いた……ヤングスはいまだに『おっさんいつの間に!？』のポーズだけれども。

「それじゃわしは馬車で待っておるぞ。……じゃっ。」

固まっているヤングスを見て、片腕を軽く頭の上で振ると彼は踵を返す。

相変わらずのア○レちゃん走りで階段を下りていった。

結構魔物いたけど……どうやってきたんだろう。

自分の肩周辺を見ると、サンディがハンカチで自らの目を拭いていた。

……いや、涙を拭った、の方が正解だろう。

あんたいいやつじゃん、というところ「ちょ、ちょーシラける」なんて言っただけなのは目に見えているので、ほっとくことにした。

エイトは、泣いているゼシカをどうしようかと少しあたふたしていたので、「今は放つといてあげよう」と言つといた。

こういうときは一人にいる方が整理できる。

現実を、信じやすくなるから、そこまで構つてあげる必要はない。立ち去ろうとした時、ゼシカの声が聞こえた。

「あ、ねえ……」

ふり向くと、気まずそうにしているゼシカがいた。

涙は止まっているものの、まだ涙の跡が残っている彼女を見て、

「なんですか？」

と、私は応えた。

彼女は手をもじもじとさせて、少しすまなさそうに言う。

「名前もわからないけど、誤解しちゃってごめん。今度ゆっくり謝るから…… だからもうしばらく、一人でここにいさせて……。ごめん。少ししたら村に戻るから……」

そう言つて、両手で顔を覆う。

やっぱりまだ…… そんな簡単に、立ち直れるわけないよね。

むしろ、こうやって声をかけられるということ自体凄いいことだと思ふ。

そうしてまた、地面に崩れるように座り込むツインテールの女性。私たちはエイトのリレミトにより、この塔を脱出した。

…… リーザスの塔に流れる滝のような清らかな水が、彼女の心情をあらわしているかのように見えたのは私だけだろうか……

十二話 赤く燃える瞳の向こうで（後書き）

……どうやったらギャグって上手く書けるんですかね。
私の書くのって、シリアス中心が主なのでギャグはどーしても出来
ないんです。

本当に難しい……

回想のシーンだなんて、いきなり三人称ですし。

ほとんど三人称に見えてきた……

……ヤンガスの「こんがりローストになる」発言。

自覚してたんだって少し思う話になりましたとさ（笑）

十三話 親子の刻むその物語は……。 (前書き)

お久しぶりの更新です……遅れてしまい、申し訳ないです。
今回はやけに三人称ぽいのが。

十三話 親子の刻むその物語は……。

私たちは、リーザス村に戻り、その後宿へ向かった。

ゼシカのことには気になるけれど……今は放つといた方がいいから、エイトたちについてった。

宿の前でポルクが待ち伏せしてて、ポルマル二人の小遣いはたいて宿取ってくれてたのには驚いた。

珍しく感動しちゃったよ……普段からこういう態度でいればいいのにね。

そう言えばさあ……寝る前に、どこかでカンカン、カン、コンコン、コンって音がしたんだけど……

気のせいかしら、ね？

気にせずすぐに寝てしまったけれどもね。

そして、帰って来た時真っ暗だった村に暖かい太陽の光が当たり

……

日が、一番上まで昇った。

エイトたちは情報収集後にダンジョンへ休みなしに直行し、疲れがたまっていたのかお昼になっても起きなかった。

私はなんとかいつも通りに起きれたけど、起きる気配のない二人を見て二度寝。

そんなこんなで、寝るだけで時間が過ぎていたり。

ゼシカのことなんか、眠気に任せて忘れていたり。

……ごめんねゼシカあ……今どうしてるんだろなあ……

さすがに悪いと思ったので、一時期に無理矢理二人を起こす。

うつかりすると瞼が閉じそうなエイトと、時折いびきを響かせるヤンガスを率いてゼシカ宅へ潜入！

……てめ、かえん斬りでこんがりロースト調理中状態にしてやるのか？

とかなんとか少し黒い思考も織り交ぜながら、ゼシカさん宅へ突

撃です！

『突撃、ゼシカ宅の昼ごはん！』（笑）

そーんな変な思考。

だけど、そんな思考通りにはことは進みやしない……

「私は兄さんの仇を打つの！」

「仇を……打つ、ですって？ ゼシカ！！ バカを言うのも、いいかげんにしなさい！！ 貴女は女でしょ！」

ビリビリっ……

空気が震えるって、このことかいな……

初めて体験しました。

え？ 何が起こってるつかって？

ゼシカと、アローザさんが喧嘩……言いあいをしているのよ。階段を上って二回についた瞬間に聞こえた大きな声。

流石にこれで、エイトもヤンガスもお目目ぱっちり完全覚醒状態。いや、まあ覚醒といってもアレ系の覚醒じゃないけどね？ エイトの覚醒って言ったら剣握ったときのアレだし……

いやいやいや、ンなのは関係なくて。

ポカーンとしている私たちに、なんかナヨナヨした声が聞こえてきた。

「お……おいおい君い！ 取り込み中だ。話なら、後にしなよ」

……金髪キノコ男。

無駄に下まつげが長くて、服の趣味がマジで悪い……

初めて見た、こんな趣味悪い人。

怯えたように去っていくそいつは、ヘタレの様で。

ああ、そりゃ残念なキノコだのお……

そうこうしているうちに、アローザさんの声。

「サーベルトだって、そんなことを望んではないはずよ！ 今は

静かに先祖の教えに従って、兄の死を悼^{いた}みなさい！」

ゼシカはその言葉に、左腕を横に振って叫ぶように言った。

「もう、いい加減にしてほしいのはこっちよ！！ 先祖の教えだの

家訓だのって、それが一体何だったの！？ どうせ信じやしないだろうけど、兄さんは私にこう言ったわ！ “自分の信じた道を進め” ってね。だから、私はどんなことがあっても絶対に兄さんの仇を討つわ。それが私の信じた道だもの”

きつぱりと——そんな、言葉が似合う言い方だった。

絶対にアローザさんの言うことなんか聞かない、という決意の色が強く瞳に宿ってるのがわかる。

……あれは、誰でも止められない人の色だな……

どこかで見たことがある、瞳だと思った。

……そうだ。ずっと前の……ガナン帝国が、ナザム村を襲った時の。

ラテーナさんが、絶対にエルギオスを見つけ出すと決意したときの——……

懐かしく思った。もう、三年も前の話なんだなあ、とちよつと考えた。

決意の色を示したゼシカに、アローザさんは怒りの表情でうつむき、そしてこう言った。

「……………。わかったわ。それほど言うなら、好きなようにすればいいでしょう。……ただし。私は今から貴女を、アルバート家の一族とは認めません。この家から出ておいきなさい」

それはちよつときつすぎじゃ……

そう思ったが、ゼシカは表情を変えることなく言った。

むしろ、清々するとも言つように。

「ええ、出ていきますとも。お母さんは此処で気が済むまで思う存分引きこもってればいいわよ！」

手を払うように動かし、怒ったようにどすどすと歩き去っていくゼシカ。

……向かったとこ、私たちの方じゃなくてよかったとかちよつと考えちゃう。

だってそれくらいにも少し怖かったんだもん。

怒りの形相でどすどすと、だよ？

誰でも怖くなると少し思うな。

ゼシカは、自分の部屋へと歩いていった。

そこには部屋を護るように立つ、ポルクとマルクの姿。

二人はなんとなく怯えているかのような表情でゼシカを見上げる。

ゼシカは二人に向かって、

「ポルクッ！ マルクッ！ 荷物取ってくるから通して！」

明らかに機嫌悪そーなゼシカに跳びあがって場所を空ける二人。

……可哀そー……

しかもゼシカは扉を開けて入ると、ドンッッ！！ というような大きな音を鳴らして強く扉を閉めた。

またしても跳びあがるお二人。実は私たちも軽く跳びあがっていたりします。

エイトがさっきのおねむの表情は一体どこへやら、顔をわずかに強張らせて固まっていた。

ヤンガスも同じく……ここにお二人は仲がよろしいようで。

私は……普通かな？

なんかね、此処が懐かしいような気がするんだよね。一度こういう所に行ったのかな？

だから構わず周りを見渡してただけだよ。

それから程無くしてゼシカの姿。

彼女の姿は……

先ほどの白い服とは違う、胸元が大胆に開けた服。

……うう、見てて悲しくなってきました。

彼女は凄い巨乳というもので、白い服からもそれは明らかだったんだけどさ。

こういうわかりやすい服を着てもらうと、なんだか微妙な大きさである私は悲しくなってしまうてね。

いやまあ、まな板の人の方が悲しいだろうけれど。

それにしてもお譲さまは着ないであろうその服、外に出ちゃいけ

ないのにどうやって手に入れたんだろう？

謎は深まるばかりだね。

ゼシカが扉を閉めると、ポルマル二人はまたも扉の前に。

その二人の前にしゃがみ、優しさどこか寂しさが混じる表情で微笑んだ。

そして語りかけるように言葉を紡ぐ。

「ポルク、マルク。あんたたちのこと、色々と利用しちゃってごめんね。」

「ゼシカ姉ちゃん……本当に、村を出て行っちゃうの？」

寂しそうに、俯いて問うポルク。

ゼシカはあくまで優しくな声で告げる。

「うん……。だからこれからは、あんたたち二人がこの村を守るのよ。サーベルト兄さんがよく言ってたわ……。ポルクとマルクは将来、村を守る立派な戦士になるだろうって」

「えうえう……。あうう……。……」

「ほら、泣かないの」

泣きだしたマルク。ゼシカは優しく撫でてあげる。

それでも泣きやまないポルクに、愛おしそうに微笑んで立ちあがったゼシカ。

「さあ、もう此処の見張りは終了よ。これからは、外の見回りをよろしく」

「イ……。イエッサー!!」

泣き出しそうになりながらも託されたその言葉に、なんとか返事をすするポルク……。

そのまま二人は走り去って行った。

それを最後まで見届けると、後ろを振り返りアローザのもとへ。

……。一体何を言うつもりなんだろう？

「それじゃあ、言われたとおりに出ていくわ！ お世話になりました！ ごきげんよう！」

大きく言い放った。

驚きを隠せないけれど、そのうちにゼシカは身を翻して去っていく。

……あれ、お礼は？

ま、いいか……サンディは横で騒いでるけどね。あげるって言うといてあげないなんて最悪なんですケド！　ってね。一度シメとくから安心しといて（どこがだ）。

「あの嬢ちゃんはよっぽど気が強いようだがすね……」

「そ……う、だね。」

未だに固まってるエイト。おいおいおい……

私はそのまま階段を降りようと思った。

けれど、一つのつぶやきが聞こえて足を止める。

するとそれは、アローザさんの声だった。

「本当に、あの子は誰に似たのかしら……」

どうせすぐ音を上げて戻ってくるに決まってるわ……」

どこか、寂しげな声。

やっぱり親だものね、娘が出ていくなんて寂しいに決まってる。

戻ってくるに決まっている……その言葉は、自分を説得させるようなものと、願いが込められていたようなものだった。

……もしかしたら、また逢うかもしれない。あの気が強い女性とは。

そう思っただけでなかった。

気付いたらまた結構時間が経っていて、もう夕方だったりするの
で今日はこの村の宿に泊まることになった。

その日の夜辺りに、何かがあると。そう、感じてしまった私は……
寝たふりをして、深夜まで時を待った。

十三話 親子の刻むその物語は……。 (後書き)

少し、伏線が張られていたということにお気づきの方はいらっしゃいますか？

こちらとしてはあまり気付かないでもらいたいものですが (苦笑) そんなこんなで十三話です。ちなみに合計では既に十五話……早いものですな、げふん。

十四話 夜と異常と魔法とお兄さんと戦いと……長いわ！（前書き）

オリ展開入りまーす

十四話 夜と異常と魔法とお兄さんと戦いと……長いわ！

エイトたちの寝息が聞こえる……

窓の外を見てみると、真っ暗で外に出ている人はほとんどいなかった。

満月と星は雲に隠されず、爛々と輝いている。

とはいえ時は深夜。わずかな光を思わせるぐらいだ。

けれど、夜に慣れている私には十分すぎる光だった。

ゆつくり少しだけ扉を開くと、その隙間にするりとその身を滑らせる。

そして気付かれぬよう音もなく閉めた。

流石にこの時間だ、起きている人間なんてそういない。

音もなく宿を出、気付かれないうま村を出る。

「……ふ……こつからはそこまで気配消さなくてもいいのね」

息をつく。トヘロス使えるのならそこまで気を張らなくてもいいんだけど、生憎今はレンジャーではなく魔法戦士。他の職業でいるよりもすばやさとかは無いし、気配を消して気付かれぬよう動くのは困難を極める。

此処まで気付かれないうけたのは長年の経験だろうか……此処までたどり着くまで大変だったし、きっとそうだろう。

さて、何故私がこんなことをしているのかというと。

何か、邪悪なものを感じたと言えは伝わるだろうか？

まあこれでわかる通り、なんの確証もない“直感”なのだけれど。でも、これで私は幾度となく敵を打ちのめしてきたんだ。

しかも何か、呼ばれているような気がする。何だろう？

邪悪な気を感じたのと、呼ばれた気がした場所は偶然か必然か、

同じ場所……リーザスの塔だった。

その理由はもちろんわからない。でも、それで放っておいて何かがあったとしたら。

行かないに越したことは無い……だから、こうして私は動いたんだ。

時間は早い方がいい。気付かれる確率も、時間が経つにつれ増えていくだろうし。だから、私はルーラを使う。

「……『ルーラ』っ！」

瞬間、一瞬でリーザスの塔の前に立っていた私がいた。

+ ・ + ・ +

それから数分後、私は塔の最上階へとたどり着く。

呼ばれた気がした場所は……まさにここ。

清らかな水が流れ、美しい宝石がはめられた石像が奥に立っている。

此処はリーザス村の人々にとっては大事な場所らしい。

今は深夜なので、辺りは暗闇に囲まれている。そこはかたなく不気味に思えるけれど、私には全然関係の無いことだ。これまでいかなる場所にも足を運んだ勇者が、こんなで怯えてちゃダメでしょう？

……女としてはどうかと思うけど。

まあ、とにかく真っ暗で。光も、やはり月と星の輝きくらいしかない。

私は辺りを見渡しながら、足を動かして像へと歩いていく。

何があるかはわからないし、なにも起こらないかもしれない。だから緊張の糸を緩ませるわけにはいかなかった。もし、緩みでもしたら。

その瞬間にグサリ……なんてことも、無くは無いのだから。

「しかし、誰もいないな……私の勘違い？」

それならそれでいいのだけれど……とは、口に出さない。

でも、その良い方向へとは話は進まなかった。

何故なら……私の行く手を阻むように、淡い青い光が現れたから。

その中に、人影も現れる。

一度見てからそう経っていない、姿。

重そうな兜と、堂々とした鎧を纏い、腰には剣を刺している……その姿は、像の記憶で見た姿と同じだった。

ゼシカの兄、サーベルト・アルバート。

彼は天に昇ったはずなのに……何故、此処にいるの？　そして、此処にいるということは、私を呼んだのも君なの？

疑問を口にしようとする、彼はこちらをふり向いて手で制す。

自分が話す——　そう言うように。

『君が、この世界に降り立った天使？』

『お、降り立った天使って……いやまあ、間違っでは無いです』

『そうか……だとしたら、タイミングが良かった。会えてよかった』

『そうですか……、というか、本当に呼んだの貴方なんですね？』

『そうだ。私は、君と話をしたかったんだ。君にだったら、ゼシカを任せることが出来ると思うから』

『はあ……ゼシカはもう先に行ってしまったましたが、それは追いかけて一緒に行けと言っているんですか？』

『無理矢理強制的にやらすような言い方をしないでもらいたいものだが……自然とそうなるだろう。』

君の仲間とは会う運命のようだ……いつかは巡り合える。幽霊になった今、何故かすべてがわかる』

はにかむサーベルト。私は驚くことしかできない。

幽霊になると全部わかるのか……っ！？　天使も人には見えないから似たような存在に思えるのに、私全っ然展開が読めない。私が落ちこぼれただけかな？

『で、貴方は私にゼシカを助けてもらいたいと、そう伝えるために戻ってきたんですね？』

『……そう、だな。しかし本当に君は……覚えていないのか』

『？　何のことでしょうか』

『いや、何でも無い。それよりも、ゼシカを頼む。ああ見えて意外

に弱いところがあるから。それじゃ私は——っ!？」

サーベルトが言っているときに、急に何か邪悪なものを感じた。これがきつと私を感じていた邪悪な気……一体、何なんだ？

サーベルトも気がついたようだ。目を見開いて、それからすぐに剣に手をかける。きつと幽霊の姿ではどうにもならないと思うけれど、癖なのだろう。それをどうこう言う気は私にはない。

邪悪な気がやがてこのフロア全体を包み、暗い霧が私たちの眼前に現れる。かと思うと、すぐに霧は晴れて邪悪な存在が身をあらわした。

その姿は、見たことのある魔物の姿。いつか倒した悪魔、妖女イシュダル。

水色の長い髪に、白目の無い真つ赤な瞳。髪と同色の羽根は静かに揺らめいている。

赤い、兎のような目はしっかりと私を見据え、それからサーベルトへ視線を動かす。

「ククク、久しぶりねえ……もう何年経つのかしら？ 覚えていないけれど、またこうして戦う機会をもらえたわ……」

「あの時の……」

「……知り合いか」

「敵。いつか私が倒した、魔物です」

「あらあ、魔物だなんてひどいわね。私は愛すべきレオコーンと共に時を生きるの……それなのに、また、一緒だったはずなのに……アナタが邪魔したせいで、何もかもうまく行かなくなった。もし生き返ることが出来たならば、真っ先にアナタを殺す気だったわ。だから今度こそ私はアナタを殺して一生レオコーンと一緒にいる。永遠に、二人の愛は途切れることは無い。だから今こそ絶好のチャンス。仲間もいない、一人同然のアナタに、さらに力を与えられた私を倒すことが出来るかしら？」

ククク……喉の奥から出すような笑い声に、私は嫌そうに目を細

める。

確かに、今私に過去の仲間はいない。しかし、侮ってもらっては困る。仮にも私は、十四歳にして世界を救った“勇者”フェリアスナ・レフィルなのだから。

この世界に何故いるかはわからないが……何にせよ、このまま放つとくわけにもいかなかった。このままでは一般人にも危険が及ぶ可能性だつて。

だから私は、刀を抜く。すらりと抜き放たれたその刃は、普段の剣よりも薄く、一人の私でも簡単にこの魔物を屠るような気分になせられる。

余裕をもった、嫌味な笑みでこちらを見据えてくる悪魔に、私は薄く笑みを返した。

——そんな簡単に私を倒せると思ったら、大間違いだよ

唇の動きだけで呟くと、地を強く蹴つて一瞬で悪魔のもとへ移動する。

それと同時に軽く、本当に軽く刀を向けるとイシュダルは手に持つナイフで防ぐ。

「ク、全然弱っちいじゃない？ 余裕かましてるけど、貴方は私には敵わないわ！」

私はまだ全力の十分の一すら出していないというのに、君の悪い笑い声を響かせてナイフを一閃する妖女。

これはある種の嘘ブラフと言える、作戦だった。その結果は後にわかると思う。この魔物は、余裕面してまんまと私の手に引っ掛かったのだ。

内心ほくそ笑みながらも、手加減して斬り合いを続ける。

そして悪魔が「終わりよ！」だなんて言って攻撃してきたときに私はほんの少し力を強めてナイフを跳ね返すのだ。

ギィ…… ツィン

寂しげな音を響かせて、魔物のナイフはあっさり弾かれ地に落ちていった。

前よりは強くなったような気がするけど……やはり、弱い。こんなので強い強い言ってもらっては本当に強いはずの勇者の名がかけられるじゃないか。

……って、なんか悪い人みたいな発言心の中でしてる！？　こう言うのやめよう……

イシュダルは、ただ立ちすくんでいるだけだった。自分よりも各下だと思っていた者に、裏切られたかのような茫然とした顔。作戦は上手くいったようだ。

けど、このまま放つとくのは色々とまずいと思う。弱いと考えると、きっとこの地域では強い部類に入るのだろう。村へ襲いかかったとしたら、村人は成す術もなくなってしまう。

しかも唯一の頼みの綱であるサーベルトもこの通り霊体化状態だ。守れるのは、今のところ私ぐらいしかない。此処で倒しておく必要がある。

「な……何故、なんでこの、私が……」

「はったりのようなものだよ。貴女は貴女が思っていた以上に私をみくびっていた。それだけだよ？」

何でまた生きかえったかはわからないけれど、私は貴女を退治しておく必要があるんだ。だから……」

一度言葉を切ると、一瞬で魔法陣を纏わせた。唱えるは、ヒヤダルコ。これは私の特殊スキルである、『原初』にて習得したものだ。けど、魔法戦士攻撃魔力はなかなかと言えど、強くなったイシュダルを一発で倒せるかはわからない。

イシュダルはいまだ立ちつくしている。やるのだったら、今だ。時間をかけて詠唱する。それも、普段は使わないやり方。いつもだったらただ一言呟くだけで発動するけど、効果が少なからず強くなるこの方法を選ぶ。

確かラフェットさんにもらった本に書いてあった……詠唱を長くするほど、効果は強まると。

その本には特殊な詠唱の時に用いる言葉も載っていた。すごい役

に立つなあれ……

とにかく、詠唱する。

「水の精霊に命ずる。汝らの道を閉ざせ。沈黙せよ。絶えざる歩みを続ける汝らの同胞に、我は一時の休息を与えん。静止せよ。凝固せよ——ヒヤダルコ」

慣れない響きが塔の最上階に響き、辺りが静まり返ったかと思うと、辺り全面が一瞬にして氷に覆われた。

予想以上の威力……イシユダルは抵抗することすらできずに氷の波にのまれ、淡い光と化して消えていった。

その様子を見ていたサーベルトが少し驚いたように声を漏らした。

『魔法の詠唱には、こんな方法があるのか』

「みたいです。私も初めて使用したのですが、こんなにも威力が大幅に上がるとは思ってもいなかった」

そう——、こんなに強くなるとは思ってた。これじゃ弱いマヒヤドレベルだぞ。

魔法を使う時の構えを解くと、氷は一瞬にして砕け散った。そして跡形もなく虚空に消えていく。

……構えを取ると消えるんだ。初めて知った……

まあ、なにはともあれ倒せたからよかった。てか、私強すぎない？ 原初があると既にチートレベルでしょ。

何故かつて救った世界ではなかったのに、急に『原初』という特殊スキルが現れたかどうかわからないのだ。エイトたちもそういうのは持っていたし、これも異世界補修の一つと思えばいいのかな？

……そう考えていたら、サーベルトが何故か苦笑して外を指さす。なんと、外は既に白み始めていて……

「え、まっまずいじゃん！！ 有難うございます！！？ それではこれにて失敬！」

サーベルトの返事も聞かずいつも通りにリレミトを使うと、外に出て私は走って行った。

『……アスナ、本当に覚えていないのか……その様子だとあの時の少年のことも。』

でも、この世界に來たという天使が彼女でよかった』

私がこの世界に來た理由の鍵を握る、一つのキーワードを——
——
サーベルトが一人、無人の塔で呟いていたことを知らずに。

十四話 夜と異常と魔法とお兄さんと戦いと……長いわ！（後書き）

超絶オリ展開。そして無駄に中二な詠唱呪文……

いや、拾ってきたのですが。

そこまで深く突っ込まないでもらいたいです、出来れば。

十五話 戦闘狂ほど迷惑なものは無い。(前書き)

またも久々。お待たせいたしました
ほぼ本編は進みません。いつまで引きずってんだ……
こちらはオリ多くて書きやすいです。

十五話 戦闘狂ほど迷惑なものはない。

そろり、そろり……と、足を忍ばせながら夜の宿を歩く。

いや、もう朝日は昇ってきている。時間は二、三時くらい……かな。それでもやっぱり人気は無い。助かったあ……

本当に、誰も起きてないことを願うよ。

なんとか音をたてないようにして自室の扉の前に立つと、そおつと開いた。

「ただいまあゝ……」

本当に小声で言うつと、そろそろと足を運ばせた。電気についていない、日が昇っていても暗い部屋。此処の窓はちょうどとなりの建物に面していて、日が差しにくいらしい。ちよつと好都合。

暗闇にはヤンガスのいびきがぐごゝつと響いている。ちなみに今日も三人同室。節約節約」

部屋に入ってベットまで歩いていこうとする。なんだか安心したよ。今となつてははつきりとした嫌な予感が、もう微塵もないんだもん。後はベットにダイブして、ぐつすり寝たい。

はああ、終わりゝ。と、思つて気が抜けたまま、ヤンガスのベットを素通り。私のベットは一番奥なんだよね、面倒な。一部屋に四つベットがあつて、入口の方からヤンガス、エイト、一つ空の挟んで私のような感じ。エイト考案で、なんでこんなのにしたかは見当もつかない。

ま、それは置いとくとして、へにゃーとした状態でエイトのここを通り過ぎようとする。

……と、その時だった。

「お帰り。勝手に寢床抜け出して、何処に出かけていたのかなあ？」
ビクンっ、と身体が跳ね上がる。だつてその声、他ならぬ我がリーダー……

…… エイトの声なんだもん。

なんで起きてんのよっ！？ いいそうになってけど今はまだ草木も眠る時間。なんとか堪えた。偉い？ …… ああもう、そんなことは意味ねえよっ。

「え、エイトさん……」

「だから、何処行つてたつて訊いてるんだよ？」

「いやいや、僕は…… じゃなくて、私はトイレに行つてただけで御座いますよ？」

「僕、見てたんだよ？ こっそり抜け出すの。日が昇る前だったよね」

当たりです。ごめんなさい。エイトさん、怖い、怖い、怖いよその顔。暗闇でもはつきり見えてしまうのが余計に怖いよこの腹黒近衛兵。口調が丁寧なだけに余計怖い。天使怯えさせてなにをするつもりさ！？

「ごめんさ」

「うん。それはいいけど、何処に行つてたの？」

「リーザスの塔です。星空見に行つてました」

「よろしい。じゃあお休みなさい」

「へ？ …… あー、お休み？」

「うんお休み」

あっさりだった。てっきり問い詰められるかと思つていたけれど…… まあいいか。こっちにとっちや好都合だ。

エイトはベットに再び潜ると、声を出そうとすることは無かった。ただ聞こえるのはすやすやと落ち着いた寝息。やっぱ君は寝るのが早いね。別にいいけど。私のかつての仲間にもそういう人はいたからね。

自分のベットに辿りつくと、ゆっくりと横たわる。力が抜けていくのがわかる。この瞬間に魔物に襲われたらちよつときついかもね。気分が柔らかくなっていながら目を閉じる。…… なのに眠気は何故かやってこない。眠いはずなのに、疲れているって分かるほど疲

れているのに何でか眠れない。

そのままにしてりやどうせすぐ眠気が来るよねと思ってから早十分。目はいまだに覚めたまま。困ったなあと、結局身体を起こした。

「星でも見よっかな……」

そう言つて、部屋についているベランダに向かう。日が昇つてきているけど、まだ少しは見えるかもしれない。日が差さない窓の反対側にあるベランダ。明るいからカーテンを閉めてあるから暗いけど、きつと外は見えるはずなんだ。

カーテンを少し開けてベランダに立つと、星はまだ薄く見えていた。

「……なんか、懐かしいな」

星……その言葉で思い浮かぶのは“星空の守り人”という言葉。

星空の守り人——そう、セレシア様は言っていた。

私のかつての家族のことを——天使のことを。

天使は役目を果たし、その魂は天に昇り“星空の守り人”になるという。

お師匠様も、きつと……あの中にいるんだろう。ラフェットさんも、皆もきつと。

もう会えない皆。そう思うと悲しくなってくる。

でもそう思つちやいけないんだ。私だって、人間を守るために生きてるんだから。お互い様だよな？ 彼らだって星空を守護してくれてる。だったら私も同じくもらつた使命を果たさなきゃ。

そう考えていると、自然と私はある歌を口ずさんでいた。死んでしまった幼馴染のレイジと作った曲。悲しくて寂しいその時に、よく歌っていたからつい、口ずさんでしまったみたい。

でもいいや。皆寝ているし、それほど大きな声でもない。この曲を知る人なんて、この世界には存在しないと思うし。……知っているのは元の世界の人だけだもの。

レイジと二人で歌ったり、アストが伴奏してくれて歌ったり。いつの日かこの曲は……私たちのパーティを示す存在となっていた。

でももう皆にはきつと会えない。決めたんだ。だから、この曲を歌えるのは私だけ。歌詞の本当に意味を知るのは私とレイジだけなんだから。

そうして私はずっと、二人が気付かないようにそつと歌い続けた

……

して、昼。

私たちはリーザス村を出て、とぼとぼと道を歩いていった。

ポルクから聞いたことによると、ゼシカの行先は港町の『ポルトリンク』らしい。そこにはゼシカ親衛隊なるものがあるらしくて、ゼシカだったら顔パスで船に乗れるそうだ。いいなあ、無料。^{タダ}

……じゃなくて、そしたら早くしないと。ゼシカがほかの大陸へ行ったら追いかけてくなくなっちゃうよ。エイトがお詫びもらえなくてちよつと殺気だつてるから怖くて仕方がない。下手したら戦闘狂エイトになっちゃうし……あうう、考えたくない。

と考えていたら、魔物出現。噂をすればなんとやらだけど……戦闘狂エイトも出現。『にげる』のコマンド押して今すぐ逃げたしたいです。ただでさえ殺気立ってるエイトがこんなだと、魔物が可哀想ですよ……

アルミラージ、おおきづちが二体ずつ。普通の人にとっちゃ多い数だけど、エイトには……

『ピヒヤ！？』

効かない。ええ、怖いですとも。エイトさんが。嵐のような勢いで魔物にストレス発散攻撃。して一掃。

私たちの出る幕は無く、殺気立ってるエイトさんだけが残る。

そしてくると、剣を持ったまま振り返るエイト。その顔怖い。早く仕舞ってその剣……でも仕舞う気配がない。

獲物を探している動物ですか貴方は。そして何でこっち見て不気味に微笑んだんですか。獲物見つけたような顔をして。

ヤンガスがぶるぶると震えだした。私も震えたいよ。だって本当

にエイトの顔が怖い。せつかくのイケメンが台無しだよ！？　つてこっち来るなああああああ！　剣構えたままエイト怖い黒い笑顔で来るなああああああ！！

「来んなエイトお！？」

「獲物！」

「お前誰だあああああああ！？」

人変わってる！　エイト変わってる！　怖い！？　あんた誰！？　もう混乱だよ！　お前ぶったおすよ！？　ストレス解消で私たちに攻撃するのやめよう！　戦闘狂だからって私たちにまで勝負挑んでくるのやめよう！？

私は刀を抜き放ってその場を退く。ぎりぎりヤンガスの丸い、しかし敵つい感じの手を掴めたので二人とも無傷。

でも地面は違った。銅の剣という弱い序盤の武器で、あっさり切り裂かれて一つの亀裂が走っていた。流石にレベル10ではこんなくらいだけど、十分強い戦士レベル。ヤンガス越してないか、この攻撃力。

「次は仕留める」

「だからあんた誰！？　流石にこれヤバイよ！　私もなんとかしなきゃ……」

「問答無用！」

「き、きゃあああああああ！？」

悲鳴をあげてやる！　だってこんなのないでしょ普通！？　何で仲間に攻撃してるんだよ。お前混乱してるのか？　そうなのか、え？　このままだと本当に屠られかねないので、戦う。

タップダンス……回避率を高くする特技。これなら楽か。

一瞬でタップすると、身体が軽くなった。基本職の特技も中々捨てたもんじゃないな。

エイトは10レベルとは思えない速さで斬りかかる。シャレにならないよ。真剣で仲間にとか、マジ頭いっちゃってる人しかないよね。

今度もさらりと避ける。エイトは警戒したように、剣を構えてぴたりと動きを止めた。熟練の戦士ですか、と突っ込みたくなる。

仕方ないので天使様による制裁をくだします。心を静かにするため、私は刀を仕舞って目をつぶった。

「あ、アスナ嬢ちゃん危ないですが「いいの、黙ってて」……わかったがす」

ヤンガスはちょっと心配してくれてるみたい。いくらエイトと同じレベルだといえ、素早さがエイトより低いヤンガスは成す術もなく、私に頼るほかない。自分は情けない、というような表情をしているけど大丈夫。君は強いからね、エイトが異常なだけさ（笑）笑う余裕なんてないけど。

心を静かにしようと努める。エイトは諦めたと思ったのか、駆けだしてくるけど……

「……ハッ！」

誰が私の姿を捉えられただろうか。私はエイトの後ろ側に移動していた。

なのにその後エイトが膝をついた。実は、手加減したけど腹を殴つとしたのだ。技、『無心攻撃』。バトマス専用のスキルで習得できる技で、結構強いため人間には手加減必須な技。

レベル10でも持ちこたえられるように無茶苦茶手加減した。いやあ、そっちが大変でしたよ。

「っ……！」

「ほい終わり。もうやめよ？」

「……」

エイトはまだ諦めてない様子で剣を拾おうとするが……
「さっさと諦めんかこの信号カラー!!」

叫んで剣を蹴り飛ばす。エイトは目を丸くして、固まった。

私は蹴り飛ばした剣を拾ってエイトの鞘に収めると、エイトがこ
う言う。

「し、信号カラーって酷くない!？」

「いきなり攻撃してきたやつが何言うかこの信号野郎！」

「なっ……う、ごめん」

「よろしい。じゃ、まず訊こうか。なんで僕たちを……じゃなくて！ 私たちに攻撃したの？」

「えっと……ドルマゲスと戦う時、相手は仮にも人間だから人間との戦い方をと」

「馬あ鹿！」

「わっ！？」

雄たけびさながらの一喝。流石に驚くよね。ヤングスなんて腰抜かせてぱったり倒れてる……

でもお構いなし。天使様の説教、むしろ有難く思うべきだしね！
「君の攻撃はね、仲間や人間に対するものではなかったよ！ 危ないっいたらありやしない。それに、城一つを滅ぼしてしまうほどの狂った魔術師をただの人間？ そんなわけないでしょ。確かに、私は見たことないよそのドルマゲスとか言う奴のことは。だから違うと君に言われたら何とも言えないし、そもそもお前には関係のないことだっって言われるかもしれない。でも、危険な奴に変わりないんですよ？ そしたら仲間に攻撃する方がどうかと思うんだ」

長く言っただけで、雄たけび効果で動けずにいる二人はどうも言えなかった。はあ、日常でも役に立つんだね。驚いた。でも、普通ならこういうと思うから、最後まで聞かせたかったんだ。

エイトは結局何も言えず、「ごめん」と謝るくらいだった。でも今回は無事だったから、許すとするよ。

さて、港町まで行くかな？

十五話 戦闘狂ほど迷惑なものは無い。(後書き)

シリアスばかりでもう……どうやったって、私のギャグはウケませ
ん。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4173u/>

ドラゴンクエスト? ~ 異世界の勇者の生きる世界 ~

2011年10月25日03時18分発行